翠玉慕情

ShellieMay

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
翠玉慕情

【Ｎコード】
Ｎ７２２３Ｘ

【作者名】
ＳｈｅｌｌｉｅＭａｙ

【あらすじ】
廣徳華奈子（たけとみかなこ）は、地下にある会員制クラブで１人の外国人に出会った。
婚約者を妹に奪われ、家も追い出されてしまうと知り、打ち拉がれた華奈子を、美しい緑の瞳を持つ彼は自分の屋敷に拐って行く。
優しく慰めてくれる彼に心を許す華奈子だったが、様子の変わって来た彼の態度に段々と不安になって…。
やがて、華奈子の家に伝わる『幸運と繁栄をもたらすエメラルド』と噂されるブローチを巡り、２人の思いと先祖の思いが交差する。

そして、舞台はアメリカへ…。

少しぽっちゃり系の至って普通な容姿の大和撫子×見た目は紳士なイケメン外国人俺様暴走系の富豪の恋です。

今回も『Ｃａｍｅｌｌｉａ　～カメリア～』から連城夫妻が、『新宿のネコ』から柴健司が客演してます。（笑）
時系列を合わせて読んで頂くと、面白いかもしれません。

毎日更新予定です！！

第1章

大通りから細い路地を入り曲がった角にある、地下に伸びる小さな階段。
その階段を降りきった所にある重厚な木製のドアの前で、若い女性が逡巡していた。
カツンという靴音に振り向き、驚いて泣き出してしまいそうな瞳を私に向ける。
「…Ｓｏｒｒｙ」
そう言って踵を返し階段を昇ろうとするが、私の躰がつかえて立ち往生してしまう。
「入らないのですか？」
私が日本語で尋ねた事に驚いたのだろう、少し目を見開き又逡巡し俯いてしまう。
重いドアを少し開けると、ドアの内側でカランコロンとドアベルが軽やかな音を立てた。
「…どうぞ」
そう声を掛けると、おずおずと私の顔を見上げ、じっと私の瞳を見詰めた後、諦めた様に一歩を踏み出した。
「いらっしゃいませ」
「こんばんは」
「今夜は、お珍しいですね」
店のマネージャーが、私の前に立つ彼女を見下ろして微笑んだ。
「あ…いえ…私は…」
そう小さく呟く心許ない様子に、私は自然に彼女をエスコートしてしまう。
「カウンターで宜しいですか？」
「え？」
「今夜が、デビューなのでしょう？」

その言葉に赤くなって俯き、彼女は小さく頷いた。
「どうぞ、こちらに…」
マネージャーの合図で現れたウェイターに導かれ、私達はカウンターに並んで座った。
「いらっしゃいませ、ご注文は？」
カウンターの向こうから、馴染みのバーテンダーが声を掛ける。
「私には、いつものを…彼女には…お酒は、お強いですか？」
「いえ…殆ど飲めません」
「それでは、ベリーニを」
彼女のピンクのワンピースに合わせ、私は軽いカクテルを注文した。
「畏まりました」
バーテンダーが去ると、溜め息と共に彼女の肩から力が抜けた。
「…無理矢理お誘いして、ご迷惑ではありませんでしたか？」
「いえ…助かりました。この様な場所は初めてで…1人で入るには、敷居が高くて…」
「お名前をお伺いしても宜しいですか？Ｍｉｓｓ…」
隣で顔を覗き込む私に、彼女は始終俯き加減で、少し考える様にカウンターに組んだ手を眺めていた。
名前を尋ねられ、本名を答えるべきか悩んでいるのだろう。
「私は、エドと申します」
そう言って手を差しのべると、彼女は慣れぬ手付きで握りながら小さく答える。
「私は…ケイ…と申します」
「本名では…無いんですよね？」
「名前の頭文字です」
ふんわりとした手の心地好さに握り返したまま手を離さない私を、少し抗議の色を孕んだ日本人特有の切れ長な目でチラリと見上げられ、仕方無く私は彼女の手を解放した。
私の手を拒むというのか…面白い…。
バーテンダーが私の前に琥珀色のバーボンの入ったロックグラスを、

彼女の前に薄桃色の気泡を上げるフルートグラスを置く。
グラスを持ち上げ、彼女が同じ様に持ち上げるのを待つと、私は警戒心を起こさせない様に細心の注意を払いながら微笑んだ。
「2人の出会いに、乾杯させて頂けますか？」
少し緊張した様に頷き、彼女はグラスを上げる。
軽やかなグラスが合わさる音を響かせて桃色の液体を口に運ぶと、その口当たりの良いカクテルに彼女は初めてフワリと花が綻ぶ様に微笑んだ。
「気に入って頂けましたか？」
「えぇ、とても美味しいですね」
「ピーチネクターとグレナデンシロップに、スパークリングワインを合わせたカクテルです」
「桃色が…とても綺麗…」
もう一度微笑んで一口味わい、彼女は珍しそうに店内を見渡していたが、見詰める私に気付き恥ずかしそうに俯いてしまう。
色の白いふっくらとした頬が桜色に染まったのは、酒の為かそれとも…。
「もしかして、どなたかと待ち合わせだったのではありませんか？」
入口で立ち往生していた様子を思い出して尋ねると、彼女は寂しそうに微笑んだ。
「…多分、来ては貰えません。はっきり約束をした訳ではありませんから」
「でも、期待している？」
「…そういう訳でも無いんです…ただ…ちゃんと話を聞いて欲しいと言われたので…」
「相手の方は、ここのメンバーなのですか？」
「え？」
「ここは、会員制のクラブなんですよ？」
「そうなんですか！？…メンバーなのかはわかりませんが…以前彼が、この店で誕生日を祝ってくれると言ったんです」

「お誕生日なのですか？」
寂しそうに頷く様子とは裏腹に、その淡いピンクのワンピースは、祝って欲しい彼女の気持ちの表れなのだろう。
店内に流れる静かなジャズが、彼女を優しく包み込む。
気を取り直した様に顔を上げ、彼女が私の瞳を覗き込んだ。
「エドさんは、この店のご常連なんですか？」
「エドで結構ですよ。この店には、週に2回程来ていますね」
「この近くにお勤めですか？」
「えぇ」
「とても日本語がお上手なんですね…お国はどちら？」
新しい経験に、少し興奮し頬を染めながら質問を続ける様子が愛らしい…幾つ位なのだろうか？
東洋人の年齢は判りづらい…クラブに足を踏み入れるのだから、20歳は過ぎているのだろう。
上品な佇まいの中に漂う初々しさと、少女の様なふっくらとした容姿が何とも言えない愛らしさを醸し出す。
クルクルと変わる表情を目を細めて眺めながら、少し笑って私は尋ねた。
「…私に、興味がお有りですか？」
そう尋ねた途端彼女の顔から笑みが消え、オドオドと目をさ迷わせ泣き出しそうな顔をして立ち上がった。
「…申し訳ありません…見ず知らずの方に、詮索する様な事…」
そう言って深々と頭を下げると、バッグの中の財布から数枚の紙幣を取り出した。
そして震える手でカウンターに乗せ、驚く私に申し訳なさそうに小さな声で尋ねた。
「…これで…足りるでしょうか？」
「待って下さい、ケイ…何か気分を害されましたか！？」
「いえ…本当に、申し訳ありません…」
震えながら頭を下げた彼女の目から、キラリと光る雫が床に落ちた。

私は慌てて立ち上がり、背中に手を添えて席に座る様に促したが、彼女はジリジリと後ろに下がりながら俯き辞退する。
驚いた…自分に興味が有るのかと尋ねただけで、同席する事を拒まれる等思いもしなかった…ましてや、女性に泣いて拒まれる等…。頑な態度に半ば諦めかけた時、彼女の背後から甲高い声が掛かった。
「…お姉様！？」
途端にビクリと痙攣した彼女がゆっくりと振り向くと、彼女の背後に居たカップルが揃って驚いた様な表情を見せていた。
「驚いた…やっぱり、お姉様だわ！こんな所で、何をしていらっしゃるの！？」
甲高い声の主は、余り似ていないが彼女の妹なのだろうか？
派手な顔立ちと化粧に負けない様な原色のサイケ模様のドレスをまとい、隣で微妙な顔をして佇む男にしなだれ掛かる様に腕を組む。
彼女は顔を強張らせて２人を見詰めると、悲しい瞳を相手の男に投げ掛けた。
「それにしても…お姉様も隅に置けないわね！孝さんと婚約破棄した途端に、もう次の男をくわえ込んでるの？然もイケメンの外国人！？引っ込み思案のお姉様にしては、意外なお相手だわね？」
「…そんな事」
「あら、私は安心したのよ？これで、心置き無く孝さんと結婚出来るもの。そうそう…今日、お父様にも話して許可を頂いたわ！孝さんが会社を継ぐと発表した途端に、お姉様との婚約破棄でしょう？お父様も気を揉んでいらっしゃって…私と孝さんの事、驚いていらしたけれど喜んで下さったわ！」
キンキンと捲し立てる妹を尻目に、彼女は静かに小さな声で男に尋ねた。
「…何故なの、孝さん？」
「…」
「…何故、絵美を連れていらしたの？」
「何を仰っているの、お姉様？孝さんがいらっしゃる所に私が同行

するのは、当たり前でしょう？」
「…説明…して下さるんじゃ…なかったの？」
「…華奈子」
煮え切らない表情を見せる男に、哀れみと侮蔑の眼差しを送り、彼女は店を出て行こうとした。
甲高い声が、その背中に追い討ちを掛ける。
「お姉様…私達、あの家でお父様達と一緒に暮らす事にしたの。それで申し訳無いんだけど、お姉様には家を出て欲しいのよね」
「あそこは、亡くなった母が…廣徳が引き継いで来た土地でしょう？何故私が出なければ行けないの？」
「でも、今はお父様の家であり土地でしょう？」
「それは…」
「やっぱり、婚約破棄したお姉様と孝さんが一緒に暮らすのって、不自然じゃない？」
「…」
「可愛い妹と幼なじみの孝さんの幸せと、廣徳海運の為に…お願いね、お姉様」
俯いて黙ったまま手に持ったバッグを握り締め、彼女は2人の横をすり抜けて入口に向かった。
追い掛けた私に、店のマネージャーが小さく頷く。
階段を駆け上がった私の目の前に、激しい雨を呆然と見上げる彼女の背中があった。
「…最悪…」
そう小さく呟くと、彼女は激しい雨の中を傘もささずに踏み出した。
「待って下さい！」
追い掛けて彼女の腕を掴むと、思い切り振りほどかれた。
「放って置いて！」
「待ちなさい、ケイ！」
再び手を握り、私の方に振り向かせる。
激しい雨と雷の中、ずぶ濡れになりながら揉み合い、彼女が叫んだ。

「貴方には関係無いわ！私達、家族の問題だもの！」
「そうかも知れませんが、話を聞いてしまった以上、放って置く事は出来ません！」
「手を離して！」
視線を私から外したまま、彼女は叫ぶ。
「離して！帰るの！」
「どこに帰るのです！？」
「家に…」
「先程の話では、帰る家は無いのでは！？」
雷鳴がとどろき、彼女はビクリと身を震わせた。
「…帰るの…お母様の所に…行くの…」
幼子の様に心許ない声を出す彼女の顎を引き上げ、焦点の合わない目を覗き込む。
「ケイ？」
天を引き裂く稲妻と響き渡る雷鳴と共に、一瞬にして世界が暗闇に覆われた。
「…華奈子」
呼び掛けた途端にカクンと私の腕の中の躰が崩れ落ち、抱き上げながら私は彼女の耳に囁いた。
「このまま貴女を拐って行きます…いいですね？」
彼女の手が、私のスーツの襟を握り締めた事を了承と受け取り、私は背後から近付くヘッドライトに向かい合図を送った。
屋敷に連れ帰り、着替えを渡して風呂に入る様に諭しても、彼女は放心した様に首を振るばかりだ。
仕方無くバスタオルで全身を拭いてやり、バスローブを羽織らせてやると、鼻を啜りながらぼんやりと私を見上げた。
「…誰？」
「エドですよ、クラブでお会いした…覚えていませんか？」
「…え…あぁ…貴方は…あのイシノセイなの？」
「え？何ですか？」

「私…名前から、てっきり女性だって…思い込んで…」
「ケイ？」
朦朧とした彼女は、ソファーで隣に座る私の膝に乗り上がる様にして、頬に手を添えると私の瞳を覗き込んだ。
「あの人達は、私から全て奪いたいのね…家も会社も…人も…思い出も…みんな」
「大丈夫ですか、ケイ？しっかりして下さい」
「貴方だけはね…ちゃんと私が守らなきゃって思って…ずっと…」
「守る？私を？」
「約束…そう、約束したのに……孝さんとも約束したのに…そんなに絵美が魅力的だったの？わかってる…わかってるけど……信じたかったのに…」
これは、彼女の中に溜まった澱だ…ずっと蓋をして来た心の中を、誰かに語り掛けているのだろうが…一体誰に？
「ごめんなさいね、ずっと守ってあげるって約束…私も果たせないかもしれない。でもね大丈夫よ…あの人なら、きっと貴方も元の居場所に戻してくれるわ。貴方は大丈夫…きっと戻れるわ」
「…ケイ」
朦朧としながらも、真剣に語り掛けて来る瞳に、私は彼女の背中に腕を回して抱き締めた…バスローブの下に隠れる柔らかな、少し熱っぽい躰が私に添う。
「…疲れてしまったの…何もかも」
「…華奈子」
「わかってるわ…これは夢よ…現実逃避した私の夢……マッチ売りの少女みたいに、火が消えると全て消えてしまう」
「世の中、辛い事ばかりじゃ無い…幸せな事を考えて…」
「無理…現実は辛い事ばかり……あの話の最後の様に、貴方の腕の中で消えてしまえたらいいのに…」
「いらっしゃい、華奈子」
私は彼女を抱き上げてベッドに運び、枕元に彼女を抱き抱える様に

座り、その背中を優しく撫でてやった。
「辛い事はね、泣いて涙と一緒に全て流してしまえばいいんですよ」
そうやって私は、一晩中彼女の事を撫であやし続けた。
「…暖かい」
一頻り泣き続けた彼女がそう言って寝たのは、明け方近くだった。

第2章

激しい腕の痛みに目覚めると、目に飛び込んで来たのは淡いピンクの薔薇と霞み草の生けられた大きな花瓶…昨日は確か、色とりどりのガーベラが生けられていた。
最悪の誕生日から、何日経ったのだろうか？
あのクラブを出た後、意識が朦朧とした私を、エドはこの屋敷に連れて来た。
雨に濡れた事と、絵美達に会ったショックで熱を出して…情けない程打ちひしがれた私を、エドは優しく一晩中抱き締めて背中を撫でてくれた。
初めて出会った、しかも外国人の男性に縋る等、いつもの私なら考えられない…だが、エドは…会った瞬間から、私に懐かしい気持ちを思い起こさせた。
寝苦しさに寝返りを打つと、ベッドの横に手付かずの食事の乗ったワゴンが、そして私の腕には点滴の針が刺さっていた。
腕の痛さに鬱陶しいその針を抜こうとすると、針の根元のチューブが外れ、腕に残った針から赤い血液が放物線を描いて溢れ出す。
シーツを汚してしまう申し訳無さに慌ててベッドを抜け出して洗面所に這って行き、ふと振り向くと流れ出す血を床に擦り付け、返って事態を悪化させた自分の愚かさに愕然とした。
下げてあるタオルを濡らし床を拭きながら、尚も腕から流れ出す血を見ていたら、何もかもがどうでもいい様な気がしてそのまま大理石の床に横になる。
ひんやりとした床の冷たさが、火照った躰に心地いい…夕陽に染まる薔薇色の部屋をボンヤリと見上げる私の耳に、コツコツという規則正しい靴音が聞こえた。
小さなノックの音の後、静かに部屋に入って来たエドが部屋の惨状を見て声を上げた。

「これは…ケイ！大丈夫ですか！？」
慌てて抱き起こされた私は、溜め息を吐いて謝罪した。
「…申し訳ありません…お部屋を汚してしまいました。スーツも汚れてしまいます。どうぞ、そのままで…」
「そんな事は、どうでもいい！！大丈夫なんですか！？」
「点滴をね…抜こうとしたんです。チューブが外れたら、血が吹き出して…止まらなくて…」
「あぁ…血が固まらない薬を入れてあるんですよ」
そう言いながら携帯を出して素早く通話を済ませると、自分のネクタイを引き抜いて私の上腕をきつく縛り、私を抱き上げてベッドに運んだ。
「少し熱が振り返した様ですね…食事も…又摂らなかったんですか？」
「…欲しく無いんです」
「せめて水分は摂って下さい。躰が参ってしまいますよ？」
「本当に…欲しく無いの」
大きな手が私の頬に添えられ、少し眉を寄せて心配そうな顔が私を見下ろす。
少し長めの波打った漆黒の髪、きりりとした男らしい眉に高い鼻梁。引き締まった少し厚い唇に、彫りの深い二重の双眸から輝く深く鮮やかな…私には馴染みの深いグリーン…。
「食事を摂るか、点滴をするか…どちらが宜しいですか？」
「どっちもいらない…このまま…寝てしまいたいの」
体調が悪く、躰が布団に沈み込みそうだからといって、こんな子供の様な我儘を今迄言った事は無い…やはり、私はどこか壊れてしまったのだろうか？
「困った人だ…それでは、私が拐った意味が無い」
クスリと笑って、ゆっくりとエドの顔が近付いて来た事に驚き、固く瞼を閉じて身を強張らせた。
「駄目だよ…華奈子」

エドはそう言いながら、私の頬と額にキスを落とす。
聞きたい事が沢山有る…何故私を拐って面倒を見てくれているのか、何故名前を知ってるのにケイと呼ぶのか？
そして、一体貴方は何者なのか？
エドの長い指が髪を梳き撫でる心地好さに、私は瞼を開けていられなくなり、そのままトロトロと微睡みに落ちて行った。

少し不安気な華奈子が微睡みに落ちてすぐ、メイドと医者、そして部屋の惨状を見て眉を潜めた男が部屋に入って来た。
「何があった？」
「点滴を外してしまったんだ。吹き出した血に慌てて、自分で処理しようとしたらしい」
笑いを噛み殺しながら私が説明すると、男は眉間の皺を深くして吐き捨てた。
「馬鹿なお嬢様だ…叫び声のひとつも上げれ無いのか！？」
「そう言うな…可愛いじゃないか」
どこがと言って腰に腕を当てるこの男は、田辺剣…私の学生時代からの口の悪い親友であり、現在は私の有能な秘書だ。
「エド…この女に、入れ込み過ぎじゃないか？」
「…どうかな？」
「蒼龍の女だぞ！？仇の娘だろう！」
「剣…声が大きい。華奈子が起きてしまう」
田辺の肩を組んで部屋を出ると、メタルフレームの眼鏡を外し、胸ポケットからチーフを出してイライラとレンズを磨きながら彼は溜め息を吐いた。
「偶然なのか？それとも、俺にも言えない情報から探し出したのか？」
「偶然だ…お前に隠し事なんて、何も無いよ。バーで出会って、いざこざがあって…連れ帰ってから気になって彼女の身元を調べてみ

たら、２７年前の写真が出て来た」
「彼女の両親の婚約を内外に知らせる写真だったな…現在アレは、廣徳の奥方が持っているのか？」
「華奈子の母親は、１２年前に他界している。現在は当時から妾だった女が、当主と結婚して正妻の地位に就いているが…アレは、２７年間一度も表には出て来てはいないらしい」
「廣徳の幸運の守り…幸福と繁栄を与えるって言われてるんだろう？」
田辺が訝しげな視線を投げ掛けた。
「そうらしいな…ともあれ、長年探し続けていたお宝を取り戻すチャンスが巡って来たんだ…彼女には、精々協力してもらわなければな」
「…そう言いながら…楽しんでいるだろう？」
「さぁ…どうだか」
「何年の付き合いだと思っている！？ミイラ取りがミイラになるなよ？」
「私が！？有り得ないだろう？」
あんな世間知らずの小娘に…田辺は何を心配しているのか…。
「エドワード様」
廊下で話す私の姿を見付けて、医師が駆け寄った。
「そろそろ限界です。如何致しましょう？」
「意識は？」
「朦朧としておいでです」
「点滴は？」
「血管が細くて脆い…肘、手の甲、下腕の血管は、直ぐには使えません。喉を切開して、直接胃にチューブで水分と栄養分を与えるという方法を取った方が、良いかもしれません」
「それは…彼女の意志次第だな」
私は踵を返して華奈子の部屋に戻り、彼女の横たわるベッドに腰を下ろした。

「…ケイ」
幾分やつれた華奈子の頬に指を這わすと、彼女は気だるそうにうっすらと瞼を開けた。
「先程の質問…どちらか決心がつきましたか？」
「…な…に？」
「食事を摂るか、点滴をするか…どちらが宜しいですか？」
「…」
「このままだと、喉を切開して水分と食事を補給する事になりますよ？」
「いや…いらない…」
「死んでしまいますよ、ケイ？」
ごろりと寝返りを打ち横を向くと、華奈子は目を閉じて寝る体勢に入ろうとする。
折角掴んだ手掛かりを、みすみす死なせる訳には行かない…私は、華奈子の髪を指で梳きながら優しく尋ねた。
「ケイはまだ若い…これからやりたい事も沢山有るでしょう？」
華奈子は、黙ったまま微かに首を振った。
婚約者と妹に裏切られ、家を追い出されたのが余程ショックだったのだろうが…此方にも事情があるのだ。
「それでは、何かやり残した事は？心残りな事もありませんか？」
梳き撫でる指先に微かな反応が有り、華奈子はゆっくりと瞼を開く。
「…あ…る」
「ならば、生きる努力をしなければなりません」
私は華奈子を抱き起こすと、視線で皆に退室を命じ、ベッドサイドに置かれたスポーツ飲料の入ったグラスを手に持って口に含んだ。
華奈子の顎を引き上げると、そっと唇を合わせ少しずつ液体を流し込んでやる。
ぐったりと私の腕に躰を預けた華奈子は、唇を合わせた瞬間抵抗する様に躰を強張らせたが、やがてゴクリと音を立てて液体を嚥下した。

「いい子だね…華奈子」
そのまま2口、3口と飲ませると、だんだん意識が覚醒して来た華奈子が、頬を染めながら私の袖口を掴み視線を泳がせる。
「大丈夫、これはキスじゃない…医療行為です」
そんな言葉にホッとした様に掴んだ手を離し、私の目を覗き込み恥ずかしそうな笑みを返した。
あの晩と同じ…フワリと花が綻ぶ様な笑顔。
思わず華奈子の濡れた唇に、啄む様に唇を合わせる。
「これは…濡れた唇を…拭き取っているだけ…」
言い訳めいた台詞を吐き、柔らかな唇に舌を這わせ、その唇を食み、怯えて震える躰を抱き締め、逃げようとする頭を項と後頭部を掬い上げて固定させる。
全てを覆い尽くす様に唇を合わせ耳の後ろを親指で撫でてやると、熱い吐息と共に小さな歯列が開いた。
「…ん」
口腔に舌を侵入させると、華奈子の小さな舌が逃げ惑う。
資料には２４歳とあった…婚約者が居たにも関わらず、この初々しい反応…間違い無い…華奈子はキスの経験も殆ど無い、バージンだ。
「…あ…エド……ん……」
息継ぎをする度に切なそうに喘ぎ、片手は私のスーツの襟を握り締め、もう片手は抵抗する様に私の肩を押し戻そうとする。
逃げる舌を追い掛け、絡めて吸い上げてやる…甘く舌先を噛み、舌の裏側と上顎を擽ってやると、熱い息と甘い呻きを漏らした。
背中から脇腹、腰と、その柔らかな手触りを堪能しつつ優しく撫で回してやると、官能を覚えて腕の中で小刻みに震える。
突然カクンと華奈子の力が抜けて解放してやると、私の腕に躰を預け双眸からポロポロと涙を溢して泣きじゃくった。
他愛の無い…まるで１０代の少女の様だ。
…だが、何と愛らしい…。
「…何故…？」

涙の合間から、少し咎める様な…恥ずかしさと不安の入り混じった、小さな呟きが漏れる。
ゆっくりとベッドに寝かせてやり、ベッドサイドに飲み物を用意してやると、私はそっと華奈子の耳元に囁いた。
「今夜は、ゆっくりお休みなさい…明日からは、少しずつ食事も摂るのですよ。いいですね？」
啜り上げながらも頷く華奈子の髪を撫でてやり、私は彼女の額に口付けを落とすと、もう一度お休みと言って部屋を辞した。
華奈子を籠絡するのは容易いだろう…私に好意を寄せているし、先程も殆ど抵抗しなかった。
彼女から廣徳家の情報を引き出し、アレを取り戻し…廣徳家の人間に復讐する。
それは、我々一族の悲願だ。
曾祖父と曾祖母を死に追いやり、祖父から命より大切なアレを掠め取り、奈落の底に陥れた廣徳の人間を、我々は許さない…。
「華奈子…君に怨みは無いが……最後迄付き合ってもらうよ」

翌日から、華奈子の食事に付き合う日々を続けた。
食事が進まなければ口移しで食べさすと脅すと、華奈子は嫌がりながらも食べる事に同意した。
スプーンで一口、又一口と運んでやると、少し抗議を孕んだ眼差しを向けながら口を開ける。
自分で食べられるという華奈子の意見を制してこんな行為に出るのは、あくまでも嫌がらせの為だ。
だが拐って監禁し、無理やり食事を与えるというこの状況に、どうしようも無くゾクゾクと興奮する自分が居る事も事実だ。
食事が終わると、当然の様に甘い口付けを与えて、柔らかな躰を抱き締めた。
最初の頃よりは幾分慣れたが、不信感があるのだろう…まだ、私に

心を預け無い。
「何やってるんだ、お前…」
私の様子を見て、田辺が呆れた様に苦言を吐いた。
「滅多に経験出来ない事だと思わないか？」
「普通は、手が後ろに回るだろうよ。だが、あの女…何故逃げ出そうとしないんだ？」
「帰る場所が無いんだ。当主に連絡したら、構い無しと言われた。あれは…追い出せて精々しているといった感じだったな」
「何憤っているんだ、エド？」
「え？」
「おかしいぞ、お前…」
「何を言っている」
田辺の言葉に反発しながら、私は華奈子を構い続けた。
少し泣きそうで、恥ずかしそうな華奈子の困った顔を見るのも、彼女がビクリと怯えるのも、苛めている感があって興奮する。
躰が元気になるにつけ、華奈子は平常心を取り戻して行った。
動揺を胸の中に押し殺し、何でも無い様に振る舞う…小賢しいが、堪える姿も面白い。
「可愛い、華奈子」
そう言ってやると、最初は本気で恥ずかしがった。
美しいでも無く、綺麗でも無く、華奈子には可愛らしいという表現がぴったりだと、口を付いて出た自分の言葉を聞いて思った。
最近はそう口にすると、からかわれていると思うのか、少し寂しい表情を見せる。
心外な…華奈子に対してそう思うのは、本心なのだが。
私は、華奈子を…。

第3章

エドの屋敷は、山の手の閑静な一等地にあった。
古いが手入れが行き届いた洋館は、広大な庭を配したお伽噺に出て来る様な屋敷だ。
住んでいる本人も、お伽噺の王様の様な美しさだから、何となく納得してしまう…不思議なのは、そんなエドが何故私などを構うのかという事だ。
相変わらず互いの事は何もわからない…いや、私の名前も知っているのだから、きっとエドは私の事を調べて知っているのだろう。
あの日以来、エドは私とスキンシップを取ろうとする。
最初は、私に食事を与える為の手段だと思った…ちゃんと食べないと口移しで食べさすと脅し、幼児に食事を与える様に私の世話を焼いた。
しかし食後には必ず、ご褒美と称して濃厚なキスをしてくるのだ。
やがて普通に食事が出来る様になると、それは時間と場所を構わずに仕掛けられた。
甘い言葉を囁き、髪を撫で、指を絡め…抱き締めてキスをしようとする。
最近では、使用人の前でもお構い無しだ。
良家の使用人は、主人のプライベートに顔色を変えたりはしないし、口外する様な事は無い…ましてやエドは外国人で、日本人の我々とは感覚が違うのかも知れないが、私にしてみれば居たたまれないのだ。
いくら素敵な人物だからといっても、名前も素性もわからない外国人に…からかわれているとしか思えない。
それなのに…。
「こんな所に居たのですか、ケイ?」
庭の一角に有る、大きな温室の中に、独特のビブラートを掛けた美

声が響く。
温室の入口からゆったりとした歩調で入って来る、長身の逞しい体躯。
そしてその緑の目が、私を見付けた事を悦び妖しげに揺らめいた…
そう、まるで…獲物を見付けた肉食獣の様に…。
「…探しましたよ…屋敷の中でも、携帯を持って下さいとお願いしましたが？」
それは、お願いでは無く命令…ＧＰＳで私の位置を探索する為のアイテム。
温室の入口に佇む田辺の、眼鏡の奥から注がれる冷ややかな視線に怯え、私はエドから携帯を受け取り会釈をして踵を返そうとした。
「っ！？」
すれ違い様に薔薇の棘が服に絡まり、無理に剥がそうとして指を刺してしまう。
「あぁ…棘の先が入り込んでしまいましたね…取り出さなければ化膿してしまいます」
すかさず指先を捉えられ、手を引こうとするとクスリと笑われる。
「自分で出来ます」
そう言って再び手を引くが、掴んだ手を離す気は無さそうに、胸に刺さったスカーフピンを引き抜いて、エドがニッコリと笑う。
「動かないで…これ以上、ケイの指を傷付けたくありませんからね」
そう言いながら、私の指にツプリと針を刺す…治療をしてくれているのに、笑顔で針を刺すエドが…まるで楽しんでいる様でブルリと震えた。
やがて、エドは眼差しを私に向けたまま、掴んだ指先をゆっくりと口の中に入れると、血に濡れた指をしゃぶりだした。
「…エド、もういいです…離して」
その答えは、指先を噛まれる事で答えられ…その後もたっぷりと時間を掛け、まるでアイスキャンディを舐める様に私の指先を味わった。

「部屋に帰って、消毒しましょう」
やっと指を解放されたと思った途端、今度は腰をしっかりと抱かれて誘われる。
温室の入口に、鋭い視線で成り行きを見守っていた田辺が声を掛けた。
「エド…この後…」
「キャンセルだ」
田辺は苦々しく私を見下ろすと、一礼して身を引いた。
この屋敷に意志の有る視線は、エドの捕らえて離さない様な視線と、田辺のあわよくば排除してしまいたいという視線だけだ。
どちらにしても居心地が悪い…最初は、もっと穏やかな物だった筈なのに…。
部屋に戻って私をソファーに座らせると、エドは使用人の持って来た救急箱を受け取り、自ら私の指を消毒し始めた。
「…お話しがあります」
意を決して私が切り出すと、エドは視線を指先に落としたまま答えた。
「何でしょう？」
「…体調も戻りましたし、そろそろお暇を頂きたいと思います」
消毒した指に絆創膏を張り、エドはクスリと笑い私の指と自身の指とを絡めた。
「どこに帰ると？」
「私の家です。何か問題が？」
「貴女をこの屋敷に引き取った時、私は貴方の父上に連絡を入れました…答えは、『構い無し』でしたが？」
「聞いて無いわ！」
「初めて言いましたからね。貴女から何もお尋ねになりませんでしたし…。」
愕然とした。
私は、本当にあの家を追い出されたのだ…。

「私の家をご存知だという事は、私の事は既にお調べ済みという事ですね？」
「えぇ」
「じゃあ、何故私の事をケイと呼ぶの！？」
大きな声を上げた私に少し目を見開いて、エドは悪戯そうな光を宿した瞳を私に向けた。
「貴女から、自己紹介を受けておりませんから」
そう言って、余裕の笑みを私に返した。
悔しいがその通りだ…下唇を噛み締めて、私はエドの手を振りほどき立ち上がった。
「…廣徳華奈子（たけとみかなこ）と申します」
「エドワード・バークレイです」
「バークレイ？…まさか、バークレイ・コンツェルンの！？」
「ご存知ですか？祖父の会社です」
私はヘナヘナと椅子に座り込んだ。
何と言う事だろう…バークレイ・コンツェルンといえば、世界有数の財閥ではないか！？
その孫と言う事は、エドは本物の御曹司という事だ。
それに…私にとっては…。
「…何をしていらっしゃるの？」
「日本にですか？仕事ですよ。我社のアジア・オセアニアの統轄は、日本で行っていますので」
「違うわ…こんな所で、何故私の相手などしているのか、お尋ねしているのよ！？」
「…貴女を…口説いている様には、見えませんでしたか？」
「ふざけないでっ！！」
「ふざけているつもりはありません」
サラリと言ってのけたエドが…ニヤリと笑った。
私の家は、廣徳海運という中規模の海運会社を経営している。
元は、母方の曾祖父が設立した蒼龍商事という貿易会社だったそう

だが、戦後海運会社に鞍替えしたらしい。
だがその会社も、最近の不況の煽りをまともに受けて、今では会社の土地も抵当に入っている有り様で…とてもエドの会社が乗っ取る程の価値が有るとは思えない。
ましてや、特別容姿に恵まれてもいない自分を、エドが望むとも思えなかった。
…とすると…理由は、自ずと絞られる。
「華奈子？」
突然黙り込んで考え始めた私の思考を、エドが呼び覚ました。
「…貴方もなの？」
「何がです？」
「貴方も、あの石が目当てなのね？」
私の呆れた様な視線を、エドは真正面から受けた。
「素晴らしいエメラルドを所有しているのは存じ上げていますが…それとこれとは、別問題です」
「…嘘ばっかり…貴方も、あの噂に踊らされているの？」
「幸運と繁栄をもたらす、奇跡のエメラルド…内包物の殆ど無い、極上のグリーンだとお聞きしています」
エドの瞳が揺らめいた…あの石と同じ鮮やかなグリーン。
「確かに、あの緑は貴方にお似合いになるでしょうが…そんな、たいした代物ではありませんよ？」
「何を仰っているのです？」
何故か、エドの眉間に縦皺が寄る。
「噂に…踊らされているだけです」
「…まさか」
「本当に無責任な噂なんです…今の廣徳海運を見て頂ければ、おわかりでしょう？」
フッとエドの顔から侮蔑の色が見て取れた。
「その廣徳家の御当主…源蔵氏より、貴女に伝言なんですが」
「何でしょうか？」

「明日、2時に…ご自宅にお越し頂きたいと」
帰って来いでは無く…お越し頂きたい…か。
「…承知致しました」
「私も共に参ります、華奈子」
「…お好きになればいいわ」
エドと共に座る居心地の悪さに、私は席を立ち窓辺に向かった。
「昼食は、テラスで頂きましょうか？」
「…いら…」
「いらない…等と、仰らないでしょうね？」
そう言ってエドは立ち上がり、窓辺の私の隣に立つと、私の腰を引き寄せた。
「又、口移しで…飲ませて貰いたいのでしたら…ご希望に添いますが？」
フレンチキスを落としながら、エドは挑戦的な笑みを私に送る。
「…貴方の手には、入らないわ」
「必ず手に入れますよ…エメラルドも…貴女も…」
「貴方には、価値の無い物だわ…私と同じ様にね」
「それを決めるのは、貴女じゃ無い…」
エドの瞳に、焔が見えた…碧翠に輝く焔…。
「無理よ！」
「…試してみますか？」
背中に腕が回されて抱き締められると、ゆっくりと唇が重ねられ、慣れた仕草で翻弄される。
悔しさに、眦に涙が溢れた…エドに逆らえない躰と…度重なるキスに、本当は少しでも自分の事を求めてくれているのかもしれないと、期待してしまった馬鹿な自分に腹が立つ。
「…貴方なんて…大嫌いよ！」
唇が解放された途端にいい放つ私を、エドは私を腕に抱き込んであやす様に撫でて笑う。
「それは、私が華奈子の特別になったと言う事ですか？」

「特別に大嫌いだわ！」
「それは、嬉しいですね」
「…変だわ、貴方」
訳がわからず見上げると、エドの嬉しそうに蕩ける笑みをまともに見てしまい赤面する。
「まるで、華奈子から告白された様です」
「有り得ないわ！嫌いと言ったわ！！」
悔しくて又涙が溢れるのを、エドの手が優しくあやす。
「いい子ですね、華奈子…貴女に、激しく強い面も有ると知って、私は嬉しいんですよ？」
「嫌いよ…」
「少し休みますか？昼食迄は、まだ時間があります…それとも、泣き足りない？」
子供扱いされた事に腹が立つよりも、高ぶった感情をどこにもぶつけようが無くて、自分の拳を噛んでウーウーと唸る。
エドは、私を抱えてベッドルームに連れて行った。
そしてベッドに腰を下ろしたまま私を膝に乗せて抱き締めると、私の口から拳を引き離し、その手に労る様にキスをする。
「誰も居ません…泣いても構いませんよ」
「…貴方が…居るわ」
「もう色々見せてしまっている私には、今更恥ずかしくは無いでしょう？」
そう言って、額に音を立てキスをされた。
一粒の涙が零れ…後はもう抑え様が無かった。
自分の事、エドの事、裏切られた家族や婚約の事…様々な事が走馬灯の様に頭の中を駆け巡る。
大嫌いな男の胸に縋って泣くのは、それが刷り込まれているから…最初の晩に優しく泣かせて貰った広い胸と、エドの躰から香るオリエンタル・ムスクのフレグランス。
「…可愛い…華奈子」

頭の上から、心にも無い言葉が掛けられ、私は又涙を流した。
この人は、最近そう言って私をからかい、愉しそうに笑うのだ。
男性にそんな言葉を掛けられた事が無いのを見越して、わざと甘く囁いて来る。
馬鹿な期待等するから苦しむのだ…心を研ぎ澄まし、平常心を保ちなさい…遠くから祖母の声が聞こえた気がした。
あの石は…あのブローチは、曾祖父の代から伝わる我家の秘宝だ。
今迄も、数々の甘言を弄する者達が、石の噂に惹き付けられて手に入れようとやって来た。
曾祖父の代では、外戚や曾祖母の親族からも狙われたらしい。
だから、廣徳の直系の者のみが守る様に遺言されて来たのだ。
祖母と母の代では、富を得ようとする資産家からの申し入れが殺到した。
現在も余り変わらない状況だが、一番酷いのは養子である当主自らが狙っているという点だろう。
資金繰りに窮している廣徳の当主は、あの石を高値で売却したいのだ。
『東海龍王、敖廣(ごうこう)の名に置いて、我血族に告ぐ。彼(か)の翠玉を守り、我遺言を完遂せよ』
廣徳の直系で男子が産まれるのは非常に稀で、直系男子は決まってこの二つ名を使う。
それは絶対権力の証…そしてこの名が使われた誓いには、我血族は…蒼龍の乙女は命を懸けて守らなければならない…。
それは祖母から教わった、古(いにしえ)からの教え…。
それも、もうすぐ終わる…不甲斐無いが廣徳は私の代で絶えてしまうだろう。
だから、せめて最後の私だけでも守りたい…何としてでも、命の続く限り…私は『真実の扉』を開けたのだから…真実を知ってしまったのだから…。
最後の蒼龍の乙女として、命に代えてもあの石は私が守り抜くのだ！

第４章

漆黒の豊かな髪を大きく結い上げ、女性にしては高過ぎる鼻に少し大きな口、スペインの血を色濃く継いだ少し浅黒い肌…そして、誰をも魅了して止まない深く澄んだグリーンの瞳。
窓辺に座り片肘を付いてボンヤリと外を眺めるその女性を、少年は勉強の手を止めてうっとりと見詰めていた。
「…僕も、お母様の様なグリーンの瞳が良かったなぁ」
少年の拗ねた様な声に、彼女はフッと笑みを漏らして視線を投げた。
「私は貴方の父親譲りの、そのブルーの瞳が大好きだけど？」
そう言うと、少年の前に屈み込んで頬に優しくキスを落とす。
「本当に綺麗なマリンブルー…トマスと同じ色だわ」
「でも、やっぱり僕は、エメラルドグリーンの瞳がいい！」
子供っぽい駄々を捏ねる息子を見て、彼女はコロコロと笑った。
「私達一族でも、必ずこのグリーンの瞳が産まれる訳じゃ無いのよ？」
「そうなの？」
「だけど、貴方の子孫には出て来る可能性が有るわね」
「その瞳の子供が産まれると、一族が栄えるって本当！？」
「…どうかしらね？それより勉強ははかどっているのかしら、ヘンリー？」
「何で日本語なんか…計算なら得意なのに」
ヘンリーが膨れると、その頬を突っつきながら彼女が笑う。
「今から、ドラゴンの国に行くのでしょう？しばらくは、あちらの生活になるし…言葉を覚えると、相手の心も見える。いい事だわ」
「ドラゴンは、英語を話せるでしょ？」
「でも、ドラゴンの家の人達は話せないわ。日本に行けば、ドラゴンのリトルレディも待っているのでしょう？話せなくてもいいの？」
ヘンリーは、また口を尖らせる。

「何と言ったかしら、こういうの…ゴウニイッテ…」
「郷に入っては、郷に従え…だよ。ただいま、ダーリン」
「お帰りなさい、貴方」
「準備は整っているね？」
「…えぇ」
トマスは愛おし気に妻の頬を撫でて、ゆっくりとキスをした。
「それじゃ、行こうか」
トマスは床に置かれた旅行鞄を持ち、妻と息子を促すと馬車に乗り込んだ。
「トマス！トマス、こっちだ！！」
港に着くなり大きな声に呼び掛けられ、見渡すとのっぺりとした顔の紳士がステッキを頭上に振り回していた。
「やぁ、トマス！！立派な船じゃないか！？」
「ありがとう、ドラゴン」
固い握手を交わす紳士に、ヘンリーは得意気な顔を上げた。
「ドラゴン、もう船は見たの！？」
「外からだけね。君も見るかい、ヘンリー？」
ウンと元気良く答えるヘンリーと共に、紳士は船首の見える位置に移動した。
黒と白の船体に、金色の装飾が眩しい客船は、最新式のスマートなフォルムを誇っていた。
「見て！！ドラゴン！！」
ヘンリーが指差した先には、金色の飾り文字で船の名前が書かれてあった。
「お母様と同じ名前だ！！」
『エスメラルダ』…まさかこの美しい船が、処女航海で海の藻屑になるなど…誰が知り得ただろう？

夜中に目を覚ますと、外は雷雨になっていた。

久々に見た夢…それは、遠い先祖の記憶。
ただ…余りに鮮明なのは、繰り返し繰り返し聞かされた祖父からの昔話と、想いの強さからだろう。
あれから華奈子は昼食に降りて来る事が出来ず、夕食も部屋でサンドイッチを摘まんだだけだと聞いた。
明日は顔を合わす事が出来るのだろうか…一緒に廣徳家に行く約束をしたが…。
電話で話した傲慢な当主や、クラブで会ったキンキン声の妹、不甲斐無いその婚約者には、正直何の興味も感情も湧かない。
それは、直接廣徳家とは関わりが無いからなのだろう。
だが…華奈子に制裁を下すと考えるだけで、ゾクゾクとするこの感情は何だろう？
掌に乗せた生まれたばかりの雛鳥を、どう料理するか迷うのだ。
羽根をむしってしまおうか？
握り潰してしまおうか？
それとも、食べ頃になるまで慈しみ育て上げて、生きたままかぶり付こうか？
雨足が激しくなり稲妻が走る…私は部屋を抜け出すと、そっと華奈子の部屋に入った。
ベッドに座り、布団を抱く様にして眠る彼女の頬を、指の背でそっと撫でる。
可愛い華奈子を…滅茶苦茶に壊してしまいたい…一体どんな顔をして私を見上げるのだろう？
温室で私に指を刺されても、ねぶられても…少し眉を潜めただけだった。
お前は何処まで耐えられる？
私を特別な男と認識し始めた時点で私の術中に嵌まってしまっているのを、華奈子はまだ気付いていない。
嫌いだと言いながら私の腕の中で泣くお前が…愛おしくて…噛み付いてしまいたい衝動を抑えるのに私が苦労しているのを、お前は気

付いていないだろう？
だが、華奈子を傷付けていいのは私だけだ…だから、お前は私が守る。
華奈子が私の屋敷に来てから、屋敷の周りに不穏な影が見え隠れする様になった。
差出人不明の手紙や贈り物、その殆どが華奈子への誹謗中傷…そして、中には直接彼女に危害を加える物が混入されていたりする。
華奈子…お前はいつもこんな事をされていたのか？
一度、華奈子の目に触れる場所に置いて見たら、彼女は平然と毒の混入されている菓子を棄て、手紙を燃やした。
そして、何事も無かったかの様に振る舞った。
もう一度言おう…お前を傷付けていいのは私だけ…だから、お前を傷付け様とする者に、私は容赦しない…。

廣徳家の古い門を潜り抜けると、初老の男性が私達を迎えた。
「お帰りなさいませ、お嬢様」
「ただいま、土屋…この家で私にお帰りなさいと言ってくれるのは、もう貴方だけになってしまいましたね」
土屋と言われた執事は、悲しそうな眼差しを華奈子に向けた。
「私も…そろそろお暇を頂くつもりでおります」
「もう、お父様に言いましたか？」
「はい、先日…」
「…私が常々貴方に言って来た事、覚えていますね？」
「はい」
「今日、決行します。宜しいですね？」
「畏まりました…あの、お嬢様のお部屋なんですが…」
「いつもの事でしょう？承知しています…」
華奈子はそう言うと、ズンズンと歩を進めた。
門構えは日本的な物にも関わらず、建物はケバケバしい洋風建築…

古い物では無いが、何とも品の無い…。
私の様子に気付いて立ち止まり、華奈子は遠い目をして庭を見詰めた。
「昔は、純和風の落ち着いた邸宅で…昔の政治家の方から譲り受けた家だったそうです。私も大好きでしたが…女主人が変わると、家も変わってしまいました」
「…寂しいですか？」
「もうずっと…私の家ではありませんもの…何とも…」
華奈子はくるりと庭を背にすると、大きな扉を自ら開けた…そういえば、案内をする家政婦も居なかった等と気を取られていると、中から甲高いけたたましい声が迎えた。
「いらっしゃい、お姉様！ご機嫌如何！？」
絵美の来ている振袖を見て、華奈子はキュッと唇を噛み締め、何も言わずに私を誘って部屋に入った。
「いらっしゃいませ、バークレイ様。本日はお越し頂き光栄に存じますわ」
「お招き頂き、ありがとうございます…Ｍｒｓ．廣徳」
「あら、美代子とお呼び下さい…私もエドワードと呼ばせて頂きたいわ」
似非宮殿の様な部屋で、これでもかと着飾った母娘は、何だか哀れですらある…それでも着けられた宝石に目が行くのは、私の探している物がエメラルドのブローチだからだ。
流れる水の様に話す美代子の帯に、大きな緑の石を填めた帯留めが光る…すかさず美代子が私の視線を捕らえた。
「これですか？まぁ、我家にも色々と噂の有る宝石がございましてね…」
「違いますよ、エド」
今迄話しに加わらず、知らぬ顔をして私の隣に座っていた華奈子が、美代子の話を遮った。
「アレは、貴方の探し物じゃありません」

「華奈子、失礼ですよ…丁度いいわ、貴女に話が有ったのよ。あのエメラルド、私に譲って頂けないかしら？」
美代子が挑戦的な笑みを浮かべて、華奈子を見詰めた。
「嫌です」
「じゃあ、私に譲って下さらない、お姉様？今度の婚約披露のパーティーで、この着物に合わせようと思うの！」
「駄目よ、絵美」
「あら、合うと思うのよ…お姉様が、婚約披露の時に着る筈だった、特別な振袖ですもの！」
「貴女方には、渡せないわ」
「華奈子、絵美は孝さんと婚約して廣徳海運を継ぐのだから、あのエメラルドを持つべきは、絵美なのではなくて？」
「思い違いをして頂いては困ります、お義母様。あの石は、会社を継ぐ人間が持つ物では無く、廣徳の血を受け継ぐ人間が守って来た物です。それは、今後も変わりません」
「…貴女もバークレイの人間になるなら、宝石なんて思いのままに買って頂けるでしょう？何故、あんな古い宝石に拘るのかしら？」
その言葉に、華奈子は目を見開いた。
「何か勘違いなさっている様ですが、私とバークレイ氏は…その様な関係ではありません！」
「あら…そうなの？」
「それどころか…貴女方と同じ穴の狢だわ！」
「華奈子、それは本当か！？」
土屋を従えて部屋に入って来たでっぷりと太った男が、華奈子にギラギラとした目を向けた。
「バークレイ氏も…エメラルドを所望しているのか？」
「ご自分でお聞きになるといいわ、お父様」
廣徳源蔵は苦々しい顔をしながらも、私に握手を求めた。
「で、先程の話は本当ですかな、バークレイさん？」
「嘘では有りません…私は華奈子さんとエメラルド、両方を手に入

れたいと思っています」
「熱烈な告白ね…ねぇバークレイさん、お姉様なんかのどこがいいの？それとも、エメラルドの為の付属品も貰わなきゃならないしきたりでも有るのかしら？何だったら、私が立候補しますわ！バークレイ家の嫁には、お姉様なんかよりはずっとマシだと思うわ？」
絵美の馬鹿にした様なけたたましい笑いが響く中、華奈子は静かに言った。
「もう一度皆にお話しして置きますが、あの石は…貴殿方にとって価値の有る物では有りません。あの石は、持つべき人間が手に入れて、初めて価値を成す物…貴殿方には渡せません」
「では、ルースは？歴代の当主が集めた、エメラルドのルースは！？」
「あれは、あの石と対を成す物…お父様が、どうこうしていい物ではありません」
ウームと唸る源蔵を、華奈子は冷ややかに見詰めた。
「この家を出るにあたって、幾つかの書類にサインをして行ってくれ」
「…出るのでは無く、追い出すのでしょう？」
そう言いながら、華奈子は差し出された書類の束を受け取り、眉を潜めた。
「お父様…何故、日本語の書類では無いのかしら？」
「…手続き上の問題だ」
クスリと笑って、華奈子はその書類を私に見せた。
英語、ドイツ語、フランス語…書類によって様々な文字が踊る書類にサインをする様に、源蔵が華奈子にペンを渡す。
「申し訳有りませんが…直ぐにサインは出来ません」
「こちらとしても、急ぎの書類なのだ」
「重要な？」
「そうだ」
「ならば、何故日本語の書類になさらなかったの、お父様？」

「…」
「どうせ、この家屋敷や私の財産放棄、あの石の譲渡書類でしょう？」
「急ぐのだ、華奈子！！」
「知らないわ、そんな事！！」
突然源蔵が華奈子の腕を掴み、彼女の横面を引っ叩いた。
「お前という娘はっ！！親の言う事が聞けないのか！？」
「貴方の娘じゃ無いわ！！」
再び手を上げようとする源蔵の腕を、私は掴み睨み付けた。
「これ以上は許しません、Ｍｒ．廣徳…私の言っている意味が、おわかりですね？」
チッと舌打ちをする源蔵に、華奈子が息を整えて言い放つ。
「書類は後日、私の顧問弁護士に渡して下さい」
「顧問弁護士だと！？」
「そうです…精々その方に、泣き事を言って下さい。その方が、聞き入れて下さればの話ですが…他に何かご用がありまして？」
「…いや」
「それでは、部屋の荷物をまとめ次第、私は出て参ります。お世話になりました」
華奈子は父親にそう言うと、絵美の前に進み出た。
「…な…何よ？」
「絵美…その指輪は、返しなさい」
華奈子が差し出した掌に、絵美は渋々自分の指に填めた指輪を抜いて渡した。
「孝さんを…幸せにして差し上げてね」
少し寂し気にそう笑うと、華奈子は踵を返して応接間を出て、廊下に控えた土屋に声を掛けた。
「私の部屋に、スーツケースを持って来て下さい」
「畏まりました」
土屋が去った後、華奈子は後ろを付いて来た私に、泣き出しそうな

微妙な笑みを見せた。

第5章

屋敷の奥に入り、ほぼ裏手に建つひなびた土蔵に、華奈子は私を連れて行った。
「ここは？」
「私の部屋です」
彼女の言葉に驚いた私は、土蔵の中の惨状を見て再び驚いた。
まるで泥棒にでもあったかの様な荒れ様に、華奈子は少しも怯む事無く歩を進める。
「…凄いですね」
「いつもの事です。適当に座って待っていて下さいますか？」
「いつもの事とは？」
私の質問にクスリと笑い、華奈子は視線も返さずに部屋を片付ける。
「探しているのでしょうね…貴方も欲しがる同じ物を…」
「貴女が持っているのですね？」
「…そうだと言ったら？」
「見せて頂く訳には参りませんか？」
「お断りします」
余りに静かな声で断られた事に、私は違和感を覚えて立ち上がった。
「華奈子？」
「…」
「こっちを向いては、頂けませんか？」
「…嫌よ」
小さく拗ねた様な答えが返って来た。
「…華奈子」
「…貴方…意地悪だわ」
「え？」
「貴方をこの部屋に入れたのは、最大の譲歩なのに…私に泣かせてもくれないの？」

「…失礼」
私は華奈子を後ろから抱き込むと、耳元で囁いた。
「泣くのは、私の胸と決まっていましたね」
「…そんな事」
「話してしまいませんか？何もかも…」
「貴方…敵だわ」
「敵…ですか？」
「私から、あの石を取り上げ様とするもの」
「まぁ…ですが、貴女の事も奪わせて頂くつもりですが？」
「ひとつ…貴方に言って置くわ」
「何でしょう？」
「もしも…私を手に入れても…あの石は、貴方の物にはならないわよ？」
「…どういう…事です？」
動揺を悟られ、華奈子は私の腕からスッと逃れた。
「華奈子？」
「だから…言った筈です…貴方には価値の無い物だと…」
消え入りそうな声と、戻ってしまった硬い口調でそう言うと、出会った時と同じ様な泣き出してしまいそうな瞳を私に向けた。
「自分の事を、価値が無い様な言い方をするのは、感心しませんね」
「実際に…そうです」
「自分で価値を下げている」
「誰もが、あの石越しにしか私を見ません…私の価値は、あの石の持ち主という事だけです」
「貴女の価値を…それを決めるのは貴女では無いと…以前言いませんでしたか？」
一歩詰め寄って華奈子を胸に抱くと、彼女の背中を撫で下ろしてやる。
「泣いてしまいなさい、華奈子…そうすれば、次の一歩が踏み出せます」

私の胸で少しだけ泣くと、華奈子は気を取り直した様に片付け始めた。
土屋がスーツケースを持って来ると、彼女は一度だけ振り向いて私に尋ねる。
「…これを期に、私も貴方の屋敷を出ようと思います」
「何を仰っているのです、華奈子？貴女は、ご自分の立場をわかっていないのですか！？」
「わかってるつもりです」
「そうですよね…毒入りの菓子を平然と棄て、手紙を燃やす貴女が、わかっていない筈は無い！」
「貴方は…やはり意地悪ですね」
「ではお聞きしますが、私以外に貴女の事を守れる人間が居るのですか？」
「居ない訳では有りませんが…そこには、違う人間を預ける事にしています」
「では、貴女は？」
「…独り暮らしをしようと思います」
ニッコリと屈託の無い笑顔を返す華奈子に、私は呆れて…こめかみを揉みながら話を遮った。
「その話しは、帰ってからにしましょう…」
数冊の本とアルバム、それと数枚の着物を華奈子はスーツケースに入れた。
珍しい着物を見せて貰っていた私は、不思議に思って彼女に尋ねた。
「こちらの着物の方が、価値が有るのではありませんか？」
華奈子は笑って、目利きだと言って頷いた。
「でも私にとっては、こちらの着物の方がずっと価値の有るのですよ」
「…思い出の品？」
「そう…母と、祖母の形見の着物です」
華奈子は最後に、机の上に乗っていた母親の写真の入った写真立て

を取り上げて詰めると、土屋を呼びスーツケースを運ばせた。
「少し、待って下さいますか？」
そう言って、華奈子は携帯でどこかに連絡を入れると、私に手を合わせて見上げた。
「お願いがあります、エド」
「何でしょう？」
「帰りの車に、もう1人同乗させて頂けませんか？」
「構いませんよ」
「送って頂ける？」
「えぇ。どこまで乗せれば宜しいですか？」
「それでは、警視庁迄」
「えっ？」
流石に驚くと、華奈子はフフフと笑って首を振った。
「中では無いのです。相手の方が今警視庁にいらっしゃるので、その前で待ち合わせようと仰って…何かと安全でしょう？」
「…わかりました」
蔵を出る時に、何かがカツンと足先に当たり、コロンと転がった。
「済みません…何か…」
華奈子が拾い上げて、嬉しそうな笑みを溢す。
「何ですか？」
「私の…エメラルド！」
彼女の掌には、鮮やかな緑色のガラス玉が乗っていた。

屋敷の前に停めた車のトランクに、土屋がスーツケースを詰め込んで、開いたドアの所に挨拶に来た。
「それでは、お嬢様…どうぞお達者で…」
車の中に座っていた華奈子は、挨拶する土屋の腕を掴み車内に引きずり込んでドアを閉める。
「出して！！急いで！！」

車が走り出すと、一緒に玄関に見送りに出ていた家政婦達が、慌てて屋内に走り込むのが見えた。
華奈子の膝に倒れ込む様な形で乗り込んだ土屋は、居住まいを正すと私に会釈をする。
「同乗者は、彼ですか！？」
少し驚いて尋ねると、土屋は申し訳ありませんと再び頭を下げた。
「土屋…手を出して…」
華奈子が言うと、土屋が黙って片手を差し出す。
「見て…そっくりでしょう？」
華奈子は差し出された手に自分の手を並べ、私に誇らし気に見せる。
「私は昔から余り可愛く無くて…手も亡くなった母の様に細くて華奢では無いのが嫌で…。そう言うと、母が言ってくれました。『華奈子の手は、お父様の手にそっくりだ』と…」
土屋は、黙って自分の手を引いた。
「縁の薄い母娘でしたが、一緒の時にはいつも私の手を本当に愛おしむ様に撫でてくれました。私も母の事を沢山撫でて…そうして私は、自分の手が好きになりました」
華奈子は自分のバッグから、小さな指輪を取り出した…あの時、絵美の指から奪い返した指輪だ…。
「これは、貴方にお渡しします」
「いえ…お嬢様…」
「この指輪は、そのネクタイピンと対を成す物でしょう？」
「…ご存知だったのですか…」
私から華奈子の表情は見えない…だが、彼女の膝に置かれた手が固く握られていた。
「今から言う事が、貴方への最後の命令になります。心してお聞きなさい」
「はい、お嬢様」
「これから貴方に会わせる方に、貴方の身柄を預ける事にしました。しばらくは、その方の指示に従って行動なさい」

「はい、承知致しました」
「決して勝手な行動を取らない事、１人で出歩かない事、廣徳の家には戻らない事、約束出来ますね？」
「はい」
「墓参りもですよ。当分は禁止…どうしても行きたい時は、申し出て同行者と一緒に行く事…宜しいですね？」
「…はい」
「貴方の身柄が危険になると…私に不利益が起こります。心して行動する様に」
「承知致しました」
「いずれは、預かって下さる方から安心しても良いと教えて頂ける筈です。その後は、その方に誠心誠意お仕えなさい。とても素晴らしい、信頼出来る方です…貴方の事も大切にして下さる筈です」
「…あの…お嬢様は？」
「大丈夫。その頃には、きっと幸せになっているでしょう」
そう言って微笑むと、華奈子は自分の手を土屋の手に重ね、姿勢を崩さぬ彼の肩に頭を預けた。
警視庁の近くに着いた時、彼女は黒いセンチュリーを見付けると、その後ろに停車する様に運転手に言った。
車を降りた土屋は、華奈子の降りるのを待つと、車内の私に恭しくおじきをして身を屈めた。
「お手間をお掛け致しました」
「いや」
「お嬢様の事…呉々も、宜しくお願い致します」
そう言って、再び深く腰を折って去って行った。
華奈子はセンチュリーの中の人物と言葉を交わし、笑みを浮かべて頭を下げている。
『とても素晴らしい、信頼出来る方』と彼女は言った。
私以外に彼女を守る事の出来る人物だと、彼女は言った…何者だろう？

私はそっと車のナンバーを書き取り、内ポケットに入れた。
やがて土屋を乗せたセンチュリーは走り去り、見送った華奈子が戻って来た。
「お待たせしました」
「いえ」
運転手が車を発進させると、華奈子は溜め息を吐き座席に身を沈ませた。
「お話ししても、宜しいですか？」
「…どうぞ」
「彼は…貴女の父上なんですね？」
「えぇ」
言葉を切った私に、彼女は口調を変えてクスリと笑った。
「私に…興味がお有りですか？」
それは、最初に出会った時に私が言って…彼女を泣かせた言葉だ。
「有りますよ」
「”Ｃｕｒｉｏｓｉｔｙ ｋｉｌｌｅｄ ｔｈｅ ｃａｔ”（好奇心が猫を殺した）って言葉…ご存知？」
「Ｓｕｒｅ」
「それでも知りたい？」
「是非」
華奈子は笑い、砕けた口調で話し出した。
「土屋は…元は廣徳海運の優秀な社員だったの。その前から母の恋人だったそうだから、きっと学生時代からの恋人同士だったのね。祖父も土屋の事を認めて…婚約寸前だったそうよ」
「それが何故？」
「源蔵は、元は役人でね…その頃大きな収賄事件があって、廣徳海運は知らぬ間にその片棒を担がされていたの。源蔵は祖父に言ったらしいわ…『廣徳海運を守りたかったら、廣徳の全てを寄越せ』ってね」
「それで…」

「土屋は密かに会社を辞めて、廣徳家の執事として務め出した…母を守る為だけに…やがて源蔵は廣徳家に入り好き放題し始めた。旧華族の血を受け継ぐ廣徳の名前、順調に業績を上げる会社を手に入れた…あの男の手に入らなかったのは、母の心と、あの石だけだった訳」
「あの指輪は？」
「あれは土屋が母に贈った物なの…指輪の台座と土屋のネクタイピンには、同じ意匠が凝らしてあるわ」
淡々とした口調とは裏腹に、夢見る様な眼差しを華奈子は宙に送り続ける。
「父上を…先程の人物に預けたのは、何故ですか？」
「…源蔵が、土屋の事を調べているとわかって…その直後から、私ばかりでは無く土屋にも危害が加えられる様になったの。私の父親と言う事がバレたとは思わないけれど、土屋を屋敷から追い出したかったのは確かでしょうね…屋敷で死なれると、後が面倒だから」
「だから、信頼出来る人物に預けた？」
「そう」
「何故…私を頼って下さらないのです？」
「頼る？貴方を？」
「そう…私なら、貴女の事と同じ様に…父上を守る事も出来た筈です」
「…エド…私の話、聞いてた？」
華奈子は身を起こし、私に首を回して嘲笑した。
「私が一番守りたいと思ってるのって、何だと思う？」
「…エメラルド…ですね？」
「正解。じゃあ、土屋と私の関係は？」
「父親と娘です」
「正解。最後の質問…私のウィークポイントは、何でしょう？」
「……父上…ですか？」
「正解。何と言っても父親だもの…彼を人質にでも取られたら、私

の判断が狂うわ」
華奈子は私を見上げクスクスと笑い、フゥと息を吐いて再び座席に身を沈ませた。
「有る意味…非情ですね」
「そう？私は、安心を買ったの…これで、もう思い残す事は無いわ」
「まるで遺言だ」
「そう…もう、遺言も作成済みよ」
「…何ですって？」
「だって…いつ殺されるかわからないじゃない…私の命を狙うのは、源蔵の家族だけじゃないわ。今だって、貴方の手の内に居る訳だし…」
華奈子は…気付いているのだろうか？
私の目論見も…私の思いも…？
「…疲れたわ…少し…寝かせて…」
私は華奈子に身を寄せると、肩に腕を回して躰を支えてやった。
「…エド…貴方変よ」
「何がです？」
「貴方…私の…敵でしょう？」
「…その認識、何とかなりませんか、華奈子？」
「貴方には…渡せないと言ったわ」
「お聞きしました…諦めるつもりは、微塵もありませんが」
「…変な人」
「お誉めに預かり、恐縮です」
「…誉めて…無い」
そう言って、フッと笑う。
「…あれが…本当に…私の物なら……少しは…考えて上げた…かも…」
「華奈子？」
「……あれは…私の物であって……私の…物じゃ…無い…」
「え？」

私の肩の下で、スゥという寝息が聞こえた。
弱い様で強い…強い様で脆い…華奈子、さっきの言葉は、どういう意味です？

第6章

廣徳の家から帰る途中から、私は又発熱してしまった。
土屋を無事にあの家から助け出せ、安堵した事もあったのだろうが…この躰の弱さは母親譲りだ。
家に居た時、私の看病は土屋が付きっきりでしてくれていた…廣徳家の主治医の薬は、何が入っているか安心出来ない為、いつも土屋が市販の薬を買って来てくれていた。
エドの屋敷では、治療され投薬されても生きているという事は、安心出来るという事なのだろう。
喉の渇きに目が覚めると、明るい部屋の中ベッドの横でエドが書類を広げていた。
「目が覚めましたか、華奈子？」
「…エド…仕事は？」
「していますよ、こうやって」
書類をヒラヒラさせながら、エドは平然と言う。
「ここで？」
「私の場合、場所は関係ありません」
そんな事は無い筈だ…私は田辺の機嫌の悪い顔を思い浮かべ、眉を潜めた。
「まだ、熱が高い…何か飲みますか？」
「ありがとう…頂くわ」
私が起き上がろうとするのを助けると、エドはグラスに飲み物を注ぎ渡してくれた。
「…田辺さんに、又恨まれそうね」
「田辺が、何か言いましたか？」
「いいえ…何も。でも、わかるもの…私の事でご迷惑掛けているでしょう？」
そう言ってグラスを煽った私に、エドが物言いたげな視線を寄越す。

「…何か？」
「少し話していても、大丈夫ですか？」
「えぇ」
エドは私の背にクッションを置き、躰を預けられる様に整えると、ベッドの縁に腰掛けた。
「昨日の話の続きになりますが…エメラルドは、貴女が所持しているのですね？」
「…それが？」
「廣徳の血筋の方に、代々受け継がれて来た物なのですね？」
「…そうね」
「これからも？」
「いいえ…多分、私で最後になるわ」
「どういう事です？」
「…貴方には、関係の無い事だわ」
エドの瞳の奥に、緑色の焔が揺らめいている…この人は、何故こんなにもあの石に固執するのだろう？
…まさか…いや、有り得ない…彼は、バークレイ・コンツェルンの後継者だ。
「…では、質問を変えましょう。貴女は自分を手に入れても、エメラルドは手に入らないと言いましたね。どういう意味ですか？」
「…言葉通りよ」
「相手が…私だからですか？」
「違うわ」
「…謎掛けは止めませんか、華奈子？はっきり仰って下さい！」
「…エド…貴方は、何故そんなにあの石を欲しがるの？昨日義母が言った様に、貴方なら幾らでも高価な宝石を買える筈でしょう？」
「…私は…」
「あの噂は嘘だと、最初に貴方に話したわ。あの石は…幸運も繁栄も与えてはくれない…たまたま蒼龍商事と廣徳海運の経営が上手く行っていた事で、誰かがやっかみ半分で言い出した噂話に過ぎない

のよ？」
「…そういう事では…ありません」
「じゃあ、どう…いう…」
突然目眩に襲われ上体が揺らぐのを、エドの逞しい腕に支えられ、ゆっくりとベッドに寝かされる。
「熱が上がりましたか…無理をさせました。話の続きは、貴女の体調が戻ってからにしましょう」
私は頭を振りながら、エドの袖口を掴んで言った。
「あれは、…前にも話したけれど…貴方には何の価値も無い物なのよ。お願い…諦めて…」
「華奈子、その話しは、いずれ…」
「…体調が…戻ったら……ここを……出るわ…」
私の思考は熱に溶けて、深淵に沈んだ。

診察と治療を終えた医師が、私に眉根を寄せた。
「どうだ、様子は？」
「点滴で解熱剤を入れておりますが、心労とお疲れから来る発熱だと思います」
「そうか」
「多分…お小さい頃から、余りお強い方では無かったのでは無いでしょうか？不整脈も有る様ですし…」
「不整脈？華奈子は、心臓に欠陥が有るのか？」
「詳しく調べてみないと、何とも申せません。一度、検査の為に入院された方が良いのではありませんか？」
「…考えて置く…華奈子は、独り暮らしを考えている様なのだが？」
「それは…お薦め出来ません。この体力では倒れるのは目に見えていますし、看病をされる方が居ないのでは、どうしようもありませんね…最悪、孤独死にもなりかねません」
「孤独死か…」

「こちらで、面倒を見て差し上げる訳にはいかないのですか？」
「…私はそのつもりなんだが、本人が…ね」
「確かに、酷く緊張して生活されていますから…私の事も、最初は全く信用して頂けない様子でした」
「…そうか…ありがとう、Ｄｒ．」
医者が退室すると、すかさず背後に控えた田辺が声を掛けた。
「同情しているのか、エド？」
苛立ちを含んだ声を上げ、田辺はベッドで寝入る華奈子を睨み付けた。
「…」
「お前らしくも無い…いつになったらエメラルドを手に入れられる？」
「思いの外、強情でね…身持ちも堅い」
「手緩いんじゃないか？」
「いや…華奈子を籠絡しても、アレは手に入らないと言われた。どんな絡繰りが有るのか…まだ、確認が取れないがな」
フンと鼻を鳴らしながら、田辺は胸ポケットから手帳を取り出した。
「昨日依頼された、調査の回答が来た。警視庁の前で待ち合わせた車は、社用車だ。管理しているのは、Ｏｆｆｉｃｅ　連城。事業主は…」
「連城？連城仁か！？」
「知ってるのか？連城仁、法律事務所や幾つかの企業も経営している」
「華奈子は…とんでもない人物と知り合いなんだな」
連城仁…私には、ネゴシエイターとしての彼の方が馴染み深い。
日米の企業間のトラブルを始め、国家間の外交問題等、外交官が入る前の最も難しい最初のネゴシエーションをそつなく熟す、腕利きのネゴシエイターだと聞いた。
確かペンタゴンとも馴染みが深い筈だ…通り名はＰａｎｔｈｅｒ…直接面識は無いが、活動拠点を日本に移しても尚、本国からの依頼

が引きも切らないと聞いている。
噂通りだと、常にギリギリのラインで法を守り、目的の為には非情に成りきれる切れ者だと…依頼の成功率は１００％、クライアントには絶大の信頼を寄せられているのだと聞いた。
「彼女の顧問弁護士とは、その連城って奴なんじゃないか？」
「しかし…華奈子が如何に社長令嬢だからといって、彼がそんな個人的な依頼を受けるだろうか？」
「…そんなに凄い人物なのか？わかった…引き続き調べてみよう」
秘書になってまだ日の浅い田辺には、本国の情報は入りづらい…日本の上流社会の事も、まだまだ疎い。
調べれば多分、数々の功績と名声が聞こえて来るだろう。
華奈子の顧問弁護士…確かに彼女は、連城に土屋を…彼女のウィークポイントである父親を預けた。
しかし…。
「そうだ…本国からＦＡＸが届いていた」
「ＦＡＸが！？」
「…暗号化されている様だ」
渡されたＦＡＸを受け取り、私は書斎に隠った。
メールでも電話でも無く、暗号化された文書が送られて来ると言う事は、表に知られては不味い事態が…一族の間で何かが有ったという事だ。
「やはり…そうか。不味いな…」
それは…バークレイ・コンツェルンの会長、祖父が倒れたという知らせだった。
…時間が無い…。
「…華奈子…君に、ゆっくりとした時間を与えて上げる事は、出来ない様だな」
数日後、私の熱も下がりやっと床上げが出来た頃、エドの姿は屋敷

の中には無かった。
あんなに私にベッタリと張り付いていたのが急に放り出された様で、何と無く拍子抜けというか、ポッカリ穴が開いた様な不思議な気持ちだ。
熱が下がったらこの屋敷を出ようと思っていたが、エドに黙って出て行く訳にもいかず、廣徳の家から持ち出した私の荷物も行方不明だ。
使用人に聞いても、『存じ上げません』の一言で片付けられてしまう。
仕方無く、私は屋敷の中をウロウロと彷徨っていた。
「この屋敷には、図書室は有るのかしら？」
「はい、御座います。そちらの階段を上がり、３つ目のドアになります」
「ありがとう」
連日の雨で庭に出る事も出来ず退屈しきっていた私は、本でも読んで時間を潰そうと教えられた図書室に向かった。
階段を上がり３つ目のドア…だが、廊下の左右にドアが有る。
「どっちかしら？」
別に立ち入り禁止の部屋を申し渡されている訳でも無い…私は、右側のドアを押し開いた。
背の高い書架が並び、その前に大きなマホガニーのプレジデントデスク、庭に面した窓には天井迄有る腰高窓が並び、対面する壁には幾つもの写真が掛けられてあった。
「西洋人が部屋に写真を飾るのって、本当みたいね…」
私は本を借りる事も忘れ、壁の写真に見入った。
生まれて間もない赤ん坊の写真、家族との写真…黒髪に弾ける笑顔と、鮮やかなグリーンの瞳の赤ん坊の何と可愛い事！！
幼少期のエドは、家族と共に幸せそうな笑顔を振り撒いていた。
それが少し大きく…学校に上がる頃の写真になると、厳めしい顔をした老人と並び、強張った顔のエドしか見られなくなった。

ハイスクールの卒業写真も、カレッジやロースクールの卒業写真にも、澄ました顔のエドしか写っていない。
続いて掛けられているのは、もっと古い時代の物だ…先祖の写真だろうか？
商店の前で、男達が腕を組み並んでいる写真。
小さな少年が、母親の膝に抱かれている写真。
ビルの前に、従業員がズラリと並んでいる写真。
船の前に、数人の男女が並んでいる写真。
髭を蓄えた偉そうな男の写真。
盛装したエドと、美しい女性が腕を組んでいる写真…。
古い時代の写真ばかりだと高を括っていた私を、その写真はいきなり現実に引き戻した。
例えるなら、お伽噺の王様と女王様…金髪碧眼のスラリと美しいその女性は、エドと本当にお似合いで…その女性がエド見詰め笑みを浮かべる姿は、まるで…。
「そんな所で、一体何をしているのです！？」
いきなり冷たい声を浴び、私は硬直した。
「…田辺さん」
「何をしているのです！？」
再び冷たい質問を浴び、私はしどろもどろで答えた。
「本をお借りしようと思って…そうしたら、写真があったので…見せて頂いていました」
「ここが、エドワード様の書斎だと承知で入り込んだのではありませんか！？」
「え…図書室では…」
「ここのどこが図書室に見えますか？図書室は、向かえの部屋です」
「…失礼…しました」
いたたまれず退室しようとする私の背中に、田辺の冷たい声が響く。
「…さっさと宝石を返して、この屋敷を出て行けばいい！」
私は慌てて書斎を飛び出し、自室に駆け込んだ。

田辺の氷の様な視線と言葉…美しい女性と腕を組んだエド…。
胸の中がモヤモヤする…何でエドの秘書にあんな風に言われなきゃならないのか？
あの女性は誰なのか？
あんなに人の事を口説いていた癖に…共に写った写真を飾る程、仲の良いお相手が居るのではないか！
恋人…婚約者…いや、もしかしたら既に結婚しているのかも知れない。
そう…エドは、あの石を手に入れたいが為に私に近付いただけなのだから…。
モヤモヤがいつまで経っても晴れない…私は思いの外、傷付いているのだろうか？
もう何も期待しないと決めた筈だ…なのに…。
明け方ようやく眠りに着いた私は、あの書斎の中で写真を眺めている夢を見た。
あれは歴史…エドの…エドの祖先の輝かしい歴史…。
突然、脳天から稲妻に打たれた様な衝撃を受け飛び起きた私は、胸の動悸を抑え様も無く、しばらく布団の上にうずくまった。
嘘だ！！
まさか！？
有り得ないっ！！
だが、あの田辺の言葉は…！？
胸ぐらを掴みながら、荒い息と動悸が治まるのを待ち、携帯に腕を伸ばす。
途端に頭の中に浮かんだ、嫌らしい笑みを浮かべた義母の顔…。
『華奈子…”Ｃｕｒｉｏｓｉｔｙ ｋｉｌｌｅｄ ｔｈｅ ｃａｔ”（好奇心が猫を殺した）って言葉、ご存知かしら？』
どうする！？
人を詮索しようとして、良い結果等出た試しが無い…。
しかし…。

私は意を決して、早朝にも関わらず通話ボタンを押した。
「…もしもし、朝早く申し訳ございません。私、廣徳華奈子でございます。実は、折り入ってお調べ頂きたい事が有るのです。…はい…はい…バークレイ・コンツェルンのエドワード・バークレイ氏と、その一族の事をお調べ頂けないでしょうか？そうです…あの石に関する事で…はい。宜しくお願い致します」
携帯を折り畳むと、私はベッドに倒れ込んだ。
エド…私は、大変な思い違いをしていたのかも知れない。
今は…貴方の顔が見たい…会いたいわ、エドワード…。

第7章

会長の…祖父の倒れたというＦＡＸを受け取った晩、私は夜中に華奈子の部屋を訪れた。
枕元のランプを点けると、彼女はうっすらと瞼を開けて私を見上げる。
汗をかいた華奈子の額や首筋を濡れたタオルで拭いてやると、彼女は溜め息を吐き気持ち良さそうに口許を綻ばせた。
「…華奈子、あれはどういう意味ですか？」
「…ん…」
「あのエメラルドは、貴女の物ですよね？なのに『私の物であって、私の物では無い』とは、どういう意味ですか？」
「…」
熱に浮かされた華奈子の潤んだ視線が彷徨い、いつもより赤くなった唇の間から小さな歯列が微かに開いた。
その中で蠢く赤い舌が、何かを囁く様にヒクヒクと震え…まるで…私を誘う様に…。
「……華奈子…」
私は堪らず、華奈子の唇を覆った…口腔を擽り、舌を絡めて吸い上げる。
「…絡めてごらん…華奈子…」
熱で朦朧とした華奈子は、抵抗せず私の言葉に素直に従い拙い動きで舌を絡める。
その柔らかなたどたどしい舌の動きと、舌の絡まる淫猥な水音、交わす熱い吐息に…私は欲情した。
華奈子の唇を離れ首筋をたどり、シルクのパジャマの布越しに私の手は彼女の躰を撫でまわす。
熱を持った肌が布越しにもわかる…朦朧とする意識の中で、華奈子は素直に官能に火を点けて身をくねらせ、熱の為に発するのでは無

い喘ぎ声を上げた。
そこに彼女の意思は無いのを承知して尚、私は華奈子のパジャマ胸元をはたげ、露になった肩にキスをして浮き上がる腰に腕を回しながら、直接彼女の肌に手を滑り込ませる。
手に吸い付く様な滑らかで柔らかな肌…汗の匂いに混じる熟れた果実より甘い香りを、私は胸一杯に吸い込んだ。
柔らかな乳房に手を伸ばすと、その頂きは既に自己主張を持ち始め…。
「…エド」
突然背後から声がして、私はビクリと顔を上げた。
部屋の入口で、田辺が苦悶の表情を見せる。
私はそっと華奈子の乱れたパジャマを直し布団を掛けてやると、ランプを消して部屋を出た。
「やはり…俺の忠告した通りなのか！？」
「…済まない、剣」
翌日から私は屋敷には帰らず、会社の近くのホテルで生活を送っている。
自分でもまだ信じられないのだ…華奈子は私達一族の仇の末裔で、私は彼女に復讐しようとしていた筈だ。
現に今でも、彼女の細い首をゆっくりと締め上げ、腹を引き裂いてやりたいと…想像するだけでゾクゾクするのだ。
だが…同じ様に彼女を甘く喘がせ、極上の快楽を味あわせてやりたいと…甘く愛を語らい、華奈子の柔らかな躰をずっと腕の中に抱いていたいという思いが、己の中で沸々と沸き上がる。
最近では、華奈子を腕に抱いていると、癒され、自分自身が優しくなるのがわかる…又そんな自分が嫌いでは無いのだ。
華奈子を可愛いとは思った…そのウブな反応も、幼く見える躰も…オドオドとした所も、家族に疎まれ耐える姿も、エメラルドを守る頑なな態度も…。
籠絡しようとしたのも、そこに感情があった訳では無くエメラルド

の為に…だが、自分以外の者が彼女を傷付けるのを許せなかったのは何故だろう？
そもそも初めて華奈子を可愛いと感じたのは、あのクラブでは無かったか？
彼女を屋敷に拐って来たのは、エメラルドの事を調べる前の事だ。
まさか私は…最初から…彼女の事を！？
本国には、彼女の事を逐一報告している。
祖父が倒れて、父の死後社長の空席を守る専務である叔父からは、エメラルドと華奈子を大至急本国に連れ帰れと連日の様にＦＡＸが届く。
そもそも私が日本に来たのは、昔日本人に奪われたエメラルドを探索する為だ。
その為に一族の男子で唯一緑の瞳の自分が選ばれ、両親と引き離されて英才教育を施され、日本語と文化を叩き込まれて、一時期留学生として日本で生活もさせられた。
その代わりに、事故で両親共に他界し帰る家も無くなってしまった自分に与えられたのは、次期社長としての栄光の道だ。
金も人間も思いのまま…特に女性は、バークレイの次期社長に蝿の様に集った。
身内の女性も、本国の社交界からも、欧州の名だたる企業や銀行頭取の娘達も、バークレイの次期社長夫人の椅子を狙っている…馬鹿馬鹿しい、私にとって恋愛はゲームなのに…。
バークレイのエメラルドの瞳に靡かぬ女は居ない…私自身そう思っていたのも事実だ。
だが…華奈子は、私がバークレイの人間と知って尚拒み続ける…あんなに熱烈に口説いてやっても落ち無い…。
むきになっているだけだろうか？
だが、離れて冷静に成れば成る程、華奈子への想いは募った。

屋敷を出て１０日目、私が帰ると屋敷に詰めさせていた田辺が恭しく玄関ホールに出迎えた。
「華奈子は？」
途端に田辺の眉間に皺が寄る。
「…来客中だ」
「来客？」
「廣徳海運の岸本孝と言っていた。彼女の元婚約者だろう？」
「…何しに来たんだ？」
「さぁ…見舞いじゃないか？」
「見舞い？華奈子は、まだ熱が下がらないのか！？」
「いや…あの後直に持ち直したが、最近又寝たり起きたりを繰り返している。食事も余り摂らないし、情緒不安定気味だ。岸本が先日訪ねて来た時には、彼女は臥せっていて会えなかったからな…今日は、果物持参で見舞いに来た様だ」
「果物？…当然、取り上げたんだろうな？」
「いや…彼女の指示で、洗って運ばせたが？」
「何だってっ！？どこだ？華奈子はどこに居るっ！？」
「…テラスに」
私は、慌ててテラスに向かった。
華奈子…何を考えている！？
その男はお前を裏切り、妹の婚約者に納まった卑怯者だ！！
もし…もし、その果物に毒物が混入されていたら！？
テラスに置かれたガーデンテーブルに、華奈子は穏やかな笑みを浮かべ岸本と共に座っていた。
私の姿を認めると、岸本は強張った表情で立ち上がり、華奈子は少し驚いた表情を見せたが、直ぐに穏やかな表情に戻って言った。
「お帰りなさい」
「…華奈子」
「ご無沙汰致しております、Ｍｒ．バークレイ。先日は、お恥ずかしい所を…」

そう挨拶する岸本を無視して、私は華奈子の隣に座り彼女の手を取った。
「体調が優れないと聞きました。大丈夫ですか、華奈子！？」
少し焦った様な私の物言いに、華奈子は再び驚いた目を見せたが、フワリと笑って答えた。
「ありがとう、エド。でも、私が体調を崩すのはいつもの事だもの…どうという事は無いわ」
「そうだね、華奈子は昔から躰が弱くて…」
同意する様な言葉を吐く岸本を、私は無言で睨み付けた。
クスクスと笑う華奈子は、テーブルの中央に置かれた大きな葡萄の房に手を翳す。
薄緑の大きな粒が、たわわに実った美しい葡萄…その房の上を、華奈子の手が彷徨う。
一粒千切って自分の皿に持って行くと、彼女はゆっくりとした手付きで皮を剥き始めた。
その手付きを、食い入る様に見詰める岸本の目…間違い無い…この葡萄は、毒物が混入されている！！
綺麗に剥き終わった葡萄を華奈子がゆっくり口に運ぼうとするのを、私は彼女の左手を持って阻み、その指先に摘まれた葡萄を彼女の指先ごと口に運んだ。
正面に座る岸本から視線を外さず葡萄を飲み込み、果汁で濡れた彼女の指や掌、指の股までを舌でしゃぶり尽くす。
岸本はブルリと震え、私と華奈子を見比べた。
いつもの華奈子なら、絶対に嫌がって手を引くシチュエーションにも係わらず、彼女は私に左手を預けたままだ。
そう…華奈子は知っているのだ…かつて共に生きようと約束した男が、自分の命を狙う側に立っている事を…。
「お行儀が悪いわよ、エド…種も一緒に食べてしまったの？」
「えぇ」
「盲腸炎になって、お腹が痛くなってしうわよ？」

「その時は、切り刻んで…原因を調べて頂きましょう」
途端に岸本が、ヒッと小さな声を飲み込んだ。
華奈子はフッと含み笑いを漏らすと、再び葡萄に手を翳し、岸本の表情を伺った。
「かっ…華奈子…」
岸本の小刻みに震える声が、葡萄の房の先端部に手が翳された時、ヒゥッと小さな叫び声を上げた。
華奈子は無表情のまま房の先端の粒を千切り、口を開けて皮の付いたままの葡萄を近付けた。
「あっ…あっ…あぁぁ…」
岸本が情け無い声を上げながら椅子から転げ落ち、腰を抜かして後退る。
華奈子の口に入る刹那、私は手の甲で彼女の唇を覆い、華奈子の摘まんだ葡萄を握り潰すと岸本を睨み付けて叫んだ。
「廣徳海運には、警告を与えた筈だ！もう容赦しないと…バークレイを敵に回したらどうなるか、思い知って貰うと社長に伝えろっ！！」
「しっ…失礼…します！！」
床を這うようにして、岸本はあたふたと出て行き、華奈子は私の手の甲で口を塞がれたまま彼を見送った。
「…食べても…良かったのに」
「華奈子っ！？」
テーブルに用意されていたお絞りで、華奈子は私の手を丁寧に拭いながら言った。
「エド…ちゃんと手を洗ってね」
「華奈子…何故彼と会ったのですか？」
「お見舞いに来て下さったからだわ」
「それだけですか？」
「それ以外、何が有るというの？」
「貴女は、廣徳の家でも…あの妹に、彼を幸せにして欲しいと言っ

ていました」
「そうだったかしら？」
華奈子は寂し気な笑みを浮かべ、飛び散った果汁を拭いていた。
「まだ…あの男が…好きなのですか？」
「…別に…私も部屋に戻って、手を洗うわ」
立ち上がる華奈子の手を掴むと、フワリと笑ってやんわりと手を押し戻される。
何故だろう…いつもと違う…。
吐かれるのは、相変わらず煙に撒く様な言葉に遣いないのに、その雰囲気が…妙に柔らかいというか…。
華奈子の後を追い部屋に入ると、洗面所で手を洗っていた彼女が私に手招きする。
「来て、エド。洗って上げるわ」
「えっ？」
隣に立った私の手を取ると、華奈子は石鹸を付けて丁寧に私の大きな手を洗った。
こんな事をしてもらうのは、小さな子供の頃以来だ…食事の前に、母が私の手を取って…。
「ありがとう…エド」
突然、俯いて手を洗っている華奈子が呟いて…私の手首に熱い雫が落ちた。
手を拭き華奈子を抱き上げると、部屋のソファーに彼女を膝に乗せたまま座り、その上半身を優しく抱いてやる。
「泣きなさい、華奈子。嫌な事は、涙と一緒に流してしまえばいい」
「…エド…」
私の首に腕を回し、華奈子は私の喉元に顔を埋めて泣いた。
熱い吐息が喉仏に掛かると、私は堪らずに華奈子の顎を引き上げて唇を塞いだ。
「…今でも…彼が好き？」
首筋にキスを降らせながら私が問うと、彼女はゆっくりと頭を振っ

た。
「…彼はね…私の幼なじみなの。彼だけが…あの石越しに私を見ずに、付き合ってくれていると…信じてたわ。でも…人の心は移ろいやすい…」
「華奈子」
「廣徳を…バラバラになってしまったあの家と会社を…少しずつ戻して行こうって言ってくれたのに……絵美と…あんな事に…」
「終わった事です。忘れてしまいなさい、華奈子」
「義母が笑いながら言ったの。『華奈子…”Ｃｕｒｉｏｓｉｔｙ ｋｉｌｌｅｄ ｔｈｅ ｃａｔ”（好奇心が猫を殺した）って言葉、ご存知かしら？』って…いつもそう…私が不審に思って調べようとすると、あの女がいつも私に囁いた……結果は、いつもいつも嫌な事ばかりで…」
「だからあの時…クラブで私の事を詮索しようとして、怖くなったんですね？」
「私ね…だから怖くて…決心がつなかくて…ごめんなさいね」
「華奈子？」
「ごめんなさい…本当に、ごめんなさいね」
「華奈子、何を謝るのです？」
華奈子は、幼子の様に私の胸に顔を擦り付けて泣き出した。
余りのあどけなさに涙を啜ってやると、潤んだ瞳で見上げられドキリとする。
少女の顔と大人の女性の顔、クルクルとその表情を変える私の可愛い女。
「エド…私のスーツケースを隠しているのは、貴方なの？」
「あぁ…申し訳ありません。貴女が出て行ってしまっては困ると思いまして。貴女の躰の為です…許して下さい」
「返して下さる？どうしても必要なの」
「華奈子が、出て行かないと約束して下さるなら」
「大丈夫よ…もう、全てが終わるわ」

「華奈子…何を…」
華奈子は私の膝を下りると、床に正座をして頭を下げた。
「Ｍｒ．エドワード・バークレイ……私の、廣徳華奈子の顧問弁護士と、会っては頂けないでしょうか？」
床に深々と土下座をする華奈子を、私は息をする事も忘れ見下ろしていた。

第8章

翌日の昼には入港するという夜の船上パーティーは、中々に華やかなもので、初めて参加したヘンリーは、大人の仲間入りが出来た様で浮き足立っていた。
行先がドラゴンの国の横浜という港だという事で、乗客は欧米人ばかりで無く日本人も大勢居る。
色とりどりのドレスを着た女性達、中には日本の着物ドレスを着た女性も居た。
「楽しんでるかい、ヘンリー？」
ドラゴンがグラスを片手にヘンリーの隣に座った。
ヘンリーの父親、この『エスメラルダ』の船主であるトマスの友人で貿易会社を営む日本人のドラゴンを、ヘンリーは父親と同じ様に好きだった。
「ねぇドラゴン、あの日本の男性達が着ている、変なスカートみたいなのって何？」
「あぁ…あれは袴といって、日本式のズボンだよ」
「日本に行ったら、僕もアレを履くの！？」
「いや、無理に履く必要は無い。今の服でＯ．Ｋ．だよ。君が着たいなら用意するけどね？」
「…僕、今のままの服でいいよ」
ヘンリーは口を尖らせて言った。
「ドラゴンは、今回何を買って帰るの？」
「今度ね、我国の帝国議会議事堂が新しく出来るんだ。私は、その中で使われる装飾品や、家具等の買い付けに行ったんだよ」
「船倉に積まれてるの？」
「いや…残念ながらこの船には、別の大量の荷物を積まれてしまったのでね。別の船で送ったのだよ。全く…何故この船にあんな物…」
ドラゴンはカーキ色の軍服を着た、数人の日本人をチラリと眺めた。

「何？」
「子供は知らなくていい事だ。それよりも君達子供は、もっと美しい物を一杯見なくてはいけない」
「例えば？」
「広い海、満天の空、美しい自然、それぞれの国の文化や工芸品…そして美しい女性もね」
東洋人特有の、のっぺりとした顔を綻ばせたドラゴンが、パーティー会場を見渡す。
「さて、美人はいずこ…」
「ドラゴン、奥さん居るんでしょ？」
「居るよ…美しく、賢く、奥ゆかしい僕の姫君…」
「大袈裟だなぁ」
「いや、本当にプリンセスなんだ。日本のキングの親戚なんだよ」
「へぇ…離れてて、寂しく無いの？」
「寂しいよ、とても…でも、彼女が待っていてくれると思うと、帰国が何倍も楽しくなる」
「一緒に旅すればいいのに」
「躰が、余り丈夫では無いんだ…それに、娘もまだ小さいしね」
「何て名前？」
「華子だよ」
「ハナコ？」
「そう、ゴージャス・レディ！」
「凄い名前！」
ヘンリーが弾ける様に笑った途端、ズズンという震動が船を襲った。
「キャァーッ！！」
「何だ！？何があった！？」
人々が騒ぐ中、ドラゴンはしっかりとヘンリーを捕まえて、部屋の隅に退散した。
「ドラゴン、入口に！早く逃げなきゃ！！」
「駄目だヘンリー…人で溢れているからね。ここで、トマスを待っ

た方がいい」
程無くしてトマスとエスメラルダが、青い顔をして駆け付けた。
「ありがとう、ドラゴン！あの人波で、ヘンリーを見失う所だった」
「何があった、トマス！？」
「わからない…ただ、あの震動…機関部に何か有ったのかも知れない。今、艦長が調査中だ」
「又なのか！？この辺りは？」
「東シナ海だ…上手くいけば、中国や台湾船籍の船が航行しているだろうし、無線で救難信号を送り続ければ…」
「トマス…それは不味い…」
突然2人は日本語で話始め、トマスは青い顔で震えた。
「取敢えず、必要な情報を集めて来る。ドラゴン、どうしても必要な物は有るか？」
「いや、パスポート等も貴重品も、常に携帯している」
「ならば、ヘンリーを頼む。甲板の救命ボートの所で、待っていてくれ！」
エスメラルダは何も言わずにヘンリーを抱き締め、顔中にキスを降らせた。
両親と離れてドラゴンと共に甲板に上がると、煙りと共にむせかえる臭いに鼻を覆った。
「遣られたのは…エンジンか！？」
「船は！？船はどうなるの！？」
「ヘンリー、残念だが…」
ドラゴンが苦悶の表情を見せた。
既に救命挺には人が溢れ返り、船員達が誘導に手間取っている。
船員の配る救命胴衣を2枚受け取ると、ドラゴンはヘンリーにしっかりと紐を結わえて胴衣を着せながら言った。
「大丈夫だ、ヘンリー。まだまだボートは有るから、このままトマスを待とう」
立ち上がり、既に海上に浮かんだ救命挺を見詰めると、ドラゴンは

眉間に皺を寄せ何か悪態を吐いていた。
どの位の時間が流れただろうか…。
後2挺で救命挺も無くなるという頃になって、ようやくトマスが甲板に現れた。
「お父様！！」
「待たせた、ドラゴン」
「…トマス…エスメラルダは？」
トマスは悲しい笑みを浮かべ、再びドラゴンと日本語で話し出した…と、突然ドラゴンがトマスを殴り付けたのを見て、ヘンリーは驚いた。
「ドラゴン！？何するの！！」
「いいんだ、ヘンリー…もう少し、そこで待っておいで」
トマスは息子に優しく声を掛けると、再びドラゴンに話し出した。
そして、胸ポケットから黒いビロードのケースと封蝋のされた手紙をドラゴンに渡した。
ドラゴンはケースを開けると、驚いた様な声を上げ、早口で何かを捲し立てた。
あのビロードのケースには見覚えが有る…あれは、お母様の何よりも大切にしている、エメラルドのブローチが入っているケースだ。
お父様が、僕が生まれた時にお母様に贈った、とても綺麗な…お母様の瞳と同じ色をしたエメラルド！
お父様もお母様も…それを『エスメラルダ』と呼んだ…そう、この船と同じ名前で…。
「いずれは貴方にあげるわね。貴方の大切な女性に着けて貰えたらいいわね…そして、代々受け継いで行くの。『エスメラルダ』は、そういう価値の有る宝石なのよ」
お母様は、いつもあのビロードのケースを開けてそう話してくれた。
ドラゴンが、トマスの差し出した手を握る…そして、涙を浮かべ友の躰を抱き締めた。
やがてトマスはゆっくりとヘンリーに近付き、胴衣の下の上着の内

ポケットにパスポートと旅券を捩じ込み、コートを羽織らせて言った。
「ヘンリー、一足先にドラゴンと共にボートに乗りなさい。私と離れている間は、ドラゴンの言う事をちゃんと聞くんだ…いいね？」
「お父様とお母様は？」
「大丈夫、お母様を連れて最後のボートに乗るから、心配いらないよ」
「本当に？」
「本当だ。そうだ、私の財布を預けて置こう。これで信用出来るかい？」
「わかった…お父様が来る迄、僕が預かって置くよ」
「…私も…約束させてくれないか？」
ドラゴンが、トマスとヘンリーの手を握り神妙な顔で言った。
「トマス…君の大切なヘンリーは、僕の命に替えても守るよ。そしてヘンリー…君のお父さんから渡された物は…私が大切に預かる」
「頼むよ、ドラゴン」
「任せてくれたまえ。日本人は、必ず約束を守る！私にもしもの事が有った時には、東海龍王、敖廣（ごうこう）の名に置いて、私の一族が代わりに約束を果すと誓おう！！」
「ありがとう」
ドラゴンはヘンリーを連れて、目の前に有る救命挺に乗り込むと、ヘンリーの頭から毛布を被せて抱き寄せた。
やがて、鎖の軋む音と共に2人の乗った救命挺が下ろされる。
その時、違う鎖の軋む音と共に、最後の救命挺が隣で動き出した。
「えっ！？何で？お父様もお母様も、まだボートに乗って無いよっ！？」
ヘンリーが真っ青になってドラゴンに尋ね…ドラゴンは震える手でヘンリーを抱き締めた。
「何で！？嫌だ！嫌だよ！！お父様！？」
立ち上がり掛けたヘンリーの躰を、ドラゴンは力の限り押さえ込む

…ヘンリーは、甲板から身を乗り出す様にして救命挺が着水するのを見詰めるトマスと視線を絡めた。
「何で！？ドラゴン！！」
「ヘンリー…よく聞きなさい。君の両親は…船に残る決心をしたんだ」
「嘘だ！！お父様とお母様が、僕を置いて行く筈が無いじゃない！？」
「…ヘンリー」
「嫌だよ！！戻って、ドラゴン！！」
「無理なんだ…もうこのボートにも、隣のボートにも、人は乗れない」
「嫌だ、嫌だよ！！じゃあ、僕を戻して！お父様達と一緒に、あの船に残るっ！！」
「聞き分けてくれ、ヘンリー…」
「嫌だ、ドラゴン…嫌だぁ…」
救命挺のそこかしこで啜り泣きが聞こえ…ゆっくりと『エスメラルダ』から離れる。
甲板から続け様に打ち上げられる、花火の様な救難信号を見て、誰かがポツリと呟いた。
「綺麗ね…まるで、最後の花道を飾ってるみたい…」

明け方に運良く救助された船の甲板で、傾きながら沈んで行く『エスメラルダ』の小さな影を、ヘンリーはじっと見ていた。
もう涙は涸れていた…ただ、言い様の無い怒りが腹の底から沸き上がるのを感じていた。
数時間後上海に着き、日本への再渡航の手続きをやっと終え、疲れ切ったドラゴンとヘンリーの前に、カーキ色の軍服を着た日本人がやって来た。
「ヘンリー…一言も話すなよ…」

ドラゴンはそう言って、日本人達と険悪なムードで話し出した。
やがて、軍服の男がヘンリーに腕を伸ばした時、ドラゴンは内ポケットから拳銃を取り出した。
そして…事もあろうか、ヘンリーに銃口を向けたのだ！
「……ド…ラゴ…」
「ほぅら、ヘンリー坊や…ボヤボヤしていると、当たってしまうぞ！？」
そう言って、ドラゴンはヘンリーの足元を撃ち抜いた。
「……何で！？」
「何で？邪魔になったからに決まってるだろう？助かりたかったら、共同祖界にでも逃げ込んで見るんだな！？」
「畜生っ！！」
「ほぅら、走れよヘンリー？悔しかったら、日本迄…私を追い掛けて来い！！」
続け様に2発3発と発砲して足元の石を吹き飛ばされ、ヘンリーは踵を返して死に物狂いで走り出した。
後ろからカッカッと追い掛けて来る軍靴の音…叫ぶ日本語…ざわめく中国語…。
訳がわからない…今迄、あんなに優しくしてくれていたのに…。
どこをどう走ったのかはわからない…ただ、原色の漢字の看板と、今迄嗅いだ事の無い臭いと…のっぺりとした東洋人達の顔、顔、顔。
怒りだけが、沸々と沸き上がる…畜生、畜生、畜生！！
やがて…東洋の魔都上海という巨大な街に、ヘンリーは呑まれていった。

第9章

書斎に現れたその長身の男を見て、私は息を呑んだ。
余り人に呑まれる方では無いのだが…。
その日本人は、黒いブリティッシュ・スタイルのスーツをスマートに着こなし、長めの前髪を後ろに撫で付け、精悍なマスクの下から獰猛な焔をちらつかせた瞳を私に向けた。
「はじめまして、Ｍｒ．バークレイ。私、廣徳華奈子嬢の顧問弁護士をしております、連城仁と申します」
聞き惚れる様なバリトンで、流れる様に流暢な英語で挨拶をする。
「はじめまして、連城さん…それともＰａｎｔｈｅｒとお呼びした方が宜しいでしょうか？」
私は、わざと日本語で受け答えて、手を差し出した。
「エドワード・バークレイです」
連城はニヤリと笑いながら、差し出された手を握り返す。
「本日は貴重なお時間を頂き、恐縮しております」
「…で、どちらの名前でお呼びすれば宜しいでしょうか？」
「お好きになさって下さい…その渾名で呼ばれる事も多いので。ただ、今回私はネゴシエイターとしてでは無く、顧問弁護士として伺いました」
「…成る程…では、連城さんと呼ばせて頂きましょう。それで？華奈子の顧問弁護士さんが、私にどの様なご用件でいらしたのですか？」
「…華奈子嬢の持つ、ブローチの件で伺いました」
覚悟はしていたのだ…あんなに頑なに嫌がっていたのを、何度も揺さぶりを掛けて来たのだから…。
だが、顧問弁護士を寄越す程嫌がられていたとは…Ｐａｎｔｈｅｒは、以前腕利きの検事だったと聞いた。
もし、日本の法律に適応されると、華奈子に会う事はおろか、近付

く事も出来なくなってしまう…それだけは、何とか避けたいのだが…。
どう説得したものか…相手は、百戦錬磨のＰａｎｔｈｅｒなのだ。
話を聞くふりをして足を組み、口に手を当てて逡巡する私を見て、Ｐａｎｔｈｅｒは余裕の微笑みを漏らす。
「…どの様な？」
たっぷりと時間を掛けて、尋ね返した。
「華奈子嬢は……自身の所有する手紙類とブローチ、それに関する付属の品を……Ｍｒ．ヘンリー・アンダーソンに譲渡したいとお考えです」
「……誰…ですって？」
私は、目の前が暗く霞むのを必死でこらえ、震える声で尋ねた。
…華奈子が…エメラルドの譲渡を決めた！？
あれは…あれは、バークレイの物だというのにっ！？
誰だ、ヘンリー・アンダーソンとは！？
「…誰だ…それは？」
地の底から響く様な唸り声と共に私は連城に尋ねたが、彼は私の様子をじっと観察するばかりで、何も答えない。
「何者なんだ、そのヘンリー・アンダーソンとはっ！？」
「…はて……ご存知では？」
「知らないぞ！！」
「…そうですか」
「その、ヘンリー・アンダーソンに…全て贈られるのか！？」
「そうです」
静かに答える連城の姿が、ゆらりと霞む…跳ね上がる心拍数…沸き上がる怒り…。
「……失礼」
私は部屋を退室し、華奈子の部屋に急いだ。
ノックもせずにドアを押し入ると、ぼんやりと窓辺に佇む華奈子の前に立った。

「……華奈子」
肩で息をしても、酸素が足りない…ぼやけた視界が、泣き出しそうな彼女の顔を捉えた。
私は、華奈子の細い首に両手を掛けて撫で上げた。
「…華奈子…何故…」
「…エド」
「誰なんだ…ヘンリー・アンダーソンとは…何者なんだ？」
「…」
「あれは…あのエメラルドは……バークレイの物なんだぞ？それなのに…お前は…」
私は彼女の首を両手で掴み、ゆっくりと締め上げる。
「何故…何故私にこんな事をさせる？こんなに…こんなにも、お前の事を…」
「……殺して…エ…ド…」
苦しい息の下、華奈子の悲し気な瞳が涙で濡れ、私の行動を受け入れた躰が小刻みに震える。
「華奈子ッ！！」
私は……次の瞬間、華奈子の躰を強く抱き締めていた。
華奈子は咳き込み、大きく喘ぐ様な息を繰り返して涙を流す。
「最後の疑問が、晴れました」
背後で、Ｐａｎｔｈｅｒの冷静な声が響く。
「廣徳さん…彼は、何も知らなかったのです」
「何の事だ！？」
私の問い掛けに、腕の中で喘ぐ華奈子が反応し、腕を上げ私の頬を撫でた。
「…ごめん…な…さい……エド…お願…い……殺…して…」
「何を言っている、華奈子！？待っていろ、今医者を！」
携帯を掛ける私に華奈子は頭を振ると、そのまま腕の中で意識を飛ばした。
「華奈子！？華奈子！！大丈夫か！？」

連城が近付き華奈子の様子を見ると、ホッとした様に頷いた。
私は彼女をベッドに寝かせ、飛んできた医者に後を任せると、連城と共に書斎に戻った。
「…取り乱してしまい…失礼しました」
「いえ」
「どういう事なのか、ヘンリー・アンダーソンとは何者なのか、教えて頂けますか？」
「その前に…貴方は先程、『あのエメラルドは、バークレイの物』だと仰いました。その説明からして頂けますか？」
「…言葉通りです。あのエメラルドは、元々バークレイの物なんですよ。それを、ドラゴンと呼ばれる日本人に騙し盗られたと聞いています」
「どなたから、お聞きになりましたか？」
「祖父から…私は、一族の威信を懸けて、そのエメラルド取り戻す為に日本に来たのです」
「どの様に盗まれたか、教えて頂けますか？」
「何故です？」
「事実確認です」
「私の先祖は、『エスメラルダ』という客船の船主でした。サンフランシスコと横浜間を就航するその処女航海で、エンジンが爆発し船は沈没、船主夫婦は船と運命を共にしたそうです。その先祖の友人であるドラゴンと呼ばれる日本人に、エメラルドと一人息子は託された。しかし救助され到着した上海で、ドラゴンは一人息子を殺そうとしました。少年は命からがら逃げ延び…エメラルドはドラゴンに奪われた…と聞いています」
「エメラルドについて、何か聞いていますか？」
「一人息子が生まれた記念に、妻に贈られた物だと…妻のグリーンの瞳と同じ色のその石を、彼女は子孫に受け継いで行く事を望んでいたと」
「…他には？」

「他…とは？」
「何でもいい…きっと子供の頃から聞いていた筈です。思い出す事は有りませんか？」
「例えば？」
「船の事でも、ドラゴンという人物の事でも…エメラルドの事でも…」
「船については…少年が沈没する所を、救助された船から見ていたそうです。後は、船上パーティーがあったと…西洋人も日本人も居た様で、着物や袴や軍服の人が居たと」
「ドラゴンという人物については？」
「少年の父親の、親しい友人だったと…彼は、船主だった友人と少年に誓いを立てたにも係わらず、裏切ったのです！」
「エメラルドの事は？他には何か聞いていますか？」
「とても価値の有る物だと聞かされていた様です。夫婦はエメラルドの事を、船と同じ名前で呼んでいた。それは、妻の名前だったそうです」
「『エスメラルダ』ですね？」
「はい」
連城は、一通りの話を聞くと、足を組み替え改めて私を見詰めた。
「貴方は、華奈子嬢の事を最初からご存知だったのですか？」
「いえ…華奈子との出逢いは、全くの偶然です。彼女を引き取った時に調べた身元調査で、彼女の母親の婚約の写真を手に入れました。そこに、あのエメラルドが写っていた」
「成る程…概ね理解しました」
「何をですか？」
「どこまで、正確に伝わっているか…何が間違っているのか」
「…」
「どこから話しましょう？」
「全て…ヘンリー・アンダーソンが、何者なのかから…」
「…ヘンリーの父親、トマス・アンダーソンは、ニューヨークで小

さな海運会社を営んでいました。そこで彼は、西インド諸島や南アメリカを航行する船舶を所有し成功し、結構な資産を手に入れる事が出来ました。やがてキューバ等の政治的に不安定な情況を見越し、拠点をサンフランシスコに移した。兼ねてから東洋との交易を夢見ていた彼は、太平洋航路便を開拓して行った。夢の最終目的地は…上海だったそうです。」

「…」

「東南アジア諸国への航路を開拓し、目的地の上海への航路拡大が目前だった時、彼の船が次々に沈没事故を起こした。しかし、彼はそれでも怯まなかった。何とか資金をかき集め、サンフランシスコ・横浜間の客船を就航させた…トマス・アンダーソンにとって、それは最後の賭けでした」

「…それは」

「その船も、残念ながら謎の爆発事故で沈没してしまい、トマス夫婦は船と運命を共にした。彼等の一人息子のヘンリーは救助され、上海に上陸しますが…その辺り数年の記録は、どこを探しても見付かりません。子供が一人異国で生きていくのは、並大抵の苦労ではなかった筈です。次に彼の記録が出てくるのは、終戦の少し前…流暢な北京語、広東語、上海語を操る、アメリカ軍の通訳として活躍したそうです。その後本国に凱旋し、ニューヨークにあった父親の金融会社を発展させ、事業を拡大して大成功を納めました」

「…彼は…でも、名前が…」

「あぁ…言い忘れていましたが、彼は軍に入隊する以前に、上海に来ていたアメリカ人の養子になっています。ヘンリー・アンダーソンという名前を消してしまいたかったのか…公的記録には適当な名前しか記載されていませんでしたが、新しい名前はキチンと残っています」

「…」

「彼の名前は、リチャード・バークレイ…貴方のお祖父様です」

話の途中から予想は付いていたものの、私は喉の乾きを抑えきれず、

テーブルに用意された紅茶を煽った。
「…ひとつお聞きしても宜しいですか？」
「どうぞ」
「ヘンリー・アンダーソンの記録があやふやになっていたにも係わらず、それがリチャード・バークレイ…祖父だと決定付けた根拠は何ですか？」
「貴方に伝えられた話だけでは、根拠に欠けると？」
「私のは、あくまでも口伝です。祖父が他人から聞いた話だという可能性も有るでしょう？貴方が…Ｐａｎｔｈｅｒが、そんなあやふやな話を鵜呑みにするとは思えません」
「…写真です」
「写真？」
Ｐａｎｔｈｅｒは自分のアタッシュケースを開き、中から一冊のアルバムを取り出した。
ページを開くと古い写真が貼り付けられており…その一枚をＰａｎｔｈｅｒが示した。
「この写真です」
そこには髭を蓄えた日本人男性と、西洋人の女性が写っていた。
「見覚えは？」
「え？」
Ｐａｎｔｈｅｒが女性を指し示す…長い髪を下ろした女性は、少し大きめな口の口角を上げて微笑んでいる。
「彼女は、直ぐに気付いた様ですよ？」
「彼女？」
Ｐａｎｔｈｅｒは立ち上がり、壁に掛けられた写真を一枚取り外し、私に渡した。
「気付いたのは、華奈子嬢です」
そこには、曾祖母に抱かれた幼い祖父の姿があった。
「貴方は、エスメラルダ・アンダーソン…貴方の曾祖母様が、華奈子嬢の曾祖父、廣徳弥一郎氏の秘書をしていた事が有るのを、ご存

知無かったんですね？」
「えぇっ！？」
「最近の技術の進歩は目覚ましい…貴方の写真を、華奈子嬢は携帯で送ってくれました。そこに写っている女性と、アルバムの女性をコンピューターで解析し、同一人物だと確認しました。そして…」
次のページに貼られた、西洋人の子供の写真…。
「弥一郎氏の元に残っている、ヘンリー・アンダーソンの写真です。この写真とそちらの２人で写っている写真、更には貴方のお祖父様の若かりし日の写真、そして最近の写真を解析した所、９９．８％の確率で同一人物だという結果が導き出されました」
「…エメラルドは？」
「持参しています…が、貴方は事実を知る覚悟が有りますか？」
「この期に及んで、まだ何か有るというのですか！？」
「貴方は…華奈子嬢が、何故頑なにあのブローチを誰にも見せず大切に守って来たか、わかりますか？」
「え？」
「貴方のお祖父様も大変苦労されて、貴方自身もあのブローチに翻弄された人生を送って来られた…しかし、事実を正確に把握した上で一番苦しんだのは、彼女かもしれない…私は、彼女こそ一番の被害者だと思います」
「連城さん…話して下さい！！彼女は…華奈子は何を苦しんで来たのですか！？」
「その事実を知って、貴方は正確にＭｒ．リチャード・バークレイに伝える勇気がありますか？高齢で余命幾ばくも無い貴方のお祖父様に、貴方は彼女を会わせなければならないのでしょう？」
「何故それを…」
「彼女はずっと苦しんで来た…ブローチの持ち主に、事実を告げなければならない重責に耐え、自らも調査して来た…弥一郎氏の本当の遺言状を見付けたのは、子孫の中で彼女だけだったのです」

第１０章

本国に向かうプライベート・ジェットの中、華奈子は私の隣の席で黙ったまま俯いていた。
華奈子の首には白い包帯が巻かれ、私達はあれ以来顔を合わせる事も無く、一言の言葉も交わしていなかった。
あの日、Ｐａｎｔｈｅｒとの会見が終り華奈子の部屋に行くと、専門医が華奈子の治療を終えて帰ったところだという。
「様子は、Ｄｒ．？」
「何があったのです？喉の損傷が激しく…１週間は声を出さない様に…食事も、流動食にと言われましたが？」
「…そうか」
Ｐａｎｔｈｅｒは黙って華奈子の枕元に置かれた椅子に座ると、彼女の手を取った。
「苦しかったですね、大丈夫ですか？」
そう彼女に微笑み掛ける。
華奈子は喉に包帯を巻かれていたが、Ｐａｎｔｈｅｒの姿を見て安心した様に頷いた。
「…訴える事も出来ますが？」
というＰａｎｔｈｅｒの質問に、華奈子は後ろに立つ私に視線を移すと、フルフルと頭を振った。
ニッコリと笑ったＰａｎｔｈｅｒは、了解したという様に頷く。
「廣徳家からお預かりした書類ですが、かなり不備が有りましたので、全面的に書き直させました。ご希望でしたブローチ関係と別荘の所有以外は、全て放棄してしまって構わないのですね？」
華奈子が頷くと、Ｐａｎｔｈｅｒはアタッシュケースの中から書類を出して彼女にペンを渡す。
華奈子は指定された箇所にサインをして、Ｐａｎｔｈｅｒに返した。
「…はい。それではこちらの書類が、ブローチをＭｒ．アンダーソ

ンに譲渡する書類、そしてこちらが別荘を土屋氏に譲渡する書類になります」
書類を受け取りサインをする華奈子を見て、私は不審に思い質問した。
「ちょっと待って下さい。それでは、華奈子には何が残るというのですか？」
ゆっくりと振り向いたＰａｎｔｈｅｒが、私を見上げる。
「廣徳家の物は、何も残りません…華奈子嬢には、廣徳奈津子様…お母様の遺産である通帳と、数点の宝飾品のみが残されます」
そう言って華奈子のサインした書類を受け取り、新たな書類を渡す。
「これが、廣徳家から除籍する為の書類です」
「除籍ですって！？」
「そうです。廣徳源蔵氏の籍から、除籍する為の書類です。借金の件もありますし、血縁も無い訳ですから…除籍しても名字は廣徳を名乗れますし、宜しいかと思いますよ。因みに、廣徳家の土地家屋共に、既に抵当に入っていました」
サインと捺印をして、華奈子が書類を渡すと、Ｐａｎｔｈｅｒは確認をしてアタッシュケースに仕舞い、２枚の封筒を彼女に渡した。
「お預かりしていた通帳を、解約して来ました。後は、宝飾品ですが…こちらがルビーのルース以外の売却代金です」
多分、合計しても２００万円に足りない位の額だろう。
その封筒を、華奈子は嬉しそうに受け取った。
最後にＰａｎｔｈｅｒは小さなケースを取り出した…表から見えるアクリル盤の中には、小振りだが見事なピジョンブラッドのルビーのルースが納められている。
「…本当に、報酬として頂いて宜しいのですか？」
華奈子はニッコリと笑いながら頷くと、深々とＰａｎｔｈｅｒに頭を下げた。
「…わかりました。それでは、以上で私とのご契約は完了となります」

華奈子は、再び頭を下げる。
「これからの事ですが…多分貴女は、Ｍｒ．バークレイと共に渡米する事になります」
驚いた様な表情の華奈子に、Ｐａｎｔｈｅｒは少し険しい顔をして話し掛けた。
「アメリカで、貴女はＭｒ．アンダーソンと対面し…多分かなり辛い思いをされると思います。だが、そこに私は居ません…貴女は、ご自分でＭｒ．アンダーソンに、彼のご両親の想いを伝えなくてはならない。わかりますか？」
華奈子は、強張った顔で頷いた。
「貴女のフォローは、Ｍｒ．バークレイがしてくれるでしょう。諦めない事です…あの日記を見付け出した貴女にしか、真実は語れない…あの時の弥一郎氏の想いも行動も、あのブローチに込められた想いも…」
不安そうな華奈子の瞳を見て、Ｐａｎｔｈｅｒは彼女の手をしっかりと握る。
「大丈夫…貴女があの日記を見付ける事が出来たから、弥一郎氏の疑いを晴らす事が出来るのです。あの日記が無ければ、大変な事になっていたんですよ？わかりますね？」
硬い表情で、華奈子は頷いた。
「呉々も…短気を起こさない事。椿からの伝言です。必ず元気で再会しようと…」
寂し気な笑みを浮かべて、華奈子は目を閉じた。
「それでは、私はこれで…」
ベッドから出ようとする華奈子を押し留め、Ｐａｎｔｈｅｒは私と共に部屋を退室した。
「Ｍｒ．バークレイ…彼女から目を離さない事です」
屋敷の入口で、硬い表情のＰａｎｔｈｅｒが言う。
「彼女を失いたく無ければ、彼女を一人にしない事です」
そう言って、彼は帰って行った。

出国前の空港で、華奈子の携帯に土屋から電話が入り、私は彼女の声を久々に聞いた。
別荘の譲渡手続きが整った礼の電話だった様だが、携帯から土屋の声が漏れ聞こえ、彼女を誘っているのがわかった。
「…一緒に住みませんか？」
それは、父と娘に戻れる最後のチャンスだったに違いない。
しかし、華奈子は始終俯いたまま、感謝の言葉と共にその申し出を辞退していた。
「…華奈子、少しお話ししても宜しいですか？」
渡米の調整で忙しくしていた私は、食事も面会をも拒み続ける華奈子に、１０日振りに話し掛けた。
隣で俯いたままの華奈子が、微かに頷く。
「祖父に会って頂いた後の事です。貴女、どうなさるおつもりですか？」
ゆるりと私の顔を見上げた華奈子を見て、私は驚いた。
落ち窪み濃い隈に縁取られた目、ふっくらとしていた頬はやつれ、真っ青な顔色をしていた。
「華奈子！？貴女、何日寝ていないのです！？」
微かに眉を寄せ、華奈子は私を避ける様に再び顔を伏せる。
「あちらにベッドがあります！水平飛行の間だけでも、休んで下さい！」
ゆるりと頭を振る華奈子のシートベルトを外し、私は彼女の腕を掴むと強引にコンパートメントに連れ込んだ。
長時間のフライトでも快適に過ごせる様に、コンパートメントにはダブルベッドが設えて有る。
私は華奈子をベッドに座らせると、彼女の手を取り腕を捲った。
無数に鬱血した点滴の跡…。
「食事も…取れていなかったのですか？」

私の質問に、俯いたままの華奈子が、掴まれた腕を引きながら小さな声で答える。
「…平気よ」
「後１２時間は空の上です。横になって、ゆっくりと休んで下さい」
「…平気…それよりも、貴方の方が疲れているでしょう？この１０日間、大変だったと聞いたわ…貴方こそ、ここでゆっくり休んで下さい」
「華奈子」
彼女の前に跪ぎ、膝の上の手を握るとビクリとして引かれた。
「私が、怖いですか？」
彼女を覗き込んで尋ねると、フルフルと頭を振る。
「私が…憎い？」
「…どうして？」
私は、華奈子の首の包帯をそっと解いた。
「本当は、もう必要無いのでしょう？」
視線を外す華奈子の首に、まだ鮮やかに残る鬱血の跡…。
「私は…貴女を…殺してしまうところでした」
「…別に…良かったのに…」
「貴女は、いつもそうだ…彼が葡萄を持って来た時も、そう言って…」
華奈子の首に出来た痣を撫でると、彼女は眉を寄せて首を竦めた。
「貴方は、私達一族に恨みを抱いてた訳だし…」
「貴女のせいでは無いでしょう？」
「私自身にも、裏切られたと思ったのでしょう？」
「それは…だが貴女こそ、私には絶対に渡す訳にはいかなかった…そうですよね？」
「私が…もっと早くに貴方の事を調べていれば良かったのよ」
「怖かったのでしょう？」
「それは…言い訳に過ぎないわ」
「でもね、華奈子…そんな事で命を賭けていては、命が幾つ有って

も足りませんよ？」
首を撫でていた手をスルスルと撫で上げて、私はいつもの様に華奈子の頬を撫でていた。
「祖父に会うのが、怖いですか？」
「…ずっと、考えているの」
「何をです？」
「Ｍｒ．アンダーソンは、とてもご高齢だと聞いたわ。とてもご苦労されて…頑固な方だとも…そして、余命幾ばくも無い状態であると」
「そうですね。貴女の言うことは、間違ってはいません」
「廣徳の一族の事を…恨んでいらっしゃるのでしょう？」
「えぇ…まぁ…」
「そんな方に…真実を告げてしまって良いのかしら…」
「華奈子？」
「Ｍｒ．アンダーソンのご両親の想いをお伝えしたい気持ちは有るの…でも、今のＭｒ．アンダーソンにとって、それが一番幸せな事なのかどうか…」
「待って下さい、華奈子！貴女は、祖父にどの様に伝えるおつもりなのです？真実を告げずに、あのブローチを祖父に見せれば…貴女がどんな事になるか、わかっていますよね！？」
「そんな事は、どうでもいい…今は…Ｍｒ．アンダーソンにとって、真実を告げる事だけが幸せなのかどうか、考えなきゃいけないという事よ！」
「どうでもいい事等ではありませんよ、華奈子！？廣徳家の名誉だけでは無い…貴女自身の命も…」
「そんな物は…」
「いい加減にしなさい、華奈子！！」
息を荒げて、華奈子の躰を力の限り抱き締める。
「…お前がどうなってもいい訳が無いだろう！？何故わからない！！」

「……貴方…変よ、エド」
「何が！？」
興奮した私の胸の中で、華奈子が小さく…しかし、冷静な言葉を紡ぐ。
「だって…お芝居は、もう終わりの筈でしょう？」
「何！？」
「貴方はあの石の為に、私に好意を持っている振りをした…でも、私がＭｒ．アンダーソンに譲渡すると決めた時点で、貴方がお芝居を続ける意味は無い筈でしょう？」
「華奈子…知って…いや、違う！！」
「違わない…私だって、理由も言わず貴方にあの石を渡せないと言っていたのだから、お互い様だわ」
「しかし、それは…」
「それとも面白い？たいして綺麗でも無い日本の小娘が、貴方の言葉や態度で右往左往するのを見て、楽しんでるの？」
背筋が寒くなる程の冷静さを身にまとい、華奈子は微笑んだ。
「もう、無理して私に優しくする必要は無いわ…どうぞベッドで休んで下さい。私は、どうやったって眠れやしないもの」
ゆらりとベッドから立ち上がった華奈子を抱き上げると、ベッドの上に担ぎ上げ自分も一緒に布団に入り抱き締める。
「な…何するの！？」
「見ての通り…お前に添い寝している」
「添い寝って…抱き付いてるわ！」
「じゃないと、逃げるだろう？」
「寝れないって言ったわ！」
半泣きで叫んで暴れる華奈子をベッドに押し付けると、片手で彼女の目を覆いその唇に口付けを落とす。
全身を強張らせ、歯を食い縛った華奈子を、少しずつ時間を掛けて溶かしてやる…やがて全身の力を抜き、華奈子はしゃくり上げ始めた。

目を覆った掌が濡れ、溢れた涙が手の隙間を伝いベッドを濡らす。
手をはずして涙を拭ってやり、抱き直して背中を撫でさすってやると、華奈子は胸の中で小さく呟いた。
「…やっぱり変よ…エド」
「そうだな」
「言葉も…変だわ」
「…そうだな」
どうかしている…私が仮面を外し素顔を曝すなど…。
「華奈子…祖父は、お前の言う事を信じないかもしれない」
「…そう」
「私が話す…お前は、私の言い足りない部分を補ってくれればいい」
「…わかったわ」
「じゃあ、休め…目を閉じて…力を抜いて…」
「…添い寝なんて初めてだもの…緊張するのよ」
「小さい頃、してもらっただろう？」
「…無いわ」
「一度も？」
「記憶に残る限り…一度も無いわ」
Ｐａｎｔｈｅｒが、華奈子の母親は結核だったと言っていたのを思い出した。
「添い寝デビューも…味わえる訳か」
「…」
「可愛い…華奈子…」
「…変よ」
「愛してる、華奈子…」
「…やっぱり、変」
「…愛してる…」
フワリと上がる体温と共に、観念した様に華奈子は大人しく腕に納まった。
それでも穏やかな寝息を立てようとすると、ビクリと痙攣して身を

震わせ起きてしまう。
やがて華奈子は、息を荒げて躰を丸める様に我身を抱くと、脂汗を滲ませた。
Ｄｒ．に診察させると頻脈による発作だが、病名がわからなければ投薬のしようが無いと言われ、私は眉を寄せた。
「苦しいか？」
濡れタオルで首筋や顔を拭いてやると、華奈子はフッと息で笑った。
「平気…いつもの事」
「診察を受けた事はあるのか？」
頭を振る華奈子に、私は溜め息を吐いた。
「お前…」
「…エド」
「何だ？」
「そのフレグランス…私、好きよ」
そう言うと、少しだけ口角を上げて華奈子は笑った。

第１１章

ジョン・Ｆ・ケネディー国際空港に到着すると、エドは迎えに来ていたリムジンで私を病院に運び、強引に検査を受けさせた。
「発作性上室性頻拍ですね。心臓を動かす電気信号が、正常に働かない為に起こる頻脈です。発作の間隔が短いので、ご本人はかなり辛い状態でしょう…連続してマラソンを走っている様なものですから」
「治りますか？」
「えぇ…カテーテルでアブレーション手術を行います」
「アブレーション手術？」
「正常な電気信号が送れる様に、原因になる箇所を焼き切ってやるんです。開胸もしないので、心臓の手術としては比較的安全な手術ですが…」
そう言うと、医者は眉を寄せ検査表を眺めた。
「Ｍｉｓｓ　廣徳の場合、手術以前に問題が有る様ですね。不眠に低血圧、摂食障害…何か思い悩む事でもおありですか？」
青い目の医者は、私の顔を覗き込んだ。
「取敢えず、体調を整えつつ経過を見て、手術に臨みましょう」
「宜しくお願いします」
エドがそう挨拶するのを、私は慌てて遮った。
「勝手に決めて頂いては困ります！Ｄｒ．私は、手術する気はございません！」
今迄黙っていた私が急に話した事で、医者とエドは驚いた様に顔を見合わせた。
「Ｍｉｓｓ　廣徳、体調が戻り次第、早急に手術した方がいい…発作が起き始めて、随分と年数が経っていますね？貴女の心臓は、かなり危険な状態です」
「それでも…今は…出来ません」

エドが憮然と見下ろす中、私は医者に頭を下げた。
「…わかりました。経口薬を出す準備をします」
「ありがとうございます」
診察室を出た途端、エドに腕を掴まれ廊下の端まで引き擦られる様に連れて行かれた。
「華奈子！？何故だ！？」
「手術の事？どんどん勝手に話を進めるんだもの…手術なんてする気は無いわ。今は、もっと大切な事が有るでしょう？」
「だからと言って…祖父との面会が終わった後、直ぐにでも…」
「そうしたら、帰国するもの」
「帰国してどうする！？父上との同居も断ったんだろう！？」
驚いた…何故知っているんだろう？
羽田で掛かってきた電話で、父から同居を切り出された時、本当は涙が出る程嬉しかった。
だが今更同居をしても、父親として振る舞うとはどうしても思えずに断った。
きっと私達が父娘に戻るには、もっと長い時間を離れて過ごす事が必要なのだ…それが叶うかは、わからないけれど…。
「だからと言って…ここに居る理由は無いわ」
掴まれた手首が、ギシリと音を立てる程の力で握られる。
エドは…何を考えているのだろう？
あの石を渡した時点で、私達の関係は精算されて然るべきだ。
なのに…手放すのが惜しくなったとでもいうのだろうか？
金持ち特有の独占欲か？
愛の言葉を紡いで…素顔の自分を曝して…もう何の価値も無くなった女を口説くなんて…。
いや…西洋人にとっては、挨拶の様な物だろう…日本人の感覚とは違う。
何と言っても、エドはバークレイ・コンツェルンの後継者だ。
素敵な相手が居るに違いない…そう、あの写真の様な…。

「英語…話せたのか？」
「…日常会話程度なら。今迄は、貴方が流暢な日本語を話すから、英語を使う必要は無かったの」
「華奈子…それなら、このまま…」
「Ｍｉｓｓ　廣徳！」
カウンターで名前を呼ばれ、私はエドの手を逃れた。
私の手首には、くっきりとエドの手の跡が付いていた。

ドブス・フェリーは、ニューヨーク州ウエストチェスター郡にある。ハドソン川のフェリー乗り場があった事からこの町の名前が付いたそうだが、現在ではウェストチェスター郡内でも有数の高級住宅地となっている。
その一角に、広大な敷地を持つバークレイの屋敷はあった。
元々金融業を営んでいたバークレイ家は、代々投資家として有名だったが、養子に入ったリチャード・バークレイの辣腕で巨大コンツェルンとして成功を収める迄になったと聞いた。
屋敷の車寄せにリムジンが入ると、使用人がずらりと並んでエドに頭を下げる。
日本の屋敷同様、何とも冷たく重苦しい空気が流れるのは、私が歓迎されていない証拠だろう。
近付いて挨拶を交わす男性を、エドはこの屋敷の執事だと紹介した。
「会長は？」
「今は、お休みになっていらっしゃいます」
「華奈子との面会は、いつにセッティングされた？」
「明後日の午後に予定されております」
「わかった…華奈子に、客室の用意を」
「旦那様のご指示で、既に用意を整えてございます。Ｍｉｓｓ　廣徳、どうぞこちらへ…」
「華奈子、後程夕食で」

使用人がすかさず荷物を運ぼうとするのを執事は制し、私はエドと別れ荷物を持つ執事の後に続いた。
「Ｍｉｓｓ　廣徳、言葉に不自由はございませんか？」
「大丈夫だと思います」
「失礼致しました。当家の使用人は、日本語を理解する者がおりませんので」
「エドワード様は、とても流暢な日本語を話されますね」
「あの方は、特別です。幼い頃よりご両親と離れ、このお屋敷で英才教育を受けられました。日本に留学経験もおありです」
「そうなんですか」
いつの間にか別棟の地下に連れて来られた私は、古い大きなドアの前で立ち止まった。
「申し訳ございません…旦那様のご指示で、Ｍｉｓｓ　廣徳にはこちらでお休み頂く様にと、仰せ遣っております」
開け放たれたドアの先に並ぶのは……古い地下牢だった。
３つ並んだ地下牢の内、一番奥の牢の鍵が開けられ中に入るように即される。
小さな石の寝台と、部屋の隅に設えた衝立…向こう側には、蓋の付いた壺の上にトイレットペーパーが置かれてあった。
「荷物は、こちらに置いておきます。後程食事と毛布、灯りをお持ちしますので、しばらくお待ち下さい」
「あの…」
「何でしょうか？」
「出来れば、水を多目に用意して頂けますか？薬を飲みたいので」
執事の眉が僅かに寄った。
「どこか、お加減でも悪いのでしょうか？」
「いえ…大した事ではありません」
「さようですか…承知致しました」
執事は牢を出ると、鉄の格子で出来た扉を閉めて鍵を掛けた。
「申し訳ありませんが、エドワード様に伝言をお願い出来ますか？」

「…どの様な事でしょう？」
「疲れて早く休みたいので…夕食のお誘いはご辞退しますと…お伝へ下さい」
「畏まりました」
そう言って恭しく腰を折ると、執事は地下を出ていった。
私は、薄暗くなった地下牢の中で溜め息を吐いた。
西洋の古い家では、まだこんな物が残っているのか。
しかし、これではっきりしたのだ…Ｍｒ．ヘンリー・アンダーソン…もといＭｒ．リチャード・バークレイが、私を…廣徳家の事をどれだけ憎んでいるのか。
孫であるエドでさへあの様な反応を示したのだから、尤もな話だ。
牢の外、通路の天井近くに設えた換気の為の格子の填まった窓から、微かに夕日が差す。
ニューヨークは緯度は、確か日本の東北地方と同じ位の位置に有る筈だ…東北の１１月の気温とは、何度位になるのだろう？
雪って、１１月に降るのかしら？
ジンジンと冷えて来る寒さに震え、私はスーツケースを開けて着れるだけの洋服を着込み、コートを羽織った。

祖父が目覚めたという知らせを受け、私はこの家の主の待つ書斎に向かった。
相変わらず、辛気臭い家だ…昔からその雰囲気はちっとも変わらない。
それは、私を待つ祖父そのもの…強欲で不遜、我儘で強か、会社に置いても家庭でも、祖父は絶対君主だった。
「ただいま戻りました、会長。お加減は如何ですか？」
「…挨拶はいい。報告を」
祖父が倒れたという叔父の情報は間違いではないかと思う程、プレジデントデスクの向こう側に座る祖父の眼光は鋭かった。

「ご依頼頂きました、ドラゴンに奪われたブローチは…持ち主と共に当家に連れ帰りました」
「見せなさい」
「今はまだ、廣徳華奈子嬢の手元にあります」
フンと鼻を鳴らし、祖父は冷たい視線を私に送った。
「お前は、見たのか？」
「はい」
「どうだった！？」
「どうかとは？」
「素晴らしいエメラルドだったろう！！」
祖父は、爛々と瞳を輝かせて私に熱い想いをぶつけた。
「お前を後継者に選んだのは、正解だった。ドラゴンという名前と貿易会社を経営しているというだけで、奴の氏名も住所も、会社名もわからなかったのだ。誰に探させても、あのエメラルドの行方はわからなかった…」
「畏れ入ります」
「どうやって探しだしたのだ？」
「偶然による産物です」
「まぁいい…運を引き寄せるのも、経営者としての才覚だ」
「ありがとうございます」
「時に、ドラゴンの会社を潰して来たそうではないか？」
「…はい」
「子孫も、やはり卑劣で不遜な連中か？」
「会社を経営している養子が、非常に…あのブローチを手に入れる為に、血の繋がりが無いとはいえ娘を手に掛け様とする男でした」
「成る程…娘に泣き付かれ、懇願でもされたか？」
「いえ…私の一存で」
「構わん。ドラゴンの血を引くのは、連れて来た娘だけなのだな？」
「そうです」
ニヤリと笑った祖父が、今から悪戯を起こそうとする子供の様に見

えた。
「医者に、もう時間はあまり残されていないと言われた。生きている内に、あのエメラルドを取り戻せた事に、私は満足している」
そう言うと、デスクの引出しからマホガニーで作られた小箱を取り出した。
「約束通り、これをお前に譲る事にした」
私は恭しく小箱を受け取ると、中に納められている物を取り出した。
「これで…バークレイの全ては、お前の物だ。エドワード」
私の手の上には、バークレイの当主の象徴である黄金の鍵が乗っていた。
「本日中にお前が新社長に就任した事を、内外のメディアにも発表する。この屋敷も、お前任す事にした。私は近々、別宅の方に隠居する。そして…会長職からも引退する」
「…はい」
「後は…良家から嫁を迎えるだけだな」
「それならば、もう決めております」
「ほぅ…どこの娘だ？」
「…近々、連れて参ります」
「家柄は？」
「申し分ありません。さる国の、王家と遠戚の者です」
「わかった」
家柄を聞いてすんなりと引き下がった祖父に安堵し、私は慎重に話を進める。
「明後日の廣徳華奈子嬢との面会ですが、私も同席させて頂きます」
「そうか」
「それでは、失礼致します」
主寝室を退室し、私は改めて手の中の鍵を握り締めた。
やっと手に入れた…これで、バークレイを掌握出来る！！
然も、祖父は会長職を引退すると言ったのだ！
「エドワード様」

音も無く近付いて来た執事が、私に腰を折る。
「おめでとうございます」
「ありがとう。この屋敷も私が引き継ぐ事になり、会長は別宅の方に隠居されるそうだが…お前は、どうする？」
「出来ましたら、大旦那様と共に、別宅の方に退きたいと思います」
「そうか…跡を任せられる者は？」
「既に教育を修了致しております」
「承知した」
「Ｍｉｓｓ　廣徳より、ご伝言を承っております」
「華奈子から？」
「お疲れだそうで、本日は早くお休みになるそうです。ご夕食のお誘いはご辞退したいとの事でございました」
「そうか…それでは、７時に夕食を頼む」
「畏まりました、旦那様」

翌朝の新聞各社に、バークレイ・コンツェルンの新社長に私が就任したとの記事が掲載され、株価が一気に跳ね上がった。
「昨夜から電報にメッセージカード、プレゼントと、息つく暇も無い」
田辺が口端を上げてカードの山を見せる。
「取材や面会申込みも、山の様に依頼が来ているが？」
「当分シャットアウトだ。全て、本社の秘書を通す様に言ってくれ」
私が社長に就任した事で、田辺は自分から私の私設秘書として働きたいと申し出て来た。
私としても、彼とはいつまでも友人としてフランクな付き合いを続けたいと望んでいたので、その申し出を承諾した。
「華奈子に会ったか？」
「いや？」
「そうか…」

朝食にも出て来ない彼女を心配したが、ついつい雑事に追われてしまっている。
「ご昼食の用意が整いました」
執事が私に告げた。
「華奈子は？」
「お部屋の方で…良くお休みでございます」
「寝ていると？」
「はい、余程お疲れなのでしょう」
私は立ち上がり、胸ポケットから鍵を取り出して執事に示した。
「華奈子はどこだ！？」
「…旦那様」
「私が、バークレイの当主だ…彼女の所に案内しろ！！」

第１２章

案内された地下牢で、華奈子は自らの躰に着物を２枚重ねてコートの上から被り、石で出来た狭い寝台の上で痙攣していた。
「華奈子！？」
牢を開けさせ彼女に駆け寄ると、真っ白な顔色をした華奈子の紫色の唇から絶え間無く吐かれる浅い息が、白い蒸気となって消える。
慌てて脈を取り、その異様な早さに驚きつつ、意識が朦朧としている華奈子の頬を軽く張りながら呼び掛ける。
「華奈子！？華奈子！！しっかりしろ！！薬は！？ちゃんと飲んだのか！？」
執事が眉を寄せ、静かに尋ねた。
「Ｍｉｓｓ　廣徳は、やはりどこかお加減が悪いのでしょうか？」
「華奈子は、心臓に欠陥が有る…ここに来る途中医者に見せたら、早急に手術が必要だと言われた」
「左様でございましたか…」
「薬は！？食事は、きちんと与えていたのだろうな！？」
「申し訳ございません」
「…お前の事だ…会長に命じられたのだろうが…しばらく部屋で謹慎していろ！」
「承知致しました」
私は華奈子を抱き上げると、牢を出ながら指示を出した。
「剣、華奈子の荷物を持って来い！新しく執事になった…名前は？」
「ガルシア・ラシードと申します」
「それでは、ラシード…以後、華奈子を賓客としてもてなせ。客室の用意、それとメイド長とＤｒ．を呼び出せ！」
「畏まりました」
私達は地下牢を脱出し、ラシードに案内された客室に華奈子を寝かせた。

数人のメイドを従えたメイド長が部屋に入り、華奈子を着替えさせる間にＤｒ．が飛んで来て治療をする。
「エド、彼女をどうするつもりだ？」
田辺が、眼鏡越しに私を見上げた。
「…口説き落とす」
「まだやるつもりか！？」
「今度は、本気で…」
「口説いてどうする？とても、アバンチュールを楽しむ様なタイプじゃ無いだろう？」
「当たり前だ！華奈子には、バークレイの花嫁になってもらう」
「本気か！？」
「あぁ…だからお前も…優しく接してやってくれ」
「今更か？散々脅して来たんだぞ！？怖がって、姿を見た途端逃げ出されてるっていうのに…」
田辺が頭を抱えて溜め息を吐いた時、寝室からＤｒ．が顔を出した。
「治療が終わりました」
「様子は？」
「頻脈に関しては専門外なので、処方された経口薬を飲ませました。夜を外気温と同じ場所で過ごしてますから…かなり体温が下がっています。ご自分で予測されて、洋服を着込んでいらしたので最悪は免れましたが、一歩間違えばどうなっていてもおかしくない状態でしたよ」
「そうか…」
「相変わらず休もうとしないのです。意識的に寝るのを避けている様で…」
「わかった。何か有ったら呼び出す。待機していてくれ」
「承知致しました」
私が寝室に入ると、部屋に居たメイド達が退室した。
華奈子の荷物は片付けられ、テーブルの上には大きな書類袋が置かれてある。

「剣、これを私の部屋の金庫に保管してくれ」
「了解した」
田辺が部屋を退室すると、私は華奈子の枕元に座った。
「…華奈子」
私の呼び掛けに薄らと目を開けて、華奈子は震えながら私を呼んだ。
「…エド」
「ゆっくり休め」
髪を撫でてやると、華奈子はぐずる様に頭を振り続ける。
「…嫌…嫌なの」
「何故？」
「寝たら…帰って…来れない様な気がするの」
荒い息を吐きながら、華奈子は苦し気に言った。
「明日…明日迄でいい…それまで…」
スルリと手を滑らせ、まだ冷たいに頬を撫でててやる。
「大丈夫だ。ちゃんと起こしてやる…だから、安心して休め」
頬に置かれた私の手に自分の手を重ね、華奈子は安心と不安の入り交じった瞳で私を見上げ…ふと気が付いた様に、慌てて手を引いた。
その手を追い掛ける様に掴み、華奈子に覆い被さる。
「何故離す？縋った手を、何故離すんだ！？」
「…」
「お前を守ってやれるのは…もう、私だけだろう！？」
「…エド」
上着を脱ぎ捨てネクタイのノットを緩めて引き抜くと、私は華奈子の横に横たわり、彼女を優しく抱き寄せた。
「昨夜は悪かった、気付いてやれなくて。華奈子、私を頼れ…縋っていいんだ。私は、お前を守るだけの力を手に入れた。もう誰にも傷付けさせたりはしない」
「……明日迄」
私の胸に手を着いて微妙な距離感を保つ冷たい躰から、小さな呟きが聞こえた。

「明日迄…その手を貸して下さい」
「何故、明日迄なんだ？この先も、ずっと…」
「…確かに…私に差し伸ばされる腕は、貴方の腕だけだけど…でも、貴方の本当に差し伸ばす先は…違う場所だから…」
「華奈子！？どういう…」
「いいの…それで…明日、Ｍｒ．アンダーソンと会って、あの石を返したら……私の役目は…全て終わる」
「その後、どうするつもりだ？」
「……帰るわ」
「だから、どこに！？」
「お母様とお婆様…曾祖父様に、ご報告するの」
「それから？」
「……それだけじゃ…駄目なの？」
「お前、その先の事を何も考えていないんじゃないのか！？」
「…」
「ここに居ろ、華奈子…ここで、私と共に時を刻もう」
フルフルと頭を振り、華奈子は静かに答える。
「止めて、エド…私は…明日の事以外、何も考えられない…」
震える華奈子の背中を撫でながら、明日という日が終わったら、彼女は消えて無くなるのではないかという薄ら寒い感覚に捕らわれた。
彼女の生い立ちを話してくれた、Ｐａｎｔｈｅｒの言葉が蘇る。
華奈子の母親の奈津子は生来躰が弱く、源蔵との結婚生活は最初から破綻していた。
結核を患っている奈津子の側にも余り居れず、源蔵にも懐く事の無かった華奈子は、祖母である華子の厳しい教育の下生活をしていたらしい。
「手の掛からないというより、存在感の薄い…酷く寂しい少女時代を送った様です。Ｍｒ．バークレイ、彼女のアルバムを見るのは、今回が始めてですか？」
頷く私に、Ｐａｎｔｈｅｒはアルバムを押しやった。

「こんな寂しいアルバムは、見た事が無い…アルバムを焼却された私の妻でさへ、こんなに酷くは無い」
セピア色の写真は、弥一郎の独身時代から始まり、源蔵と奈津子の写真迄は、結構な枚数が貼り付けられていた。
「華奈子の写真は？」
「これですね…生まれて間もない頃の写真と、三歳の七五三のスナップ…」
「これだけですか！？」
これは…誰にも見守って貰えなかったという事か！？
「土屋氏も、奈津子さんの世話と執事の仕事に追われ、殆ど幼い頃の彼女の面倒は見れなかった様です。部屋の隅で本を読んでいるか、裏庭でぼんやり空を見上げている…そんな姿しか記憶に無いそうです」
やがて源蔵は、愛人の美代子を家政婦という名目で家に引き入れた。
「新しく入って来た家政婦に、幼い華奈子嬢は興味を持った…そして、源蔵氏と美代子さんの情事を目撃してしまい…それを、奈津子さんに話してしまった。幼い彼女にしてみれば、家内の様子を母親に話したに過ぎなかったが…大人達の反応は違った物でした」
奈津子は離れに住居を移し、源蔵との亀裂は決定的な物となった。源蔵は美代子との関係を隠さなくなり、やがて絵美が誕生すると、美代子の遠慮も無くなった。
「華奈子嬢が学校に上がる頃には、奈津子さんは別荘に静養に行ってしまい、華奈子嬢は母屋から離れに追いやられてしまいます。源蔵氏は、美代子さんと絵美さんとの生活を謳歌し、それは奈津子さんの死後益々エスカレートした。離れをも追い出され、母屋も建て替えられ、華奈子嬢は以降土蔵での生活を余儀なくされました」
「親戚は？」
「居りません…祖母である華子さんも奈津子さんも一人娘でしたので、華奈子嬢に逃げ場所は無かった。それに、直系の跡継ぎな訳ですから、逃げ出す訳にはいかなかったのでしょう」

華奈子の寂し気な雰囲気は、広い屋敷の中で誰からも暖かい手を差し伸ばされる事の無かった事によるものか…。
「家内での扱いがどうであれ、華奈子嬢は廣徳家の正統な跡継ぎですから、世間はどうやっても華奈子嬢に注目する…廣徳海運の後継者として…『富と繁栄のエメラルド』の持ち主として。美代子さん母娘にしてみれば、面白く無い事だったのでしょう。華奈子嬢の婚約者の岸本氏が廣徳海運の後継者に指名されると、直ぐに絵美さんは岸本氏を誘惑したそうです」
「幼馴染みだと聞きました」
「家柄は良いのですが、家計は逼迫していた様です。それに世間知らずのお坊ちゃんで…源蔵氏にしてみれば、御し易い婿だったのでしょう」
「だからと言って…言われるままに華奈子の命を狙う等…」
「…徹底的に叩き潰してしまうおつもりですか？」
「いけませんか？」
Ｐａｎｔｈｅｒはニヤリと笑い、目を閉じた。
「私には何とも…ただ華奈子嬢はどうお考えなのかと思っただけです」
「彼女は…何も考えていない」
「そうでしょうね」
「あのブローチは、母親から託されたのですか？」
「いえ…アレを華奈子嬢に託したのは、祖母である華子さんです。昔語りと共に、あのブローチとＭｒ．アンダーソンの手紙、それに一本の鍵が託された」
「鍵ですか？」
「そうです。弥一郎氏の言葉と共に、鍵は託された…『真実の扉を開けて、使命を全うせよ』と」
「…」
「奈津子さんは、源蔵氏がブローチを狙っている事を承知していましたから、土屋氏に命じて銀行の貸金庫にブローチと手紙を預けま

した。家の中に保管する事に不安を覚えたのでしょう…華奈子嬢だけが、開ける事が出来る様にしたのです。貸金庫の鍵は、土屋氏が管理していました」
「だから、土屋氏も狙われた！？」
「恐らくは」
「弥一郎氏の残した鍵は？」
「その鍵は華奈子嬢が管理していました。華子さんも奈津子さんも、最期迄鍵の謎を解く事は出来なかった。幼い彼女の楽しみは、家の中の鍵穴を探す事だったそうです」
「謎は…解けたのですか？」
「えぇ。華奈子嬢の中学三年の時に…土蔵の本棚の奥…羽目板の向こう側に、『真実の扉』は有りました」
「何が有ったのですか！？」
「弥一郎氏の日記と、子孫に宛てた遺言状が納められていました」
「内容は…先程の…」
「そうです。華奈子嬢はその事実を誰にも話さず、日記と遺言状に書かれて有る事の事実確認に明け暮れた。米軍資料館に当時の名簿を問合わせたり、当時の情勢や歴史的背景、人物や新聞を調べたり…特に上海には度々訪れて、当時の事を詳しく知る人物を探したりしていた様です」
「1人で？」
「えぇ…語学力は相当な物です。英語、ロシア語、北京語、上海語、広東語…ドイツ語とフランス語は少しだけだと」
「…凄いですね」
「全て、あのブローチの為です…殆ど妄執に近い。そして、生前弥一郎氏が調べたバークレイとの関係を確認し、ブローチの謎を調べ続けた。最後迄わからなかったのは、Ｍｒ．ヘンリー・アンダーソンの行方だけでした」
「そして、貴方に依頼したと？」
「正直、雲を掴む様な話でした…同姓同名でも年齢が合わない、条

件が合わない等…鬼籍に入っている可能性も有る…」
「事実は、改名していた」
「華奈子嬢が写真を提示して下さらなければ、こんなに早くには見付かりませんでした」
「そうですか…ずっと、疑問に思っていた事が有るのですが…」
「何でしょう？」
「貴方の様にお忙しい方が、どうして華奈子の依頼を請けられたのですか？」
「おかしいですか？」
「失礼だが…貴方のクライアントになるには…華奈子では役不足でしょう？」
「私は依頼が有れば、国選弁護人にもなりますよ？」
ニヤリと笑う男に、私は眉を寄せた。
「彼女は、妻の中学高校の時のクラスメートだったそうです。といっても、決して親しい間柄では無かった。妻が高校を辞める迄の４年間の間で、言葉を交わしたのはほんの数回だったとか」
「それが、何故？」
「偶然に街で再会したそうです。流暢な英語に聞き覚えが有った妻が声を掛けた。驚いていたそうですよ、とても。話の流れで、私の職業の話が出たそうです。後日、彼女から妻に連絡が入り、話を聞いてもらえないかと言って来た」
「華奈子は…貴方の事を…」
「ご存知無かったと思います。多分、今も…だが、それでいい。彼女の話を聞いて、私が興味を持った…彼女にも、この案件にもね」
「華奈子にも？」
「彼女の私財を注ぎ込んで来た調査を…Ｍｒ．ヘンリー・アンダーソンとその子孫を、半永久的に探し続けて欲しいと彼女は言った…自分の死後も探し続けて欲しいと言ったのです」

第１３章

翌日の昼過ぎ、華奈子と私は祖父の書斎に座っていた。
昨夜も余り寝る事が出来なかった華奈子は、私の隣で膝に乗せた手を握り、目を閉じて座っている。
その手にそっと私の手を添えても、華奈子は微動だにしなかった。
静かたが…張り詰めた緊張…。
やがて車椅子の音と共にノックが響き、私達は席を立った。
ラシードの押す車椅子に乗った祖父の後に、盆を持ったメイド達が続く。
私達の正面に車椅子が設置され、私は祖父に華奈子を紹介した。
「会長、こちらがＭｉｓｓ　廣徳です」
「廣徳華奈子でございます」
華奈子が深々と頭を下げると、祖父は冷たい口調で答える。
「リチャード・バークレイだ」
そう言って、手で座る様に指示を出した。
すかさずメイド達が珈琲を配り、ラシードと共に退室すると、祖父はニヤリと笑って華奈子に話し掛けた。
「お寛ぎ頂いていますかな？」
「…お陰様で」
「当家のもてなしに、満足頂いている様で何よりだ」
「お気持ち、痛み入ります」
クックッと喉で笑う祖父に、華奈子が静かに尋ねた。
「Ｍｒ．ヘンリー・アンダーソンでいらっしゃいますね？」
「リチャード・バークレイだ」
「Ｍｒ．アンダーソンでは無いと？」
「その様な男は知らん」
「私は、Ｍｒ．アンダーソンにお会いする為に参りました」
「いいから、早くエメラルドを返せ！！」

「Ｍｒ．アンダーソン以外に、お渡しする事は出来ません」
「くどい！！」
華奈子は少し困った顔をして、不機嫌な祖父に再び尋ねた。
「…――？」
その中国語を聞いた途端、祖父の顔色が変わり…わなわなと震え出す。
「何ですか？」
アジア・オセアニアを統括していたとはいえ、中国語を話す事が出来ず通訳を必要としていた私は、祖父の様子を見て慌てて尋ねた。
「……お前は……私を脅すのか？それとも、地下牢に入れた事への嫌がらせか！？」
激昂した祖父の、怒りに震えながらの咆哮が響く…しかし華奈子は、見越したかの様に驚く程冷静な態度を保っていた。
「…お察し致します」
華奈子の静かな声に、祖父は眉を潜め…やがて、唸りながら答える。
「……ヘンリー・アンダーソンだ」
「ありがとうございます」
驚いた…祖父を言い負かす人間が居る等、思いも寄らなかった…大統領でさへ手玉に取ってしまう祖父を……然も相手は、あのオドオドとした態度を取っていた華奈子なのだ。
「エメラルドは！？」
「持参しています」
「返せ！！」
「お話を聞いて頂いた後の方が、宜しいかと存じますが？」
「これ以上、私に譲歩しろというのか！？あれは私の物だ！返せっ！！」
華奈子は初めて隣の私を見上げ、私が頷くと書類袋の中からビロードのケースと手紙を取り出した。
「Ｍｒ．トマス・アンダーソンから廣徳弥一郎がお預りしていた物です。お納め下さい…」

祖父は強張った顔で、テーブルの上に差し出されたビロードのケースを奪う様に取り上げ蓋を開けた。
「これだ！！あぁ…『エスメラルダ』…とうとう私の手に戻った！！この色、この艶…そして、内包物の無いこの…」
そう言いながらブローチを手に持ち光に透かした時、祖父はあからさまに眉を潜めた。
「…何だ…これは…」
顔色を変えてブローチから視線を外し、華奈子を睨み付けると、ブローチを床に叩き付けた。
「あっ！？」
華奈子が慌てて立ち上がり、床に転がるブローチを拾いに走る。
祖父は怒りに震えながら、懐から出した銃の照準を華奈子に合わせた。
「どういう事だ！？ドラゴンの曾孫！！」
「会長！？」
私は華奈子の前に立ちはだかり、祖父と対峙する。
「退け、エドワード！！」
「いいえ、退きません！！止めて下さい、会長！！」
「煩いっ！！お前も一緒に撃ち殺されたいかっ！？」
私は内ポケットから黄金の鍵を取り出し、祖父の前に翳した。
「もう一度言います…止めて下さい、会長」
「クッ…エドワード！？」
「貴方が決めたルールです…黄金の鍵を持つ者の命令は、絶対だと。止めて下さい、お祖父様」
祖父は苦悶の表情を浮かべ、再び華奈子を睨み付けると銃を下ろした。
「これは、お預り致します」
私は祖父の手から銃を取り上げると、華奈子を誘って再び席に着いた。
「エメラルドは！？」

「これです」
「嘘だ！！偽物ではないか！？」
「ですが、Ｍｒ．トマス・アンダーソンから廣徳弥一郎がお預りしたのは、このブローチなのです」
「ドラゴンの曾孫…私を謀るのか！？…そうか…本物と、すり替えたのだな！？返せっ！！『エスメラルダ』は、私の物っ…クッ…」
咳き込みながら口角から泡を飛ばす祖父に走り寄り手を貸すと、彼は思い切り腕を払う。
「エドワード！？この女は、我々を騙そうとしているのだ！！捕まえて、地下牢にぶち込んでしまえ！！」
「落ち着いて下さい、会長」
「これが落ち着いていられるかっ！？この女は…」
激昂する祖父を見兼ねた華奈子が、正面から声を掛けた。
「先ずは、お父上の…Ｍｒ．トマス・アンダーソンの手紙を読んでは頂けませんか？」
そう言って、テーブルに置かれたままの封蝋のされた手紙を押しやった。
眉を寄せたまま封を切り、手紙を読む祖父の躰がワナワナと震える。
「嘘だっ！！出鱈目だ！このブローチも、手紙も…ドラゴンの策略だ！！」
「いえ…これは、紛れもなくＭｒ．トマス・アンダーソンの手紙です。こちらに、筆跡鑑定の書類も用意致しました」
差し出された書類を撥ね付けると、祖父は隣に付き添う私に手紙を渡した。
そこには、曾祖父が息子に宛てた謝罪の言葉が書き連ねてあった。
事業に失敗し、夫婦で船と運命を共にする決心をした事。
息子を残して行く詫びと、いつも息子の幸せを願っているという言葉。
そして母親からの手紙には、遺してやると約束した『エスメラルダ』を、父親の事業の為に売却した詫びと、ただ愛していると何度も書

き連ねてあった。
「騙されるな、エドワード！！ドラゴンが全て裏切ったのだ！！」
「嘘では無いのです、会長」
「エドワード！？」
私はＰａｎｔｈｅｒから聞いた話を、全て祖父に聞かせた。
「私は…聞いてない！！何も聞いてないぞ！？あの時、ドラゴンの国に行くとしか聞いてない…」
「会長…貴方は当時子供だった。致し方無かったのです」
「そんな事は…だがドラゴンは、裏切ったのだ！！」
私と祖父の話を聞いていた華奈子は、静かに言った。
「Ｍｒ．アンダーソン…私の手元には、曾祖父の日記が残されています。その後調べた事柄も把握しています。私にわかる事でしたら、可能な限り貴方の疑問にお答え致します」
彼女の真摯な瞳に気圧され、祖父は生唾を飲み込んだ。
「あの船の…『エスメラルダ』の上で、ドラゴンは父を殴ったのだ！」
「…あの時、弥一郎はＭｒ．アンダーソンが…貴方のお母様と共に、船と運命を共にすると聞いたのです。貴方を弥一郎に託すと…息子に宛てた手紙とブローチを渡され、貴方が大人になったら渡して欲しいと言われたそうです。弥一郎がＭｒ．アンダーソンを殴ったのは、残される貴方を思っての事です」
俯く祖父に、尚も静かな言葉が続く。
「あのブローチを見て、弥一郎は瞬時に模造品だと気付いた…あのエメラルドは、元々弥一郎が買い付けて、Ｍｒ．アンダーソンの依頼で加工したものだそうです。ご存知ありませんでしたか？」
「…知らん」
「スミソニアン博物館に納められている、７５カラットの無傷のフッカー・エメラルドをご存知ですか？そのエメラルドと同じ、コロンビア、ムソー産の…５１カラットのエメラルドだったそうです」
「今は…どこに有る…何としても取り戻したい！ドラゴンの曾孫、

お前は知っているのか？」
「はい…しかし、手の届かない場所に有ります」
「どこだ！？」
「あのエメラルド…『エスメラルダ』は2分割され、見事なペアシェイプにカットされました。そして一対のイヤリングに加工され…現在は、イギリス王室が所有しています」
「……そうか」
華奈子は書類袋から、２つの小さな小箱を取り出した。
表面がアクリル盤になっているケースの中に、小さなルースが納められている。
「弥一郎が、晩年に手に入れました…カットされた『エスメラルダ』の欠片です」
「何だと！？」
「あの時代に採掘されたムソー産の物である事は、間違い有りません。それは科学的に証明されました。後は、この石の出所を書き記した書き付けです。英国王室に所有されているエメラルドを科学的に調査する事は不可能なので、１００％とは言えないのですが…少なくとも、弥一郎が所有していた７つのエメラルドの内、この２つは同じ石からカットされ、極めて『エスメラルダ』である可能性が高いと判断されました」
そう言いながら、華奈子は小さな２つのケースを祖父に押しやった。
「どうぞ…お納め下さい」
震える手でケースを受け取り、愛でる様にエメラルドを見詰めたまま、祖父は華奈子に尋ねた。
「ドラゴンは…上海で私を殺そうとした…」
「それについては、Ｍｒ．アンダーソンの事業に付いて話さなくてはなりません」
「…聞こう」
「太平洋航路に事業の全てを掛けたＭｒ．アンダーソンは、資産をつぎ込んで東南アジア諸国への航路のを開拓しました。最終目的地

の上海への航路拡大が目前だった時、彼の船が次々に沈没事故を起こした…しかし、それは偶然では無かったのです。ある人間の悪意を持った策略でした」
「何だと！？」
「その男は、自分の融資している海運会社の太平洋航路の利権を、ライバルであるＭｒ．アンダーソンに侵されたく無かった。船員を買収し、船の事故をでっち上げたのです」
「…何と…」
「それでも怯まずＭｒ．アンダーソンはサンフランシスコ・横浜間の『エスメラルダ』を就航させます。あの船が、何故『エスメラルダ』と名付けられたか、ご存知ですか？」
「…いや」
「あのエメラルドを売却して、造船された船だからだそうです。造船会社の会長か、教えて下さいました」
「…」
「『エスメラルダ』の就航を聞き付け、策略を巡らせていた男は、人を介して日本の…関東軍と手を結びます。そして、関東軍に毛織物や石油、工芸品の買い付けをした名目で、『エスメラルダ』の船倉を輸入品で一杯にし、高額の保険を掛けた。しかし、積まれていたのは二束三文の廃材で、『エスメラルダ』沈没後その保険金は、関東軍上層部の人間の懐と満州国の武装強化の資金に当てられました。そもそも『エスメラルダ』の救命ボートは、上客やクルーを全員乗せても、充分避難が可能な筈でした。それを…関東軍の軍人が、エンジンを爆破した上に自分達だけを乗せて救命ボートを出した為に…クルーを…Ｍｒ．アンダーソン夫妻を乗せる事が出来なかったのです」
驚いた…華奈子は、こんな事まで調べ上げていたのか！
「上海に到着した関東軍は、救助された中に船主の息子である貴方を見付け、港で待ち受けて弥一郎に引き渡す様に迫りました。華族と婚姻を結んだ弥一郎には流石に手を出せなかった様ですが、貴方

を抹殺しようと目論んだのです。船の積み荷の件や保険の話…貴方がＭｒ．アンダーソンから聞いていたら不味いと思ったのでしょう。弥一郎は、貴方が逃げ延びる事を信じ…メッセージを叫んだと…」
「メッセージ？」
「弥一郎は発砲した時、『助かりたければ、共同祖界に逃げ込んでみるか』と言いませんでしたか？『悔しければ、日本に私を追って来い』と…賢い貴方の事だから、きっと生き延びて自分を尋ねて来る筈だと…『エスメラルダ』の甲板で、Ｍｒ．アンダーソンと貴方に誓いを立てたからと、日記に綴られています」
祖父の躰が小刻みに震え、眉を寄せたまま華奈子の顔をマジマジと見詰めた。
「…ドラゴンの曾孫…そこまで調べたのだ。私達一家を陥れた人物の名前も、調査済みなのだろうな！？」
「…はい…弥一郎が…曾祖父が、生涯懸けて調べ上げました」
眉間に皺を寄せ、苦し気に華奈子は言った。
「誰だ！？誰なのだ！！父を騙し、船を沈め…私から何もかも奪った奴は！？」
「会長…それは…」
私が言葉を発した途端、華奈子は私を見詰めて首を振った。
「私が…私が伝えなければ…ならない事です」
そう言って、祖父の顔を正面から見詰めた。
「彼の名は…」
「名はっ！？」
「……サキアス・バークレイ……貴方の、養父です」
祖父の瞳と顔から…色が消えた…まるで、雷に打たれた様に…消えた。

第１４章

サキアス・バークレイの名前を出した途端、Ｍｒ．アンダーソンは顔色を無くして震え出した。
実の両親を騙し、結果的に死に追いやった人物の養子になったのだ…然も彼は…。
「Ｍｒ．アンダーソンは、大丈夫でしょうか？」
私は、彼を庇う様に傍らに付き添うエドに尋ねた。
「ショックが、大きかったのだろう」
私達の気遣う声に、Ｍｒ．アンダーソンは眉を寄せた。
「…大丈夫だ」
手に握り込んだブローチをテーブルに置き、私はエドに頷いた。
エドが心得た様に立ち上がり、書斎のカーテンを次々に閉じて行くのを、Ｍｒ．アンダーソンは訝しんだ。
「…何だ？」
「Ｍｒ．アンダーソン…このブローチですが…」
「要らん！！まがい物等に、興味は無い！！」
「それでは…何故ご両親は、このブローチを貴方に遺されたのでしょうか？」
「何だと？」
「私も今回初めて内容を知りましたが、手紙でも『エスメラルダ』を売却した事を告白されているのです。鑑定に出す迄も無く、少し目利きの者が見れば、貴方の様に直ぐにまがい物だとわかる品物を、何故遺されたのか…わかりますか？」
「…私に…わかる筈が無いではないか」
「私も長い間、どうしてもそれが疑問でした。そして数年前、ようやく答えを見付けたのです」
薄暗い部屋の中で、私はＭｒ．アンダーソンの車椅子の横に跪いた。
ブローチを裏返し、用意したルーペを彼に渡し、ブローチの裏金を

ペンライトで照らす。
「…ここです…細かい字ですので、判読し辛いかとは思いますが…」
裏金には、小さな小さなメッセージが彫り込まれてあった。
『愛する息子へ…贖罪と愛を込めて』
「これは！？」
「Ｍｒ．トマス・アンダーソンのメッセージです。そして、ここに小さな矢印が有ります。この矢印の場所から、石のカットに沿って光を当ててやるのです」
私はブローチを表に返し、左の掌に乗せた。
そして光源を絞ったペンライトの光を、先程の矢印の場所から当ててやる。
「これが…貴方のご両親が、息子に本当に遺したかったエメラルドです」
射し込まれた光が、石の中で反射し…石全体が光を放ち…石の表面にぼんやりと像が浮かび上がる。
「石の成分を分析した所、水晶だと…とても上質なグリーンアメジストだと判明しました。人工的に変色させた物では無く、プラシオライトとも呼ばれるカリフォルニア州で採掘された天然の水晶だそうで…この様な濃い色合いのグリーンアメジストは、とても珍しく貴重なのだそうです。像を結ぶ細工はとても高度で、どの様な細工なのかはっきり判明しませんが、多分ホログラムと同じ様な物ではないかという話です。ホログラム技術の発表は、このブローチの製作年度とは合いませんが…恐らくは、細工をした技術者の才能だろうと、専門家は話してくれました」
石の表面には…ぼんやりと女性の顔が浮かび上がる…大きく髪を結い上げ、優しく微笑む少し大きな口元…。
「……母上……エスメラルダ！？」
Ｍｒ．アンダーソンが、私の手を下から握り込んだ…そのゴツゴツと骨張った乾いた手が、少しずつ熱を持ち始める。
私は、ブローチとペンライトを彼の手に渡し、その上からそっと手

に触れた。
「…貴方のご両親からの…愛です」
「ドラゴンの曾孫…名は…何と言った？」
「廣徳華奈子と申します」
「カナコだな」
「はい……本当にお返しするのが遅くなり、申し訳ありませんでした」
「会長…どうか理解して下さい。華奈子の一族は…戦後の混乱期、本物のエメラルドだと思っていた時も、この石を守り続けて来た。代々直系の子孫達に、ヘンリー・アンダーソンとその子孫に渡す様にと遺言されて来たのです。特に弥一郎氏本人と、彼の本当の遺言状を受け取った華奈子は、このブローチの謎と、貴方の行方をずっと探し続けて、事実を調べ上げて来たのです。それに…」
「…何だ…まだ何か有るのか？」
薄暗い部屋の中でエドの顔が歪み、彼は踵を返し窓辺に行くと、思い切りカーテンを開いた。
「…華奈子の人生は、そのブローチにずっと翻弄されて来た…『富と繁栄をもたらすエメラルド』と噂されていたそのブローチの持ち主として、エメラルドの利権を狙う者達から命を狙われ続けて…挙げ句、私や…貴方にも命を狙われた！！」
「…」
「会長にとっては、どうしても取り戻したい物だったのでしょうが…私は、正直その石が憎い！！」
「エドワード！？」
「だってそうでしょう？私だって、その石に運命を踊らされた一人だ…幼くして両親から引き離され、厳しい貴方の元で英才教育を受けさせられ…たまにこの屋敷にやって来る父親にさへ、会う事も禁止され……あんなに…あんなに早くに亡くなるのなら、この屋敷を逃げ出して帰るのだったと…どんなに後悔したか！？」
「…それでもお前は逃げ出さず、私の跡を継ぐ事を選んだ」

「そう…バークレイを意のままに動かせる、黄金の鍵を手に入れる迄…家族を失った私は、諦める訳にはいかなかった！！」
たった1つ開け放たれた窓から射し込む光が、エドのシルエットとその瞳を浮き上がらせる…そう、先程光を照射したブローチの石の様に…。
「会長…先日話したのは、華奈子の事です」
私は訳がわからず、私を見詰めるＭｒ．アンダーソンのマリンブルーの瞳に曝された。
「日本の天皇家の遠戚を曾祖母に持つ華奈子こそ、私が選んだバークレイの花嫁です」
何…何を言っているの、エド！？
恐ろしくなり、私は必死でＭｒ．アンダーソンに頭を振った。
「…華奈子」
最近いつも呼び掛けられる、熱を孕んだ様な声…燃え上がるエメラルドの瞳を携えて、多きな躰がゆっくりと近付く。
私は視線を外せないまま、膝行る様に後退り頭を振り続けた。
「華奈子」
「…嫌…嫌です」
「逃げるな」
「帰ると…帰国すると言いました！」
「どこに？…お前の帰る場所は、もうどこにも無い！！」
部屋の隅迄追いやられ、逃げ場が無くなった私は、思わず叫んだ。
「助けて！誰か！！」
その声に、エドの顔が歪み…手首を掴まれ引き上げると、壁に背を付けて立たされる。
「誰に！？誰に助けを乞う！？お前を助けてやれるのは、私だけだろう！？」
そう言って、エドは私の躰を抱き締めた。
「愛している、華奈子」
「…私の役目は…もう終わったわ」

「愛している」
「私には…もう何の価値も無い」
「愛している」
「もう…何も…残ってないわ…」
「愛している」
「私に残されたのは…壊れてしまった躰だけ」
「その心と躰…私が貰い請ける」
「…何も無い」
「お前の…本当の笑顔を取り戻したいんだ」
エドは私の前に跪くと、私の手を取った。
「Ｗｉｌｌ　ｙｏｕ　ｍａｒｒｙ　ｍｅ？」（私と結婚して頂けませんか？）
「…私は…私には…」
私は、部屋の中央でじっとこちらを窺う、Ｍｒ．アンダーソンと目が合った。
「”Ｙｅｓ”　ｗｏｒｄ，　ｏｔｈｅｒ　ｔｈａｎ　ｎｏｔ　ｔｏ　ｈｅａｒ！」（”Ｙｅｓ”以外の言葉は、聞きたく有りません！）
「…」
「Ｐｌｅａｓｅ　ｔｅｌｌ　ｕｓ　ｈｏｗ　ｙｏｕ　ｆｅｅｌ？」
（貴女の気持ちを教えて頂けませんか？）
「…」
余りの事に、頭が混乱する…心拍数は上がり続け、今にも心臓が爆破しそうだ。
何を言っているんだろう…そう、彼は血迷っているだけだ！
…彼は、エドは…バークレイの社長になったのに。
結婚だって、家柄の良い、資産家の娘を娶らなければならない筈だ。
なのに…何を言っているの…この私に！？
「…Ｋａｎａｋｏ’ｓ　ａｎｓｗｅｒ，　ｗａｉｔ．」（…華奈子の答えを、待ちましょう）
エドは立ち上がり、再び私を抱き締め額にキスをした。

「お前の返事が出る迄…帰国は見合わせて貰うぞ。その間に、心臓の手術も受けて貰う…いいな？」
「そん…な…」
有無を言わせぬエドの態度に、どうすれば良いかもわからず…私はただただ途方に暮れ…息を上げて、エドの腕の中で意識を飛ばした。

社長就任後の仕事に忙殺される私が屋敷に帰るのは、毎日夜中近くだ。
そして、帰宅すると真っ先に華奈子の部屋を訪ねるのも、毎日の習慣になっていた。
「おかえりなさいませ」
ノックをして部屋に入ると、ソファーから立ち上がり深々と頭を下げる田辺の姿があった。
「ただいま。華奈子の様子は？」
そう尋ねるのも、日常化されつつある。
祖父との面会で意識を飛ばした華奈子は、今迄の睡眠を取り戻すかの様に昏々と眠り続けた。
そして、最近やっと少し起きる事が出来る様になって来たのだ。
「いつも通りだ。でも、食事は少し摂れた。やはり日本食の方が口に合うらしい」
「そうか…」
「後は…始終ぼんやりしている。時々泣いて…頻脈になって苦しくても何も言わない。躰の中の物、どっかに置き忘れたみたいな顔してる。お陰で怖がられ無くなったが…生きてるんだか死んでるんだか…」
「だから、帰国させなかった。あのまま帰国させていれば、今頃は…」
「新聞沙汰だろうな」
「ありがとう、剣」

「…仕事だ、仕事」
「そうだったな」
田辺が部屋を出て行くと、私はそっと寝室のドアを開けた…途端に流れる冷たい空気に、思わず眉を寄せる。
東側の部屋の窓が開け放たれ、窓辺に置かれたソファーに座り、華奈子は外を眺めていた。
「…華奈子」
声を掛けても、彼女はソファーに横座りして窓枠に肘を付き、ぼんやりしたままだ。
「風邪を引くぞ」
そう言って窓を閉めて始めて、ゆるゆると焦点の定まらない瞳で私を見上げた。
「…エド」
「何してた？」
「…月を…見てたの」
「躰が冷えきっている…ベッドに戻ろう」
「…嫌ぁ」
冷えた躰を抱き締めると、抵抗するでも無く腕の中に納まる…だがそれは、私への気持ちの表れでは無く、ただ生への執着を放棄してしまった脱け殻を預けたに過ぎない。
「食事、ちゃんと食べれたらしいな？」
「…お粥…」
「今迄、日本食を作れるシェフが居なかったからな…丁度良かった」
上着を脱いで華奈子に羽織らせ、髪から頬、項へと手を滑らせて引き寄せる。
抵抗をしない、その小さな薄く柔らかな唇をくわえ、吸い上げて、全てを覆うように口付ける。
舌を侵入させて口腔内を擽り、反応の鈍い華奈子の舌に、ゆっくりと時間を掛け深く絡ませ吸い上げてやる。
やがて華奈子の躰がヒクンと反応を見せ、熱い吐息が漏れる頃、華

奈子の舌は私の愛撫に逃げ惑う…逃がしはしない…ようやく目覚めた華奈子の意識を絡め取る。
深い口付けによって強引に目覚めさせられた官能を、華奈子は理性によって抑え込もうと必死になり…ようやく目の焦点が合うと、息を上げて私の躰を押しやった。
「…止めて、エド」
「こうしないと、本当のお前と会話も出来ない」
「だからって…こんな遣り方…」
「お前が、生きる事を手放そうとするからだ」
首筋を指で辿ると、官能に目覚め掛けた躰はブルリと反応し、華奈子は眉を潜めた。
「お前の心は、私に助けて欲しくて…愛して欲しくて、そんなに腕を伸ばしているのに…躰も、私に抱いて欲しくてそんなに反応しているのに…何故意地を張る、華奈子！？」
「…そんな事」
「諦めるのは、生きる事では無く、その無駄な意地だろう！？」
華奈子は固く口を結び、下唇を噛んで涙を溜めた瞳で私を見上げた。
「…そんな顔をして…どれだけ私を煽るつもりだ…」
華奈子が意地を張るのは、バークレイの嫁が下らない世間体や金の為に選ばれるべきだと思っている為だ…そんな事は、重々承知している。
私は華奈子を抱き上げてベッドに運ぶと、泣き出しそうな顔に再び口付けた。
「お前さへ、心を決めてくれたら…私は何だって出来るというのに…」
「私じゃ…役不足だわ…」
「そんな事は無い！！お前でなければ、私は…何故わからない！？」
「…」
「お前の気持ちは！？本当の気持ちは！？」
「…そんなもの…何の意味も無いわ…」

「…華奈子…何故」
華奈子は目を閉じ、ゆっくりと意識を手放そうとする。
「…エド」
「何だ？」
「…Ｍｒ．アンダーソンは…」
「あぁ…元気だ。体調も、持ち直した」
「……良かっ…た…」
祖父を心配する気遣いは出来るのに、何故自分の気持ちは押し込めて、自分の命さへもないがしろにしてしまうのか…。
…華奈子……私はお前に、そんなに無理強いをしているのか？
お前を幸せにしてやりたいだけだ…延いてはそれが、私の幸せに繋がる。
私に…お前を諦めさせないでくれ！！
私の腕の中で、華奈子は一筋涙を溢した。

第15章

「…かなこ…」
どこかで、私を呼ぶ声がする…エドだろうか？
「…かなこ…」
余り馴染みの無い…だが、聞き覚えの有る声。
明け方から始まった動悸は、絶えず私の心臓を早鐘の様に打ち鳴らし、全身を駆け巡る…寝ているにも係わらず、ずっと休み無く走らされる様なその心拍に、心臓も息も、躰全体が悲鳴を上げた。
全身にじっとりと嫌な汗がまとわり付き、肩と胸を上げ喘ぐ様な息を繰り返す。
「…起きろ…カナコ」
少し乾いた質感の指が私の頬に触れられ、私はゆるゆると重い瞼を開け様とした。
ベッドの横に誰かが座っていたが、よく顔が見えないのは逆光のせいか…私の目が霞んでいるのか…。
それだけ確認すると、重い瞼は又すぐに閉じてしまう。
「…ドラゴンの曾孫」
そう呼び掛けられ、相手が誰なのかようやく把握出来、必死に目を開けようとした。
「……は…い」
「何をしている？」
質問の意図がわからない…私が…まだこの屋敷に滞在しているのを咎めているのだろうか？
「こんな所で何をしているかと、聞いている」
「…申し…訳…」
Mr.アンダーソンは、ご立腹なのだろう…エドが…バークレイ・コンツェルンの新社長が、選りに選って目の前で…何の取り柄も無い、然も今迄仇と憎んで来た一族の、殺そうと迄した小娘にプロポ

ーズしたのだ。
いくらバークレイの当主であるエドの意思だからといって、到底許せる物では無い…。
息が苦しい…肺に空気を入れる事も出す事も出来ず、金魚の様にパクパクと口を開けて喘ぐ。
「エドワードの秘書！」
「はい」
「彼女は、何故こんな場所に居るのだ？病院で手術をするのでは無かったのか？」
「彼女自身が入院、手術共に承諾しない為に、こちらで体力が戻る迄面倒を見る様にと、エドワード様から申し遣っております」
田辺の少し苛ついた様な返答が聞こえる。
「ドラゴンの曾孫…私は、まだお前に聞かなければならない事が有る…」
息を上げ眉を寄せた私に、Ｍｒ．アンダーソンは私の手を握った。
「…上海の事…まだ説明されて無い…」
「……大人（Ｍｒ．）…」
「いいか…お前は、この私を脅したのだ…きっちりと説明してもらう。勝手に逝く事は、許さない」
「…」
骨張った手に力が入ると共に硬質な声が降り注ぎ、私は息を上げた。
「…私には、余り時間が残されていない」
「…」
「エドワードの秘書！！直ぐに入院と手術の準備を取れ！それと、この事をエドワードに連絡しろ！」
「承知致しました」
田辺に指示を出すと、Ｍｒ．アンダーソンは私に向き直り、痛い程の力で私の手を握る。
「…私を待たせるな…カナコ…」
「……是…我們知道（承知致しました）」

私が病院に到着した時には、華奈子の緊急手術は既に始まっていた。
「どうなってるんだ、剣！？」
「いや…会長が彼女を見舞いに来て、彼女を説得…したんだと思う」
「会長が！？何を言ってたんだ？」
「それが、よくわからない…説明しろだとか、脅したとか…俺は会長から、入院と手術の手続きを取る様に言われた。最後に、時間が無いから待たせるなと彼女に言って…彼女は、何やら中国語で答えた」
「…」
「頻脈の発作を起こしていたんだ。救急車で運び込んで、緊急手術になった。どうやら、かなりヤバイ状態だったみたいだ」
「…そうか」
実際体力が落ち込んで、病気も悪化していた華奈子の手術は、通常の５０％の成功率だったらしい。
幸いにも手術は成功し、経過を見る入院生活で、華奈子が初めて我儘を言った。
「…退院する訳にはいかないかしら？」
「もう少し経過を見た方がいいと、医者も言っていたろう？」
病院のベッドに座り、食事の乗ったトレーを前に、華奈子はスプーンを持つ手を弄んでいる。
「点滴だって取れたばかりだ…しっかりと食べて、体力を戻してからじゃないと…それとも、何か理由が有るのか？まさか、又日本に帰るとでも言うのか！？」
焦った様な声を出す私に、華奈子はゆるゆると頭を振る。
「…エド…笑わない？」
俯いた華奈子が、顔を真っ赤にしているのを見て、私は驚いて尋ねた。
「何だ！？何でも言ってくれ、華奈子！」

「…私…駄目なのよ…コレ…」
トレーの上に乗せられた、オートミールをスプーンでかき混ぜながら、華奈子は小さな声で訴えると、溜め息を吐いた。
「え？」
「だから…駄目なんです…私、牛乳飲めないんですもの…」
「…だが…今迄だって、朝食で出ていただろう？日本の屋敷に居た時だって…」
「食べて無いわよ…他の物を頂いてたから。本当に牛乳駄目なんだもの。料理に使うのは平気だけど…飲むのは、珈琲に入れる時位で…オートミールやパン粥なんて……正直、有り得無いわ！」
子供の様に剥れながらオートミールをかき混ぜる華奈子を見て、私は久し振りに大笑いした。
「…これは…思わぬ弱点を発見したな」
私は立ち上がりトレーを下げてやると、ベッドの端に座って華奈子を抱き締めた。
「わかった…屋敷で療養させる旨、至急医者に申し入れよう」
「ごめんなさい」
「いや、いいんだ…華奈子が、私に我儘を言ってくれる方が、余程嬉しい」
そう言って額にキスをすると、恥じらう華奈子の顎を引き上げ口付けた。
「やはり可愛いな、華奈子は…で、アッチの方の答えはもう出たのか？」
腕の中に恥じらう華奈子の躰がヒクンと反応し、何も言わず私の胸に顔を擦り寄せる。
「悪い…又焦り過ぎだな」
入院以来、華奈子は少し心を開き、私の腕の中から逃げ出そうとする事も、キスを拒む事も無くなった。
こちらが望めば、いつまでも腕の中に納まり、心地良さげに微睡む事も有る…それを華奈子から望んでくれれば、こんなに嬉しい事は

無いのだが…。
「祖父と、何があった？」
「まだ…お尋ねになりたい事が、お有りになると…」
「上海の事か？」
「…さぁ？私には、何とも」
「私も気になっていたのだ…あの時、お前が祖父に中国語で何か言って…祖父は顔色を変えて、ヘンリー・アンダーソンだと認めた。お前…あの時何を言ったのだ？」
「…あの日の事は…頭の中が興奮したり混乱する事ばかりで、自分でも何を言ったのか、余り覚えて無いの」
あぁ…これは嘘だ…優しい嘘。
きっとどんなに尋ねた所で、華奈子が答える事は無いのだろう。
私には…知る必要が無い事柄なのだと、華奈子の声音を聞いて理解した。
「…そうか。華奈子、帰ったら何が食べたい？用意させて置くが？」
「…それじゃあ…お粥をお願い出来る？」
「わかった。用意させよう」
「嬉しい」
そう私を見上げ、華奈子はフワリと笑った。
そう…その笑顔を見たかったのだ…小さな花が咲き綻ぶ様な笑顔。
「…やっと笑ったな」
私は再び顎を引き上げると、華奈子の唇を奪った。
翌日、華奈子を退院させ屋敷に連れ帰ると、元に居た客室に荷物を置いた彼女は、直ぐに祖父に会いたいと言った。
肩先がフッと寒くなる様な感覚を覚え、少し強張った声で私は命令する。
「駄目だ！」
「どうして？」
「それは…もっと、体力が戻ってからにしろ、いいな！？」
「…わかりました」

思いの外素直に引いた華奈子を、私は思い切り抱き締めた。
「エド？」
「…私の…私の部屋で暮らさないか？」
2人の間に隙間が出来るのを嫌う様に、全身を密着させ抱き締める。
胸に押し付けられた華奈子の顔から、くぐもった声が聞こえた。
「…それは駄目です」
「何故？」
「…けじめだから」
少し腕を緩めると、私は華奈子を見下ろして照れ臭ささを紛らわす様に少し怒った様な顔をして言った。
「堅いな、華奈子は…難攻不落だ」
「普通です。日本人ですもの」
「だから、落とし甲斐も有る…」
スルリと頬を撫でながら顎を引き上げながら尋ねる。
「…キスは、いいんだな？」
「禁止しましょうか？」
「……駄目だ」
顔を近付け、華奈子の唇に触れようとした瞬間、彼女の口がらクスリと笑みが零れた。
「何だ？」
「ごめんなさい」
そう言いながら、華奈子はクスクスと笑い続ける。
私は憮然として、彼女の手を引いてソファーに座った。
華奈子は隣に腰掛けながら、まだクスクスと楽しそうに笑い、私の手に自分の手を重ねた。
「ごめんなさい、怒った？」
「何なんだ、一体？」
「いえ…よく似ていらっしゃると思って…Ｍｒ．アンダーソンと」
「祖父と！？私がか！？」
「えぇ、とても」

苦虫を噛み締めた様な顔をして、私は華奈子を見詰めた。
「どこが？」
「…お優しいけれど、とても強引」
「祖父が、優しいって！？」
「えぇ」
「そんな事を言うのは、華奈子が初めてだ」
「お優しいわよ、とても…不器用な方だけど。意固地になっていた私が入院して手術出来る様に、あの方が背中を押して下さったの」
「祖父が、他人を気遣うなど有り得ない！！あの男は、自分の思い通りに人を動かしたいだけだ！私の両親の事故の時だって…」
「事故？」
「そうだ…自動車事故だった。その報せを受けた時、あの男は何と言ったと思う！？『あの馬鹿者が！』と…息子の死に、それしか言わなかった！！そして私に、『お前は、負け犬になるな』と言ったんだぞ？親を亡くした7歳の子供に！！」
「…エド」
「あの朝…父が屋敷に来ていた。私に会いに来てくれていたのを、あの男は追い返したんだ」
「…エド…貴方も、Ｍｒ．アンダーソンと一緒なのね？」
「何が？」
悲しそうな瞳で華奈子は私を見上げて、私の頬をスルリと撫でた。
「ご両親の事故の事、誰に聞いたの？」
「……誰だったかな」
「調べてみた？」
「事故をか？いや…子供だったから」
「エド…辛い事だと思うけれど…ちゃんと調べてみた方がいいと思うわ」
「華奈子？」
「今の貴方なら、造作も無い事でしょう？」
「何か…知っているのか？」

華奈子は、自ら私の胸に頬を擦り寄せ、小さな声で言った。
「…ご自分で調べて下さい」
「華奈子！？」
「…調べて」
何だと言うのだ？
２５年も前の事故を、何で今更…。
「Ｍｒ．アンダーソンを見ていると…私の祖母を思い出すの」
「厳しい人だったそうだな」
「そう…とても厳しい方だったわ。廣徳家の娘として恥ずかしく無い様に、私に厳しく教育してくれた…私は、あまり優秀な生徒では無かったから、祖母を怒らせてしまうばかりだった」
胸に縋る華奈子の髪をそっと撫でてやると、嬉しそうに目を閉じて言葉を紡ぐ。
「華族出身の母親を持つ、気位の高い方でね。ああいう方達は、感情を表に出す事を良しとしない所があって…怒る時も、声を荒げる事無く黙って怒るの。小さな頃は、それが怖くて…怯えてばかりいたわ」
「いつ迄一緒に暮らしたんだ？」
「亡くなったのは、母と前後してだったから、１２歳迄。祖母に言わせると、母は『不良』で、私は『不義の子』だそうよ」
そう言って、胸の中で華奈子はクスリと笑った。
「祖母にしてみれば、許せなかったんでしょうね…と同時に、羨ましかったのだと思うわ」
「羨ましい？」
「あの当時には珍しく、曾祖母は恋愛結婚だったの。華族のお姫様に、曾祖父は猛アタックしたんですって。そして、母も父と恋愛して…正式にでは無かったけれど、結ばれて私が生まれた。恋が実らなかったのは、祖母だけだったから…」
「好きな男が居たのか？」
「誰だと思う？」

「え？」
見上げた華奈子が、フフフと笑った。
「Ｍｒ．アンダーソンよ」
「えぇ！？しかし…」
「そう…会った事も無い、赤ん坊の写真一枚しか無い相手に、祖母は恋をしたの」
「…」
「曾祖父の土産話に必ず出て来た、マリンブルーの瞳を持つ、少し生意気でとても利発な少年の話。実際来日の計画が持ち上がった時、将来本人達の意思が確認出来たら、結婚させたかったそうなの」
「そうなのか！？」
「会えるのを、祖母はとても楽しみにしていた。そして彼がエメラルドを受け取りに来る日を、誰よりも待ち望んでいたのは祖母かもしれない。結婚もせずに、ずっと待って…でも、跡取り娘としては、そうもいかなくて…」
「…」
「不器用なのよ、二人共…愛情表現も同じ…優しい言葉ひとつ無い、手だけを握り締めて…」
そう言って華奈子は重ねた手を握り締めると、私を見上げて笑った。
「貴方に、まだお礼を言って無かったわ。手術して頂いて本当にありがとうございます、エドワード」

第１６章

退院してからの私の生活は、体力作りに費やされた。
屋敷に帰ってすぐＭｒ．アンダーソンとの面会をエドに申し入れたが、体力が戻る迄駄目だと言われてしまったからだ。
仕方無く退院のお礼と、エドに止められてしまった経緯をメッセージにしたためると、直ぐに別宅に居を移したＭｒ．アンダーソンから返信があった。
一言、『待っている』と…。
１１月も終りを迎えようとするある日、屋敷の廊下を歩行訓練する私の耳に、いつもより賑やかなざわめきが聞こえて来た。
声を頼りに近付くと、玄関ホールに多くの使用人が集まり、何本もの木を運び込んでいる。
「賑やかな事ですね？何事ですか？」
近くに居た執事のラシードに声を掛けた。
「お騒がせして、申し訳ございません」
「いえ…何だか、とても楽しそうなので」
「クリスマスツリーを運び入れているのです」
「こんなに沢山？それに、まだ１１月ですよ？」
「毎年、この時期にツリー売りがやって来るのです。今年は、旦那様がご当主になられて初めてのクリスマスなので、ご親族の方々も皆様お集まりになります。居間や食堂、玄関ホール…今年は、旦那様が使用人の食堂にまで用意して下さいました」
「凄いですね…別宅の方には？」
「…大旦那様は、余りこういう事をお好みでは無かったので…昨年迄は、当家でもひっそりとしたクリスマスでした。ですから、使用人達も浮き足立っているのです」
「…そう…あの…別宅に、ツリーをプレゼントする事は出来ませんか？」

「別宅にですか？」
「私の名前で…事情を知らない私からなら、受け取って頂けないでしょうか？」
ラシードは、私の顔を見詰め逡巡していたが、携帯を取り出すと電話で別宅の執事を呼び出し相談してくれた。
「余り大きなツリーで無ければ構わないと、大旦那様よりお許しが出ました」
「良かった…手配をお願い出来ますか？」
「承知致しました。ただ、条件が付けられましたが…」
「条件？」
「飾り付けは、Ｍｉｓｓ　廣徳にお任せしたいとの事です」
「私がですか！？」
「えぇ…如何致しましょう？」
「わかりました。こちらのツリーの飾り付けを、見学させて頂いて宜しいですか？」
「勿論です。後程当家のツリーの飾り付けを担当する者達が、オーナメントを買い出しに参ります。体調が宜しければ、ご一緒にご覧になっては如何でしょう？参考になると思いますが」
「是非ともお願い致します」
部屋に戻り、田辺に相談すると呆れた様な声を上げられた。
「物好きだな、アンタも…でも、エドの許しが必要なんじゃないか？」
「やはりそうでしょうか？」
エドの私設秘書になった田辺は、以前の様な敵意を向けては来なくなったが、相変わらず私に対してぞんざいな物言いをする。
「まぁ、後で俺から報告しておく…その代わり、コレの手伝いを頼む」
「はい」
「全く…会社の連中、挨拶状の返事を全部俺に押し付けやがって…」
社長就任のお祝いメッセージの返信を押し付けられた田辺に頼まれ、

私は名簿作りや中国語の訳等の手伝いをしている。
「アンタ、まだエドに返事してないんだって？」
「…どうすれば良いのでしょうね」
「何だ、決めたんじゃ無いのか？手術も受けて大人しくなったから、てっきり承諾するもんだと思っていたが」
「それとこれとは…話が違います」
「断るつもりか？」
「…エドは…何故私等を選んだのでしょうか？」
「蓼食う虫も好き好きって事だろ？案外、外国人はアンタみたいのが好みなんじゃないか？」
「刺々しいですね」
そう言って私が笑うと、田辺は手に持った書類から視線を上げて鼻で笑った。
「悪いが、俺には理解出来ないからな…ただ、ひとつだけ確かな事が有る…」
「何ですか？」
「俺とエドが、何故学生時代から一緒に居るかわかるか？」
「…いえ」
「俺は庶民だし、正直バークレイ・コンツェルンなんて知らなかった。だから、アイツの事を特別視しなかったからだよ…アメリカから来た、留学生…そうとしか認識しなかった。だが、他の奴等は違ったんだ…男も女も…旨い汁啜ろうと、媚びへつらう奴等ばかりだった」
「…そうなんですか」
「それは、今でも変わって無い…女なんて雲霞のごとく集まって来る。エドはハンサムだし、外面は紳士だからな…正直、女共を食い散らかしてた…誉められた事じゃ無いが、ああいう身分の奴等じゃ、普通の事なんだろ？」
「…」
「アンタ、エドがバークレイの人間だって聞いても、落ちなかった

んだろ？」
「でも、それは…」
「理由があったとしても…実際、エメラルドを返した今でも落ちてない…まぁ、今度は別の理由が有るんだろうが…エドの為に落ちてないんだろ？」
「…」
「少くとも、今迄エドの周りには、そんな女は居なかった。だから、追い掛けるんだよ」
「…」
「納まっちまえばいいんだ」
「田辺さん、それ本気で言ってます？」
「半分本気で半分嘘…エド個人には、幸せになって欲しいが…バークレイの社長としては、何の旨味も無いからな」
「正直な方ですね」
「俺からそれを取ったら、何も残らないだろう？」
そう言って、田辺は声を上げて笑った。

ようやく飾り付けの出来上がった別宅のツリーを見て、Ｍｒ．アンダーソンは一言『うむ』としか言わなかった。
多分最大の賛辞なんだろう…そう理解して安堵する。
「お茶の用意が、整いました。どうぞ、こちらに…」
初日に私を地下牢に入れた執事が、恭しく頭を下げる。
ツリーの対面に設えたテーブルに着くと、執事がＭｒ．アンダーソンの車椅子を押して来た。
席を立ち上がり迎えると、手で座る様に指示を出される。
「元気になった様だな」
「その節は…お心遣い、本当にありがとうございました」
「私は何もしていない」
「…いえ…感謝しています」

「それは…お前の勝手だ。私は、お前に説明して貰いたいだけだ」
「…」
「…何故わかった？」
Ｍｒ．アンダーソンは、流暢な上海語で尋ね、私も同じ言葉で答える。
「申し訳ございません」
「謝罪が欲しい訳では無い」
「いえ…私は、自分の責務を全うする為に…貴方の一番触れてはならない部分を脅したのですから」
「……自覚は、あったのだな？」
「…はい」
あの日…ブローチを返す為に、Ｍｒ．アンダーソンだと認めないこの老人に、私は禁じ手を使ったのだ。
『貴方は、慶福楼の藍寶ですか？』
私は、そう上海語で尋ねた。
「どうやって知り得たのだ？」
「曾祖父は、上海で貴方のお父様と利権を争った海運会社を突き止めました。そして、背後でＭｒ．サキアス・バークレイが糸を引いていると突き止めた。私は、曾祖父の…弥一郎の日記を辿り、上海に当時の事を知る人物を探しに行きました」
「誰と会った？」
「最初は、ライバルの海運会社の社員の方に…その方に紹介され、当時Ｍｒ．バークレイの通訳をしていた方にお会いしました」
「…アイツか」
「貴方が上海の街で、浮浪児達のボスになっていたと、証言してくれた老人も居ました。美しい碧眼の少年だったと」
「当時は皆、貧困に喘いでいた…親の無い子供達が一人又一人と集まり、集団でスリやかっぱらい、商店を襲って、日々の食い物や金を得ていた。私は、奴等の稼ぎを等分してやっていたら、いつの間にかボスとして崇められていただけの話だ」

「その頃から、商才がおありだったとか…弥一郎とニアミスを起こされたのは、その頃ですか？」
「お前は…何でもお見通しなのだな？」
「弥一郎の日記に記されていました…きっと、ヘンリーに違いない。彼は、算術が得意であったと…」
「確かに、ドラゴンを見掛けた…だが、私を殺しに来たとしか思えなかったからな」
「それで、名前を捨てたのですか？」
「子供のお痛が過ぎてな…青幇に捕まってしこたま殴られた時に、記憶を無くした事にしたのだ」
「そこで…売られたのですね？慶福楼に…」
「誰に聞いた？」
「潘喜福さんにお聞きしました」
「誰だ？」
「慶福楼の美涙さんです」
「あぁ…あの泣きべそか」
「『もう一度、藍寶大哥と会いたい』と泣いていらっしゃいました」
「…元気にしているのか？」
「いえ…もう鬼籍に入られました」
「そうか…何と言っていた？」
「慶福楼は、フランス租界近くにあった男娼楼で…藍寶は、その名の通りサファイアの瞳を持つ、それは美しい男娼だったと。自分の様に泣き暮らす者が多い中で、藍寶だけは瞳を輝かせ、未来を掴み取ろうとしていたと…」
「…」
「…Ｍｒ．サキアス・バークレイは、貴方の上客だったそうですね」
「…アイツは、生粋のゲイだった。多分商用で、上海に来ていたのだろうが…気紛れで入った娼楼で私と出会い…のめり込んだのだ」
「で、養子に迎えられた？」
「他の奴等の手に、触れさせたく無かったんだろう。私も、男娼と

してギリギリの年齢だった…体格的にもな」
「貴方の事がわかったのは…貴方がＭｒ．サキアス・バークレイの養子だと知ったからです。そこから遡って調べました…まさか、それがＭｒ．ヘンリー・アンダーソンと繋がる等と、思っても見なかった…」
「よく繋げたものだ」
「記録が…残っていたのです」
「何！？」
「青幇の記録が…貴方の特徴が記載された、慶福楼に売却した記録が…」
「それを…どうしたのだ！？」
「私の顧問弁護士に依頼し…買い取りました」
「お前の手元に有るのか！？」
「いえ…日本のお屋敷で……焼却致しました」
「…それを、信じろと？」
「信じて頂く他ありません」
「エドワードは、知っているのか？」
「いいえ」
「何故言わない？」
「知る必要の無い事だと…判断致しました」
「ふん…小賢しい」
「畏れ入ります」
「で…お前は何をしたい？この事実を知って、私にエドワードの嫁に認めろとでも言うのか！？」
「いえ…それは、別問題です。それより、貴方は私をどうなさいます？」
「何だと？」
「一番知ってはならぬ事を…貴方が男娼をしていた事実を…この世で唯一知っている私を、どうなさりたいのかお聞きしています」
「お前は死にたいのか？」

「折角救って頂いた命です…私の役目は終わりましが、もう少し生きてみようかと…。しかし、バークレイ・コンツェルンの為には、私の存在は邪魔なのではありませんか？」
眉を潜めながら私を伺う、Ｍｒ．アンダーソンのマリンブルーの瞳が揺らめいた。
「…プロポーズの返事…自分で断る勇気が無いので、私に断らせようと言う肚か？」
「…」
「エドワードが、納得する訳が無かろう！？アレは私と似て、目的の為には何でもしでかす男だぞ！？甘く見ない事だ」
「…だから…困っています」
「お前自身は、どうなのだ？エドワードの事…騙していた事を、まだ恨んでいるのか？」
「いいえ……分不相応ながら…お慕い…しています」
「ならば、何故引く？…日本人の考える事は、今一つわからん」
「申し訳ありません」
「その件に関しては、自分で決着を付ける事だ。最早当主となったエドワードは、私の意見等聞く気が無いだろうからな」
そう言い切られ、私は溜め息を吐くしか無かった。
「…それでは、２５年前の事故の事は如何でしょう？」
「お前は…何故痛い所ばかりを突いて来るのか…」
「私の顧問弁護士は、とても優秀な方でしたもので」
「今度は何だ？何が言いたい？」
「エドワード様が…事故の事を調べていらっしゃいます」
「…お前が、手引きしたのか？」
「はい。調べる様に、進言致しました」
「余計な事をしてくれる…で？私に、何をさせたい？」
「もし、エドワード様が事故の事をお尋ねになったら…事実を、有りの侭にお話し頂けますか？」
「今更か？」

「そうです。もう守ってやらなくてはならない子供では無いでしょう？貴方のお気持ちも含めて、全て話して下さい」
「大きなお世話だ」
「エドワード様の為に、お願い致します」
「…」
「拘っておいでです」
「だから…」
「エドワード様が、お可哀想です！」
「…カナコ」
「慈しみ育てて下さったお祖父様を、恨んだまま送らなくてはならないなんて…エドワード様が、お可哀想です！！」
「…」
「お可哀想…」
「全く…ドラゴンといい、お前といい…日本人の考える事は、理解し難い事が多過ぎる」
そう言って、Ｍｒ．ヘンリー・アンダーソンは苦笑した。

第17章

華奈子が祖父に会ったと報告を受けた時、私は何とも言えない焦燥感に捕らわれた。
前回の面会が終った直後から、華奈子は自分の役目は終わったと生きる事を放り投げてしまったからだ。
出来れば会わせたく無い…そう思って体力が回復する迄会う事を禁じていたのに…。
華奈子は、自分から切っ掛けを作り上げ、私の承諾無しに祖父に会ってしまった。
案の定、それから何と無く覇気が無い…田辺の仕事を手伝い、祖父の別宅にも度々顔を出しているらしいのだが…。
屋敷に帰って華奈子の部屋を訪ねると、少し慌てた様な素振りでお帰りなさいと笑う。
テーブルの上には、ダークグリーンの毛糸の束や編み針、便箋等が積んであった。
「今日は、何をしていた？」
「病院に行って来たの。経過は、良好だと言われたわ」
「それは良かった…で、これは？」
「膝掛けを編もうと思って、買って来たんです」
「誰の？」
「…Ｍｒ．アンダーソンのクリスマスプレゼントに…」
「ふぅん」
「…駄目…かしら？」
そう言って、華奈子は少し不安気な瞳で、私を見上げる。
お前は気付いていないのだろうか…私は今、祖父に対して猛烈に嫉妬しているのだが…。
「いや…別に…」
「そう？良かった…きっと軽くて暖かい膝掛けをお持ちだろうけれ

ど…気持ちだから…」
「ふぅん」
「貴方も…欲しいの？」
「いや…別に」
「…そうよね。エドはまだ、膝掛けなんて必要無いわね」
「…」
何と無くオドオドとした態度に釈然としない物を感じ取り、ソファーの上に押し倒して唇を重ねた。
華奈子の頭を押し付けられたクッションが、カサリという音を立てて床に落ちる。
「ん？」
拾い上げた私の手に、クッションの下に隠されていた一冊の雑誌が握られた。
何の変哲も無い、ニューヨークのコミュニティー誌…その求人欄に、幾つかの丸が書かれてある。
「何だ…これは…」
「あぁ…それはね…」
印を付けられた求人欄は、全て中国語を必要とする仕事ばかり…他のページのドッグイアーを確認すると、今度は賃貸物件のアパートに、幾つかの赤い丸が入れられていた。
背筋を冷たい物が走り抜け、大股でウォークインクローゼットを開け確認する。
彼女のスーツケースに洋服や着物が全て納められているのを見て、私は目の前が真っ暗になった。
「…日本に帰国すると言わなくなったと思ったら…今度は、この屋敷を出て行く算段か！？」
「え……違うわ…」
「どう違う！？部屋を探して、仕事を探して……お前は、とことん私から離れるつもりか！？」
私は華奈子の腕を掴んで引き擦ると、強引にベッドに押し倒した。

「”Ｙｅｓ”以外の言葉は聞きたく無いと…お前に猶予を与えたのは間違いか！？お前の心が欲しい為に、甘やかして来たのは間違いか！？強引に躰を重ねて、恐怖でお前を捩じ伏せた方が良かったというのか！？」
「待って、エド！！話を聞いて…」
「待たない…私は…十分待った筈だ…答えを引き延ばしたのは、お前だろう…」
組伏せた私の下で、華奈子は躰を捻り、怯えて何とかして逃げ出そうともがく…俯せて這い出そうとする躰を、私はネクタイを引き抜き後ろ手を縛り上げた。
「何っ！？止めてっ！！」
「…逃がさない…お前は、私のものだ！！」
私を見上げる目が…怯えと悲しみによる涙で濡れる。
着ていたブラウスを引き裂いて、首筋に舌を這わせ脈打つ動脈に歯を立てると、華奈子はビクリと痙攣して震え出す。
目が霞み、早鐘の様に動悸が跳ねる…違う…こんな事をしたい訳では無い…私は…華奈子を…。
「…お前が…逃げ出せぬ様に、私の印を刻んでやろう」
そう吐くと、私は華奈子の肩にいきなり歯を立てた。
「いやぁぁーーーっっ！！」
絹を裂く様な叫び声に酔いしれ、私はより深く歯を立てる…つぷりと身を裂く感触と共に、口一杯にヌルリとした鉄臭さが広がった。
「エド！！何してるっ！？」
飛び込んで来た田辺に、叫び声と共に羽交い締めにされて我に返ると、肩を庇いながら震える華奈子がラシードに抱かれていた。
「…離せ、ラシード！！…華奈子に触れるなっ！！」
「落ち着け、エド！！ラシード、彼女を連れ出せ！」
田辺が、私の背後から関節を絞めながら叫んだ。
「駄目だっ！！華奈子は、どこにも行かせないっ！！」
「エドワードっ！！」

暴れて振りほどいた私の腕を掴むと、田辺は私を柔道の技で背負い投げた。
揉んどり打った私に絞め技を決めながら、田辺が再び叫ぶ。
「行けっ、ラシード！！別宅で治療してやれ！」
ラシードが華奈子を抱き上げ、ドアを出て行こうとする背後に、私は息を上げて吼えた。
「ラシード！！華奈子を…屋敷から絶対に出すな！！もし、逃げ出されたら…使用人全員を即日解雇するっ！！わかったかっ！？」
「…畏まりました、旦那様」
背を向けたままラシードは会釈すると、華奈子を抱いて出て行った。
「…何してるんだ…お前…」
私が息を上げて力を抜くと、ようやく田辺は腕を解き、私に手を差し伸べた。
その手を掴み、立ち上がる…ベッドの上は華奈子の血が点々と滲み、傷の深さを思い知らされる。
「何があった？」
ベッドに力なく座り込んだ私に、田辺がハンカチを差し出して声を掛けた。
「…華奈子が…屋敷を出て行こうとした」
「彼女が？自分でそう言ったのか？」
私は、床に落ちていたコミュニティー誌を田辺に渡した。
「これが？」
「部屋を探し…仕事を探して…荷物をまとめて出て行こうとしていたんだ！！」
「…エド…お前…」
「許さない…どこへも行かせ無い…華奈子は、私のものだっ！！」
「馬鹿野郎っ！！」
いきなり田辺が、私の横っ面を叩いた。
「何をする！？」
「馬鹿だ、お前はっ！！何故、彼女の話を聞いてやらなかった！？」

「何だと！？」
「荷物をまとめたのは、違う理由があったからだ！」
「…え？」
「今日、俺とラシードが、クリスマス休暇で帰省するお前の親族の部屋割りをしていた。どうやっても部屋が足りないんだ…彼女はそれを聞いて、自分が別宅の方に移ると申し出てくれた。部屋の掃除や準備もある。早い方がいいだろうと…お前が帰ったら許可を貰って、直ぐに移る事になってたんだぞ！」
「…そんな」
「その雑誌の事は知らないが…昼間も、仕事や部屋を探すなんて話は、一言も出ていない…それに…」
田辺は雑誌に目を落とすと、眉を潜めた。
「お前の感覚ではどうか知らんが、彼女一人が住むには、家が大き過ぎるだろう？」
「…勘違いだと言うのか！？」
「多分な。ラシードが、何か聞いているかもしれんが…」
足元から築き上げて来た何かが、音を立ててガラガラと崩れ去る。
私が自分で壊した…最悪だ、華奈子を傷付けるという、最低な行為に自ら走ってしまった…。
いつの間にか自ら噛んだ唇から血が溢れ、口の中で華奈子の血と混じり合う。
「…華奈…子」
ふらりと立ち上がると、グニャリと世界が歪んだ…いや…歪んでしまったのは私かもしれない…。
「エドワード！？」
そのまま、私は床に沈んだ。

…熱い…焼ける様な熱さ…。
私の心臓はどこ…胸に有るはずの心臓が、今は左肩に有る様な…。

あの時、一体何が起きたのか？
後ろ手に縛られ、ブラウスが引き裂かれてボタンが飛んで行った。
エドが…私にのし掛かり…首筋を舐められて…肩に…。
ビクリと痙攣して目覚めると同時に、肩に焼け付く様な痛みが走る。
「目覚めたか、カナコ？」
「…Ｍｒ．アンダーソン…どうして…ここは？」
「別宅の客間だ。今は、殆ど物置だがな」
「…私は…」
躰を起こそうとして、又痛みが走り眉を潜めた。
包帯を巻かれた肩の上から、氷が入れられたビニール袋が落ちる。
「何が起きたのか、覚えているか？」
「…はい」
瞬間、私の肩から顔を上げたエドの…吸血鬼の様に口を血で濡らし、緑色の瞳を爛々と輝かせた顔を思い出し、ブルリと震えた。
「先ずは、食事だ。その後、起きれる様なら居間に来るといい」
「はい…あの…」
「話は、後だ」
そう言ってＭｒ．アンダーソンは部屋を出て、入れ代わりに執事が食事を運んで来た。
本宅から届けられたのだろうか…小さな土鍋には、温かな雑炊が湯気を上げていた。
食事を終え、用意された薬を飲み、部屋の隅に置かれていたスーツケースから着替えを出し、比較的ゆったりとしたホームウェアに着替える。
部屋を出ると、少し陽が傾き掛けていた…という事は、丸一日寝ていたという事だろうか？
私が居間に入ると、執事が黙って珈琲を出してくれた。
「体調は？」
「大丈夫です。まだ、少し痛みますが」
「そうか……エドワードが、倒れた」

「えっ！？」
「昨夜、正気に返った途端…高熱を出し倒れたそうだ。興奮し過ぎて薬も効かず、寝る事も出来ないと聞いている」
「直ぐに、参ります！」
「待て、カナコ」
Ｍｒ．アンダーソンが、静かに私を見詰めた。
「アレは、炎の様な男だぞ！？お前を、焼き尽くす様な愛し方しか出来ない」
「…Ｍｒ．アンダーソン、それは…」
「お前に全身で愛情を注ぎ込むが、一歩間違えば、又今回の様にお前を傷付ける…狂った様にお前だけを追い求める。逃げ出すなら今しか無い…会いに行けば、今度こそお前は逃げ出せなくなるぞ？」
「私が…私が悪いのです。エドワード様の優しさに甘えて、愚図愚図と迷い、答えを引き延ばしてしまった…あの方を狂わせたのは、私の罪です！」
「カナコ…」
「結婚という形に、私が囚われ過ぎたのです…そんな物に囚われず、エドワード様のお側に居ると…私が言えば良かったのに…」
「決心は、変わらないか？」
「変わりません！あの方のお側に居ます」
Ｍｒ．アンダーソンは溜め息を吐き、私の手を握った。
「エドワードを頼む」
私は覆うように握られた、その骨張った手にキスをすると立ち上がり、本宅に向かった。

エドの部屋に入ると、田辺とＤｒ．が額を寄せて何やら相談していた。
「大丈夫なのか、アンタ！？」
「ご心配お掛けしました。エドワード様は！？」

「最悪だ…興奮して、手が付けれない…アンタを連れて来いと、そればかりで…」
「Ｄｒ．状態は？」
「興奮して高熱が出ています。鎮静剤を打っても効かず、睡眠、食事共に摂れていません」
「どうすれば良いですか？」
「先ずは落ち着かせ、水分を摂らせて下さい。これ以上、高熱が続くのは危険です。脱水を避け、熱さへ下がれば…」
「わかりました。氷とタオル、洗面器、水分補給出来る物を至急用意して下さい」
私がＤｒ．に用意して欲しい物を頼むと、隣から田辺が枕と布団を渡して来た。
「これは？」
「中に入ればわかる…気を付けてくれ、さっき迄暴れていたから…」
ノックして寝室に入ると、薄暗い部屋の中は幻想的な世界になっていた。
ドアを開けた僅かな風に、無数の羽根が舞い上がる…私の歩く側から、フワフワと羽根が舞った。
成る程…枕と布団を引き裂いてしまったのだろう…しかし、何と美しい光景だろう…まるで…。
ベッドの端に座ると、俯せて息を上げているエドが低い唸り声を上げていた。
「…華奈子を……華奈子を…連れて…来い…」
私はそっとエドの髪を撫でて、静かに声を掛けた。
「ここに居るわ」
エドの髪に絡まった羽根を取ってやりながら、彼の背中に手を付いた。
「私は、ここよ」
いきなり左手を掴まれ思い切り引かれ、叫び声を上げそうになるのを必死で堪えた。

勢い良く仰向けに引き倒された躰に、覆い被さる様にエドが私を見下ろす。
舞い上がった羽根が、ゆっくりエドの背中に降り積もる…美しい…何て美しい人！
今もって信じられないのだ…この美しい人が、私の為に狂う等と！？
いつも鮮やかなグリーンの瞳が…暗い深海の様に光を宿さない…その瞳が、私を見下ろしたままゆっくりと下りて来る。
彫刻の様に表情の無い強張った顔が、私に触れる瞬間、僅かに崩れた。
「……Ｍｙ　ａｎｇｅｌ…」
羽根が触れる様におずおずとした軽いキスが、だんだんと息を上げて深いものに変わる。
まるで生気を吸い取られるかの様な、濃厚で激しいキス…エドの両手は、もどかしいとでもいう様に私を掻き抱いた。
やがて私の名を呼びながら、首筋にキスが降り…エドは、私の包帯を確認すると激しく痙攣し、私の胸に顔を埋める。
洋服越しに伝わる、じんわりと濡れる熱…私はエドの頭を抱き締めた。

第18章

ドアの向こうで、田辺が声を上げて電話しているのを聞きながら、私はベッドの中で編み針を動かしていた。
横には、座る私の腰に抱き付く様に腕を回してエドが眠っている。
倒れてから5日、エドはようやく熱も引き、食事も摂れる様になったが、あれ以来片時も私を離そうとしない。
どれだけ、もう離れないと諭しても、その腕は私を追い求めた。
安心させる為に、意を決して私を抱いてもいいと持ち掛けた。
死ぬ程恥ずかしかったが、今迄は私の心臓を気遣い、我慢してくれていたのを知っていたから…。
だがエドは、それが結婚に繋がるものではないと知ると、頑なな迄に拒否をした。
ノックの音に返事をすると、ラシードが珈琲を乗せたワゴンを運んで来た。
「おはようございます。旦那様は、まだお休みですか？」
「おはようございます。いえ…もう起きていらっしゃいますよ、多分…」
そう言って、私のウエストの所で先程からモゾモゾと動く手をつねる。
「Ｍｉｓｓ　廣徳に、先程荷物が届きましたが、如何致しましょう？こちらに、お運びして宜しいですか？」
「いえ…申し訳有りませんが、別宅の客間にお願い致します」
「畏まりました」
ラシードが退室すると私は編み物を中断して、隣で寝たふりをするエドの髪を撫で梳いた。
「起きているんでしょう、エド？」
「…華奈子は、柔らかくて気持ちがいい…」
「それって、とっても失礼だわ」

「私が気に入っているのだから、それでいい…」
やんわりとウエストのたるみを触りながら、エドはクスリと笑った。
「そろそろ起きて歩く練習した方がいいわね…来週から仕事も始まるし、お客様も到着するし…」
「華奈子」
エドは起き上がると、左肩に触れぬ様に気遣いながら後ろから抱き締め、私の項にキスをした。
「…クリスマス休暇の間…本当に、私設秘書として生活するのか？」
「そうよ…何なら、その後も第二秘書として、田辺さんのサポートをしてもいいと思っているわ」
「…生活も…別宅でするのか？」
「本宅の客間は、一杯になるもの」
「ここで暮らせばいい…この数日、私達は上手くやって来たと思わないか？」
「でも、秘書が主の部屋で生活するのは…どう考えてもおかしいでしょ？」
「だから…秘書では無く、婚約者として…」
「エド…言った筈よ…私は、貴方と…結婚出来無い…その代わり、ずっと側に居るわ…」
「私は認めていない…それでは、お前を幸せには出来ない！」
「…私は…十分幸せよ」
エドが少し落ち着いた頃、私はプロポーズの返事を『ＮＯ』と言い、その代わりに生涯エドの側を離れないと約束した。
しかし、エドは相変わらず『ＹＥＳ』以外は認め無いと、駄々を捏ね続けている。
首筋に溜め息が吐かれ耳の後ろにキスをされると、背筋をゾワリとする物が走り抜け、逃げる様に背を反らせた。
「……感じた？」
「っ…違うわ！」
フッと息で笑うと、そのまま耳の後ろを舐められ、恥ずかしさに身

を捩った。
「この間は、あんな大胆な事を口にしたのに…」
「貴方、拒否したじゃない！」
「華奈子が、可愛く甘えて『抱いて』とねだったら、極上の天国に連れて行くと約束するが？」
「言わないわ！そんな事…」
首筋迄赤くなるのを自覚して私が俯くと、エドはククと喉で笑い、私の首筋に頬を寄せた。
「…可愛い、華奈子…愛してるよ…」

翌週エドが出勤すると、書斎で書類を整理していた田辺が眉を寄せながら私に話し掛けて来た。
「アンタ、本当に俺と一緒に働くのか？」
「いけませんか？何か不都合が？」
「いや…少なくとも、俺は助かるが…。特にクリスマス休暇で帰省する女共の居る間、あの我儘に付き合わされるのは地獄だからな」
「どなたがいらっしゃるのですか？」
「先ずは、専務でエドの叔父のケント・バークレイ、その息子で新しいアジア・オセアニア統轄で常務のウィリアム・バークレイだ。後、義理の叔父に当たるヨーロッパ統轄で常務のセオドア・バークレイ。この３人は２４日に到着する」
私はメモを取りながら、田辺の話に聞き入った。
「問題は女共だ…出来れば、こっちをアンタに任せたい。まず、ケントの娘のメリッサ・バークレイ。今年２５歳になる、孔雀みたいな女で…エドの事を狙ってる。まぁ、父親の意向も有るんだろうが…何にしても傲慢で我儘な女だ。次が、セオドアの妻で叔母に当たるマリーナ・バークレイ。これも負けず劣らず我儘で煩い。後は…マリーナとセオドアの娘で、リディア・バークレイ２３歳。この娘は…ちょっと変わった奴だ」

「変わった方？」
「ん…まだ学生なんだが、東洋の事に矢鱈と興味が有るらしい。余り物事に拘らない跳ねっ返りだが…他の２人よりは共感が持てる。ただ母親のマリーナは、リディアとエドを結婚させたがっているな。まぁ、本家を取り込みたい奴等ばかりって事だろ？リディアは、会長のお気に入りだしな」
「…そうですか」
「リディアに捕まるのは、覚悟してくれ。後の２人の我儘にもな。この３人は、５日後に到着予定だ。マリーナとメリッサは、２４日迄買い物やエステ、観劇三昧だろう。その予約等も全て言い渡される…全く、いい迷惑だ！」
「お店等は、決まっていますか？」
「多分…メイド長が知っていると思うが…」
「わかりました…確認を取って、営業時間等も調べておきますね」
「食べ物の好みも煩いから、序でに調べて貰えると助かる…突然、どこそこのケーキを用意しろとか、紅茶はこの店の何とかという銘柄とか…色々言って来る。クリスマス休暇で店が休みに入ると、目も当てられん…メイド達は、他の用事で大わらわだからな」
「承知致しました」
「…案外…本当に秘書が合ってるのかもな…」
「え？」
「いや…メリッサは、基本的に何も拘らないが…まぁ、会えばわかる。後は…クリスマスプレゼントの手配と、カウントダウン・パーティーの準備だな」
「パーティーが有るのですか？」
「新年のカウントダウンを祝う、大晦日に開かれるパーティーだ。クリスマスは、親族で食事をする位だが、カウントダウン・パーティーは会社が主宰する盛大な物だ。パーティー自体は会社のホールで行われるし、会場準備等は会社の秘書がしてくれるが、親族の準備には俺達が駆り出されるだろう。勿論、俺達も参加する…そのつ

もりでいてくれ」
「…承知致しました」
それから4日間、私は店のリサーチや、親族をもてなす為の買い物に明け暮れ、夜は帰宅したエドの腕の中に納まるという生活を続けた。
「毎日、忙しそうだ」
「明日は、女性の方々が到着なさるから…」
エドの部屋の大きなカウチのコーナーに腰を掛けた彼の脚の間に納まり、後ろから抱き付かれる格好で、私は明日の最終チェックの為の書類に目を通していた。
「華奈子が、こんなに仕事熱心だとは思わなかった」
「あら…私は、皆さんに気持ち良く休暇を過ごして欲しいだけだわ」
「…その中には、華奈子自身も入っている？」
「え？」
片手で私を抱き締めて、もう片方の手で私の髪や頬、腕を優しく撫でながら、エドは私に問い掛けた。
首を捻り見上げると、すかさず優しいキスが降り注がれる…背後から包み込むエドの体温と、撫で甘やかすその優しさに、私は直にエドの腕の中で蕩ける様な幸福感を味わう。
私の手からそっと書類を取り上げてテーブルに置き、エドは私の足を掬い上げ膝に横抱きにすると、私を覗き込んだ。
「…幸せか、華奈子？」
「えぇ」
「本当に？」
優しい声音と、労る様な言葉…その美しい瞳は、未だに不安と寂しさが混在する。
…当然だ…私はエドに、一番肝心な事を口にしていないのだから…。しかし今後もエドの側に居る為には、決して口にしてはいけないのだ…私は、正式にエドの隣を歩かない道を選んだのだから…。
それに…もしそれを口にしたら…エドの暴走は歯止めを無くしてし

まうだろうし…私自身も、彼への独占欲が抑えられなくなってしまいそうで怖いのだ。
「華奈子…愛してる…」
自らが一番欲しい言葉を、エドは何度となく私に囁く。
「…私は、酷い女ね…貴方の気持ちに気付いているのに、応える事が出来ないなんて…」
「いいんだ…わかっている」
「ごめんなさいね、エド」
「…お前は…辛くは無いのか？」
「…我慢出来なくなった時…この関係も終わってしまう。今の私には、その方が辛いわ」
「…愛している…」
エドが思いの丈を唇に乗せ、深い口付けを私に与えた。
私は知らなかったのだ…その覚悟が脆く崩れ去る程、身を焦がす程の想いが私の中に眠っていた事を…。

翌日、何台ものリムジンを従えて2人の女性が到着した。
玄関に運び込まれた荷物は、宛ら引越しの様だ。
「帰る時は、こんなもんじゃ無い…それぞれ倍程の荷物になって帰って行く」
ラシードの横に並んだ田辺が、私に耳打ちした。
やがてゴージャスな毛皮を纏い、女優の様な女性達が現れた。
「いらっしゃいませ、マリーナ様、メリッサ様」
「新しい執事ね。名前は？」
「ラシードとお呼び下さい」
「世話になります…久し振りね、エドの秘書…名前は…」
「田辺です。こちらは新しく秘書になった、廣徳です」
「廣徳と申します」
「タ…ケ…ト…言い辛い名前ね。ファーストネームは？」

「華奈子と申します」
「カナコね、宜しく」
赤みを帯びたブラウンの髪に、吊り上がった細い眉…Ｍｒ．アンダーソンと同じマリンブルーの瞳が美しいマリーナは、大柄な女性だ。
「それにしても、エドは本当にイエロー・モンキーが好きなのね！」
マリーナの背後に立つ女性の言葉に、田辺があからさまに眉を潜めながら言い返す。
「メリッサ様は、相変わらずお美しい…その容姿だけなら、世界中の男性を虜に出来るでしょうに…」
「…相変わらず、嫌味な男ね！」
「お誉めに預かり、恐悦至極に存じます」
２人のやり取りを聞きながら、私の目はメリッサに釘付けになった…何故なら、日本の屋敷で彼女の姿を見ていたから…。
透き通る肌、波打つ黄金の髪、意思の強そうな美しい眉の下には、煌めくコーンフラワーブルーの瞳…薔薇色の頬に、濡れた赤い唇…。
エドと共に写真に写っていた女性が、数倍も魅力的になって私の目の前に立っていた。
「……の！」
「…あ…はい？」
「貴女、耳が聞こえないのかって聞いてるのよ！？」
「申し訳ありません」
「メリッサ、カナコは貴女に見とれていたのよ。初対面の人間は、大概そうだわ」
「…はい、失礼致しました」
マリーナが口添えをすると、メリッサは満更でも無さそうな笑みを浮かべて言った。
「私の部屋は？」
「昨年と同じお部屋をご用意させて頂きました、マリーナ様」
「私は必要無いわよ！今年から、エドの部屋で過ごすんだから！！」
この言葉には、田辺だけで無くマリーナ迄もが眉を潜めた。

「冗談じゃありませんよ、メリッサ！嫁入り前のレディが、殿方と一緒の部屋で過ごす等と…」
「でも、この休暇が明ける頃には、私達は婚約するのよ、叔母様？」
「聞いていませんよ、そんな事…」
「あら、お父様から聞いて無いの？」
「エドワードの婚約者候補なら、ウチのリディアだってそうですよ！それに、名だたる社交界の令嬢方は、皆さん名乗りを上げているでしょう！？」
「社交界の人達の事なんて知らないわ！それに…リディには、そんな気はさらさら無いじゃないの」
「お話し中、申し訳ありませんが…」
女性達の間に、田辺が静かに割って入った。
「こんな所でする会話では、無いのではありませんか？」
「まぁ…それは…」
「メリッサ様には、昨年と同じお部屋を使って頂きます」
「だから…」
「エドワード様のご指示ですよ、メリッサ様」
田辺が、眼鏡越しにメリッサを睨み付けると、流石のメリッサも言葉を飲んだ。
「貴女…カナコだった？部屋に荷物を運んで頂戴！それから、ジャン＝ポール・エヴァンのショコラショーが飲みたいわ！それから…」
捲し立てるメリッサに、田辺が眼鏡越しに冷たく言い放つ。
「申し訳ありませんが、メリッサ様。Ｍｉｓｓ　廣徳はメイドではありません。私と同じ、エドワード様の私設秘書です。それに彼女には、リチャード様の秘書としての仕事もあります。余りご無理を申されると…エドワード様の怒りを買いますよ？」

第19章

夕方、社長室に現れた赤毛の女性を見て、私は少し眉を寄せながら尋ねた。
「どうした、リディ？珍しいな、お前がこんな所に訪ねて来るなんて…」
「悪いわね、エド。ちょっとね…お願い事」
「少し待てるか？」
「いいわよ…仕事終わる迄待ってる」
一族の中で、唯一私と同じエメラルドの瞳を持つリディア・バークレイは、愛嬌の有る笑顔を見せた。
フランスに住む両親の元を離れ、カルフォルニア大学の学生であるこの従妹は、余り堅苦しい事を好まず自由闊達に生きている。
「…で、どうしたんだ？」
「ちょっとね、屋敷じゃ出来ない相談があってさ…エドって、とうとうメリッサと婚約するって聞いたけど、本当？」
「何を言っている！？誰がそんな事！？」
「やっぱりね…今日、ママとメリッサが一緒に屋敷に行ったらしくてさ…到着早々メリッサが宣言したんだってよ？」
「ある訳無いだろう！？」
「年明けに婚約発表するって…ケント伯父様が…」
「…全くっ！！」
「ママ頭に血が登っちゃって大変なの…婚約者候補は、私だって居るのにって。私に、この休暇で何としてでもエドを射止めろって、凄い剣幕で電話があってさ」
「…リディ」
「エドォ…私、貴方の事嫌いじゃ無いけど、貴方みたいに我儘な俺様タイプって…夫として着いて行けないっていうか…結婚なんて考えられない。正直、バークレイ・コンツェルンの社長夫人なんて興

味無いしさ…私に務まるとも思えない。貴方だって、私と結婚する気なんてさらさら無いでしょ？」
「偉い言われ様だが…間違いでは無いな」
「良かったぁ～、貴方の方にその気が有るなんて言われたら、私の人生終わってたもの！」
「何だ、それは！？…だが、正直…メリッサよりは、お前の方がましだと思っていた」
「えぇぇ～！？やめてよぉ！！そんな事言ったら、ママの暴走が始まっちゃうわ！！」
「ちゃんと聞け！思っていた…と、言ったろう？」
「じゃあ、今はメリッサがいいの？…それも薦めないわよ？」
「それは無い…絶対に…」
リディアのキラキラと輝く目が、私を覗き込む。
「エド…誰か、お相手を見付けたのね！？」
「…」
「心配しないで！私誰にも言わないし、協力だってするわ。その代わりにお願いが有るの！」
「何だ？」
「今日、これから私と一緒に食事をして、一緒に屋敷に帰って。それでママに、私からアプローチしたって言い訳が立つわ。その上で、貴方の口からハッキリとママに断って欲しいの！！」
「偉く芝居掛かっているんだな？」
「あの人を納得させるのが並大抵じゃ無い事位、貴方だってわかってるでしょう！？」
私は溜め息を吐いた後、腹の底から沸き上がる笑いを抑え様が無かった。
「…エド？」
「何が食べたい、リディ？今日は、お前の好きな物をご馳走してやる！」

「華奈子は、どうしている？」
「正直、任すのでは無かったと後悔している」
「どうしたんだ？務まって無いのか？」
「いや…実に有能なんだ…有能で真面目過ぎて…女共に振り回されてる」
そう言って田辺は、口の中でチッと舌打ちをした。
私がリディアと食事を共にして帰った事で、メリッサの機嫌は一気に悪くなった。
一方で、マリーナにリディアとの結婚は有り得ないと話したが、マリーナはその事をひた隠しにし、こちらも表面を取り繕うのに必死で機嫌が悪い。
然も、何故かこの2人は互いに牽制し合いながら行動を共にする事が多く、昼から起きて買い物やエステ、美容院に通い、夜は観劇やコンサートに明け暮れ、明け方近く迄飲み歩くらしい。
「彼女を同行させて、こき使ってるんだ…店の予約、注文、クレーム、チケットの手配から車の送迎の手配、荷物持ち迄やらせてるらしい」
「何だと！？」
「食事は自分達だけで取って、彼女は運転手と共に待ちぼうけなんだと。彼女は運転手を気遣って食事や珈琲を差し入れるそうだが、彼女自身は疲れ過ぎて食事も取れないんだそうだ。昼間はリディアが話を聞きたくて手薬煉引いて待ってるからな…寝る間も無いんだろう。流石にこの2日程、顔色の悪い彼女を気遣ってリディアも遠慮しているが…そういう時に限って、会長の用事が入る…」
「何て事だ…」
「休ませないと、本当に倒れてしまうぞ」
「何故休ませない！？」
「俺が言って休む様なら、お前に報告等しない」
そう言って、田辺は呆れた様に頭を振った。

あのコミュニティ誌の印は、病院に付き添った中国系のメイドの親戚が、ニューヨークに家族で移住する予定で仕事と住居を探しているので、華奈子に求人欄と住宅情報を上海語に訳して欲しいと依頼した物だった。
全くの誤解で傷付けたにも係わらず、華奈子は私に恨み言ひとつ言わなかった…正気を無くした私に、躰を投げ出し生涯側に居ると言ってくれた。
…だが、プロポーズの答えは『ＮＯ』だと言う…私の為に…バークレイの為に。
私を宥める為の躰等必要無い…想いを通じて尚、華奈子の心は傷付き血を流し続ける。
彼女が傷付く上に成り立つ関係等、本当の幸せとは言えない…だが、手放してやれないのだ！
身も心も華奈子を求め悶え苦しみ、己の中に巣食うモノが咆哮を上げる。
だから認め無い…『ＹＥＳ』という答え以外を認める訳にいかないのだ！！
「華奈子は？」
「会長の所だ」
別宅に向かう渡り廊下を、私は足早に進んだ。
執事に案内されたリビングの暖炉の前に置かれたソファーで、祖父は静かに本を読んでいた。
「…会長」
そう声を掛けると、首を捻り口元に人差し指を当てる。
近付くと、暖炉の前に置かれたラグに座り込み、祖父の膝に頭をもたげる様な状態で華奈子がうたた寝をしている。
「そこのハーフケットを取ってくれ」
祖父が指差したケットを取ると、私は華奈子の肩にそっと掛けてやった。
「休ませる為に、呼んだのですか？」

「昨日、リディアが心配していたからな。座らせて話を聞いていたら、5分も経たずに寝てしまった。マリーナ達のお守りに、余程疲れていたんだろう」
「…ありがとうございます」
華奈子が祖父の事を優しいと言っていたのは、本当の事なのだ…もしかしたら、自分にもこんな愛情を注いでくれていたのかもしれない。
しかし…私には、素直に受け入れるだけの心の余裕は無かったのだ。
「エドワード…調べたのか？」
「はい？」
「お前の両親の事故の事だ」
「何故それを……華奈子ですか？」
「小賢しい女だ…そう言ってやったら、礼を言われたぞ」
「……自殺…だったのですね。それを、会長の力で揉み消したと」
「お前の父親であるギルバートは、功を焦ったのだ…だが、アイツを追い込んだ責任は、私に有る」
「油田開発失敗の件ですか？」
祖父は暖炉の火を見詰めたまま、ゆっくりと語り始めた。
「お前も知っている通り、私は正妻を持たなかった。だから、ギルバートもケントもマリーナも、全て母親が異なる。長男であるギルバートには、それがプレッシャーだったのだろう。私の後継者として会社を引き継いだのは、お前を引き取った後だったからな。周囲から、お前を差し出して社長の座を手に入れたと言われ続け、己の手で何とか功績を上げようと焦り、エネルギー事業にのめり込んだ」
「会長は、反対だったのですか？」
「当然私は反対した。油田採掘等、博打に等しい。当たれば儲けは大きいが、外れれば被害は甚大だ。だが私に相談した時、事業は既に動き始めていた…かなりの金額を注ぎ込んだ国内の採掘は失敗、その穴埋めをする為に次々と採掘し…最後には、中東の油田開発に迄手を伸ばしたのだ」

「それも失敗したのですね？」
「地質の調査、採掘に掛かる費用の他、中東の方にばら蒔く金も相当な物だった…バークレイの屋台骨が揺らぐ程の損失を出したのだ」
「已む無く打ち切りを命じたのですね」
「今のお前にならわかるだろうが、私にはバークレイで働く者達への責任が有る…ギルバートは、引き際を間違えたのだ。エネルギー事業からの撤退を、会長権限で申し渡した…社長の椅子は渡しても、黄金の鍵はまだギルバートに渡していなかったからな」
「父は…納得しなかったのですか？」
「…あの時は、私に裏切られた腹いせに、お前の母親と共に自殺したのだと思っていた。お前に会いに来たのも、お前を道連れにする為に来たものだとばかり思っていたのだ」
「それで…あんな事…」
「あんな事？」
「覚えていませんか？あの時、『あの馬鹿者が！』と…会長は、息子の死にそれしか言わなかった。そして私に、『お前は、負け犬になるな』と言ったのです」
「…そうだったかな。あの時、私自身がギルバートに裏切られた思いだった…強引な経営者である私と違い、ギルバートは社員と力を合わせ、会社を守り立てて行くであろうと期待していたからな。だが、社長の椅子はギルバートには重荷だったのだ…後日、私宛に遺書が届いた。会社のトップとは孤独なものだ…常に判断力、決断力を求められる。上手く出来て当たり前、失敗した時には針の筵…巨大企業になったバークレイ・コンツェルンの重責に、ギルバートは耐えきれなかったのだ」
「…優しい人でした」
「そうだな…だからこそ、お前を強く育てて欲しいと…何があっても切り抜けられる強さを身に付けさせて欲しいと、ギルバートに託された」
「……私は、会長の思い描く通りに育ちましたか？」

「どうだろうな。自我が強いのは私譲りだ。だが、経営者としては…まだ未知数だろう」
「そうですね」
「お前の好きにするがいい、エドワード。その為に、空席だった社長の椅子も、黄金の鍵も渡したのだ。会社の事も伴侶の事も…私は口出しするつもりは無い」
「…会長」
「もう、そう呼ぶのもよせ。あと１０日もすれば、ただの爺ぃだ」
「お祖父様…ありがとうございます」
パチンと暖炉の薪がはぜて、華奈子がピクリと動いた。
「お前が、可哀想だと言われた」
「え？」
「私に拘りを抱いたまま、何も知らずに私を看取らなければならないお前が、可哀想だとな」
「…」
「お前は、カナコをどうしたいと思っているのだ？不器用な女だぞ？マリーナやメリッサから、連日お前の結婚話を聞かされ、胸が張り裂けそうになっているだろうに…私の元に呼ぶと、ぼんやりと窓から空ばかり見上げている。朝は、少し泣き腫らした顔で珈琲を飲んでいるがな」
「…」
「私の元に引き取った所で、私に残された時間は余り無い…」
「はい」
「カナコと結婚しても、お前は幸せになれるが、カナコは１００％幸せになれる訳では無い…それは、わかっているのだろうな？」
「はい…しかし華奈子を手放せば、彼女は確実に死を選ぶ。結婚をせずに手元に置けば、今の状態を延々と続ける事になります。華奈子にとっても、この結婚が最良の道だと考えています」
祖父は私の告白を聞き、華奈子の髪を撫でてやりながらニヤリと笑った。

「そうか…お前が、自分の我儘だけで押し進め様としていないのであればいい。お前がカナコを選ぶ理由も、私には何と無く理解出来る。この女の行動には常に誠意を感じ、その存在は心和ませるからな」
「それだけではありません。猛る私に冷静さをもたらし、正しい判断を導く為に立ち止まらせてくれる…何より、可愛くて仕方がない…手に入れたくて、幸せにしてやりたくて、堪らない気持ちにさせます」
「成る程」
そう言って、祖父はクックッと喉の奥で笑うと、急に真面目な顔を私に向けた。
「今朝、ケントから連絡があった。お前とメリッサの婚約を正式に整え、カウントダウン・パーティーで発表したいとな」
「そうですか…とうとうお祖父様に申し入れて来ましたか」
「知っていたのか？私は当主をエドワードに譲った身だ、直接エドワードと交渉しろと言っておいた」
「…ありがとうございます」
「気を付けろ」
「は？」
「私がケントを後継者に選ばなかった理由は、アイツの姑息な行動故だ。目的の為には人を騙し、姑息な行動に出る。金にもルーズで嫉妬深い…故に信用出来なかった」
「…承知しています」
「ならばいい…これを期に、新しい体制にするのも良いかもしれん」
「考えてみます」
「そろそろカナコをベッドに運んでやれ。こんなに薄着では、暖炉の前でも風邪を引かせてしまう」
祖父は微笑み、華奈子の頬を愛おし気に撫でた。

第２０章

翌朝、その目覚めの爽快さに驚きながらも、準備を整え使用人用の食堂に行くと、顔見知りになった和食のシェフが手招きをする。
「お早う、カナコ！今朝はスペシャル・メニューだ！」
そう言って、土鍋の鳥雑炊の和食セットを渡してくれた。
「いいんですか、私だけ？」
「大丈夫、タナベはコレにバイキングのメニューも食べていた。大体君達Ｊａｐａｎｅｓｅが食べてくれないと、私の仕事が無いんだ」
田辺も食べたと聞いて安心し、私はありがたくトレーを受け取った。この所忙しく、まともな食事をしていない躰には、正直ありがたいメニューだ。
昨夜の心地好い眠りと、起きた時のオリエンタルムスクの残り香…きっとエドが口添えしてくれたのだろう。
朝食を終えて書斎に行くと、田辺とメリッサが口論していた。
「おはようございます、遅くなって申し訳ありません」
「カナコ！！」
朝から不機嫌さを全開にしたメリッサが、私に眉を吊り上げた。
「貴女、昨日どうしてたの！？お祖父様の用事が済むのを、私ずっと待ってたのよ！？お陰で予定が狂ってしまったわ！！どうしてくれるの！？」
「申し訳ありません、メリッサ様」
「メリッサ様…Ｍｉｓｓ　廣徳は、貴女の召使いでは無いと申し上げた筈です。彼女は昨日夜迄、リチャード様の仕事をしていました。貴女に構っている暇は無かったのです」
昨日、Ｍｒ．アンダーソンの元に呼ばれて暖炉の前に座らされ、少し話をした記憶はある…しかし、その後の記憶は朧気なのだ。
話し合う男達の低い声、優しく抱き上げ温かい腕の中で撫で寝かせられた様な気がする。

「何でもいいわ！！今日は、１日付き合って頂戴！！」
「申し訳有りませんが、メリッサ様…Ｍｉｓｓ　廣徳は、本日リディア様と外出の予定になっております」
「何ですって！？」
私が答えるより先に、田辺が私の本日の予定をメリッサに報告した。
「貴女の我儘にばかり、付き合ってはいられないという事ですよ」
田辺に言われ、メリッサは真っ赤になりながら叫び出す。
「私は、エドの婚約者よ！？未来のバークレイ夫人よ！？私の言う事が聞けないっていうの！？」
「又それですか…一体誰がそんな事を言ってるんです？エドワード様が承知したとでも仰るのですか？」
「…リディに許可を貰えば、文句無いでしょっ！？」
メリッサがバタンと大きな音を立ててドアを閉めると、田辺は手に持った書類をテーブルに放り投げた。
「田辺さん…メリッサ様、大丈夫でしょうか？」
「放って置けばいい、あんな女！！あんなのがエドの女房になってみろ！？エドが何と言おうと、俺はこの屋敷を出て行ってやる！！」
「田辺さん、それは…」
「アンタだって耐えられないだろう！？」
「でもそれでは、エドワード様がお可哀想です」
「そうならない為に、アンタが結婚してやればいいんだ」
「…田辺さんの為にですか？」
「そうだな…屋敷の使用人達も喜ぶだろうよ。食堂のツリーの下に置いたアンタからのプレゼント、皆楽しみにしていたぞ？」
「ただの、チョコレートと金平糖ですよ」
「１人ずつ名前入れてカード付けてやったんだろう？忙しいのに、よく気の回るこった」
「Ｍｒ．ラシードからお聞きしたんです。エドワード様が、今年からあちらの食堂の方にもツリーを用意して下さって、皆さん喜んでいらっしゃるって…私は少しだけ、その想いに便乗しただけですよ」

笑いながら話す私を、田辺がじっと見詰めるのに気付き、慌てて顔を引き締めた。
「…何か？」
「いや…今日は、１日リディアに付き合ってやってくれ。メリッサよりはましだと思う。明日は男性客も到着するし、商店の営業も明後日は休日だ。家の中だけの接待だけになる」
「はい…私、メリッサ様の様子を見て来ます。リディア様と揉めていても困るので…」
私はそう言って田辺に一礼すると、書斎を出て居間に向かった。
「譲りなさいよっ！！」
「嫌よ…貴女、散々カナコと出掛けたんでしょ？今日は、私に付き合って貰うの」
「リディなんて、別に買い物がある訳じゃ無いでしょ！？私は、まだまだ買わなきゃいけない物が有るのよ！！」
「なら、お１人でどうぞ？カナコは譲らない…エドにも、ちゃんと許可を貰ったもの！」
「エドに！？」
「そう。今日は１日カナコを借りるって…エドは了承して、田辺に言って置くって、車も使っていいって言ったわ…カナコ、聞いてくれた？」
「はい…先程、田辺さんからお聞きしました」
「良かった…１０時頃から出発するわ。車の準備もお願いね？」
「承知致しました」
「一体何だって言うの！？エドの婚約者である私に対して…、誰も彼も…」
「メリッサァ…いい加減にしないと、エドに嫌われるわよ～！？」
ソファーに座ったリディアは、チラリと私を見上げて笑った。
「何よっ！？」
「もう去年迄のエドじゃ無い…彼、黄金の鍵を引き継いだバークレイの当主よ？貴女と結婚なんて有り得ないんだから、１人でギャー

ギャー騒ぐの止めてよね。朝から煩いったら無いわ！！」
「リディ！？リディア・バークレイ！！私に向かって、よくもそんな口を…」
「あら、貴女と私は対等よ？何の遠慮も無いわ」
「…リディ…よくも…」
「メリッサ…いい加減にしないと、本当にエドがキレるわよ？」
そう聞いた途端、メリッサはブルリと震えて青い顔で出て行った。

「困ります、リディア様…」
「もぅ！そんな事言わないでよぉ～」
メリッサの買い物に付き合うのは、絵美の買い物に付き合わされるのと似ていた。
勝手放題言いながら、手当たり次第に買い求め、荷物は全て私に渡す。
しかし、リディアの買い物は…私と会話を楽しみ、相談し対等な立場で意見を言う。
多分、友人同士の買い物とは、こういった物なのだろうが…生憎と私には経験の無い事なので、戸惑う事ばかりだ。
「カナコが買ってくれないと、私買って貰えないよぉ」
「どういう事ですか？」
「…エドに頼まれたの。カナコ…冬服持って無いって。いつまでも薄着で居ると、今に風邪引いてしまうって心配してた。暖かい洋服一式、買いに連れ出してくれって！」
「エドワード様が？」
いつ、私の洋服等チェックしたんだろう？
確かに廣徳の家から持ち出した洋服は薄手の物ばかりだが、日本の秋には十分対応出来る物だった。
まさかアメリカに迄来るとは思わず、直ぐに帰国するものとばかり思っていたし…その先の人生は、自分には無いと思っていたから…。

「カナコ、パーティーのドレスも無いんでしょ？」
「カウントダウン・パーティーですか？出席する様に言われましたが、私は秘書の立場ですから…」
「だから？一体何で出席するつもりだったの？」
「え…このスーツで…」
「はぁ！？有り得ないわよ、カナコ！」
「そうなんですか？」
「当たり前じゃない！パーティーなのよ？秘書でも社員でも、皆正装して着飾って来るわ！…もしかして、日本の秘書って皆地味な格好でパーティーに行くの？」
「そうですね…秘書は目立たぬ様にサポートするのが仕事ですから、着飾るという事は先ず有りません」
「へぇ…でも、今回は駄目よ！エドの側に居るのにそんな格好じゃ、悪目立ちするかサービスするウェイトレスに間違われるわ！」
「しかし、当日は皆様のお世話をしなければなりません。特にメリッサ様は、この所ご機嫌も悪い様ですし…今年最後のパーティーは、楽しんで頂きたいんです」
「甘やかせ過ぎよ、カナコは！貴女、メリッサの侍女じゃ無いのよ！？」
「そうですが…ドレスの件は、田辺さんに相談してから考えます」
「明後日から、クリスマス休暇に入る店も多いわ」
「そうですね」
「…カナコって、案外頑固者ね？ドレス買う気無いんでしょ？」
「…申し訳ありません…私には似合いませんし」
リディアの緑の瞳がスッと暗い色になり、彼女は溜め息を吐いた。
「私が言っても駄目みたいね…ランチに行きましょうか？」
「ご予約は？」
「もう、予約済み」
リディアに連れて行かれたホテルのイタリアンレストランで、個室に入るなり私は彼女の好奇の目に曝された。

「エドって、案外優しいのね？」
「お優しいですよ？」
「今迄、そんな事思わなかった…我儘で俺様で、いつも機嫌が悪くて…キレると物凄く怖いのよ！？」
「…そうなんですか？」
「以前休暇で屋敷に集まった時にね、メリッサが自分の飼ってたドーベルマンを連れて来たのよ。この犬が躾がなっていなくて…あの娘と一緒で煩くてさ。皆散々注意してもメリッサはお構い無しだったから…エドがブチキレたの」
「…」
「皆がお茶してる席で…エドが絞め殺しちゃったの…ドーベルマンよ！？凄く大きかったのに…メリッサもママも泣き叫ぶし、パパなんて腰抜かしちゃうし…平気で見てたのは、お祖父様だけだったわ」
「…確かに…激しやすい所はお有りですが…」
流石に、私も絞め殺されそうになったり、噛み付かれたとは言えなかったが…確かに、エドの中には非常に猛々しい部分が有るのだ。
と同時に、とても寂しがり屋で、不器用で優しい。
「ねぇ…カナコって、エドと付き合ってるの？」
「え？」
「エドが好きなのって、カナコの事でしょ？」
「私は…エドワード様の私設秘書です」
「駄目よ、バレバレ。だって貴女が居ると、エドはずっとカナコを熱い視線で追ってるし、貴女の洋服や健康の事迄気に掛けているし…」
「秘書だからですよ」
「ふぅん…隠すんだ…じゃあ、本人に聞くわ」
リディアがそう言った途端、ノックの音と共にエドが現れ、彼女に笑顔を向けて席に着いた。
「遅いよ、エド！お腹ペコペコ！！」
「悪い、リディ…仕事が立て込んだ。買い物は済んだのか？」

いつに無く優しいエドの微笑みに見とれていた私は、慌てて立ち上がり深々と腰を折り入口に向かった。
「華奈子、どこに行く？」
「車でお待ちしております。どうぞ、ごゆっくりお召し上がり下さい」
そう言って再び礼をすると、エドは眉を寄せて立ち上がり、ドア迄やって来るといきなり私の腰を抱き寄せ口付けた。
「っ…エドワード様！？」
「いいんだ、華奈子…リディには、もうバレている。そうだな、リディ？」
「まぁね…でも、カナコは否定してたよ？」
「華奈子！？」
「違います、リディア様！…お戯れが過ぎます、エドワード様。私は…車に戻ります」
私は慌てて部屋を出て、駐車場に走った。
こんな事をすれば、側に居る事が出来なくなるのに…エドは何を考えているのだろう？
いや、それよりも…私は、リディアに優しく微笑み掛けるエドを見たく無かったのだ。
エドの婚約者だと豪語するメリッサにも、私に気安く接してくれるリディアに迄…エドが笑顔を向けただけで堪らない気持ちになる自分が許せない！！
エドに笑顔を向けられるのは、自分だけだ等と自惚れているというのだろうか！？
「…馬鹿だわ、私…信じられない！！」
駐車場の隅で、私は座り込んで泣いた。

「あ～ぁ、泣かせた…折角カナコが誤魔化そうとしてるのに…」
「真面目過ぎるんだ、華奈子は！」

「洋服もドレスも、買えて無いよ。彼女、日本の秘書みたいにスーツでパーティーに出席するつもりでいるし」
「…それじゃ、困る」
「頑固なんだもん…私じゃお手上げよ！」
そんな気はしていたのだ…だが、無理強いするとパーティーへの出席を辞退しそうなので、リディアの協力を仰いだのだが…。
「しかし、エドがカナコみたいなタイプが好きだったとはね…意外だわ」
「ああいうタイプが好きなんじゃ無い…華奈子だからだ」
「アラァ、ご馳走様！！でも…かなり手強いみたいね？」
「難攻不落だ…側に居るが、結婚はしないと言い張る」
「それで秘書！？有り得ない！！この休暇だって、メリッサが常に『私はエドの婚約者よ！！』って威張り散らして…彼女を侍女みたいに扱ってるのよ！？私だって鬱陶しいのに…彼女どんなに傷付いてるか…」
「誰がメリッサ等と…私は、華奈子と結婚する！それ意外、考えられない！！」
「エド…ああいうタイプはね、時には強引に事を運ばないと、自分からは絶対に動かないよ？カナコは案外頑固者だし、余計にね…」
「…そうだな」
「いつもの強引なエドはどこに行ったの？まるで臆病風に吹かれた子供みたいだよね？」
「…全くだ」
「頑張ってね、エド…私は応援するわよ」

第21章

華奈子は私の事を不器用だと言うが、彼女の方こそ不器用だと私は思う。
ホテルの入口の前に立つと、滑り込んで来たリンカーンの助手席から華奈子が降り立ちドアを開けた。
「リディア様は？」
「彼女は、友人と約束が有るそうだ。お前は、このまま私に同行しろ」
「承知致しました」
「…後ろに乗るんだ」
華奈子は少し躊躇した後、素直に従った。
「少し、辺りを流してくれ」
そう運転手に指示を出し、運転席とのパーンテーションを閉じると、私は手に持ったランチボックスを華奈子に渡した。
「一緒にランチを…と思っていたのに…」
「…リディア様がいらっしゃいましたから」
「まだ、食べていないのだろう？食べるといい」
「いえ…後で…」
「華奈子！！ちゃんと食べろ！」
「…」
「…頼むから」
根負けした華奈子は、ランチボックスを開けて珈琲を啜り、サンドイッチを摘まんだ。
「洋服は、後で適当に選んで届けさせる。今からドレスを買いに行くからな」
「先程リディア様にも話しましたが…当日は、メリッサ様やマリーナ様のお世話もございます。どうか、いつも通りの格好で出席させて下さい」

「華奈子は、私の秘書だろう？彼女達のお守りでは無く、私の世話をするべきでは無いのか？」
「それは…田辺さんがいらっしゃいます」
「華奈子にも、居て貰わなければ困る」
「ドレスを着てエドワード様の側に居る事は…出来ません」
「メリッサの事を気にしているのか？」
「…ご婚約されると…カウントダウン・パーティーで発表なさると、お聞きしました」
「メリッサの言葉を、信じるのか？」
「…」
「私の言葉より、メリッサの戯言を信じるのか！？」
「…」
2人きりになっても秘書としての立場を崩さない華奈子に、私は苛立ちを覚えた。
紙コップを持つ彼女の手が震えている…然も黙して語らない。
これでは、近付いたと思った心が離れるばかりだ。
「会社に行こう、華奈子」
「え？」
私は華奈子の手からカップを取り上げスタンドに乗せると、彼女を腕の中に抱き竦めた。
「華奈子は、私を信じていればいい」
「…」
「私だけを信じて、私に付いて来ればいい」
華奈子は、私の胸に顔を擦り寄せた。
「大丈夫だ…悪い様にはしないから」

社長室のドアがノックされ、壮年の男が入って来た。
ケント・バークレイ…私の叔父であり、バークレイ・コンツェルンの専務取締役。

長年社長の空席を指をくわえて見てきたケントが現在狙っているのは、バークレイ・コンツェルンの社長である私の『義理の父親』という席だ。
「どうしました、社長？何かトラブルでも？」
口元に薄笑いを浮かべ、アイスブルーの瞳を怪しく光らせプラチナブロンドの髪を撫で付けた顔に、狡猾な自信が見て取れた。
「トラブルと言えば、トラブルですね…」
「何でしょうか、社長？」
「その前に、パーティーの準備は順調に進んでいますか、専務？」
ケントは部屋の隅に佇む華奈子をチラチラと窺いながら、自信を持って答えた。
「恙無く進んでいます」
「私の立てたプログラム通りに？」
「はい」
「余計なプランは、付け加えていないでしょうね？」
ケントは方眉を少し上げると、キラリと目を輝かせて言った。
「どういう事でしょうか？」
「…メリッサが、騒いでいるのですよ…パーティーで、私との婚約を発表すると」
「…」
「貴方からも、会長に申し入れたそうですね？」
「…それが？」
「はっきり言って、迷惑です」
「エドワードっ！？」
ケントは眉間に皺を寄せ、青筋を立てて私に凄んで見せた。
「その話は、再三断って来た筈だ。天地が引っくり返っても、私はメリッサと結婚等しませんよ？」
「じゃあ、誰と結婚するというのだ！？リディアか！？」
「…いいえ」
「大体…お前がいつまで経っても、結婚話を先延ばしにするからだ

！」
「大きなお世話です」
「考えても見ろ！？他の財閥や銀行の娘等貰って、乗っ取りの材料にされたらどうする！？一族の中から嫁を迎えて、絆を磐石にするのが得策だと思わないか！？」
「確かに、一族の絆は大切かもしれない…実際、ガタガタですからね」
「そうだろう！？だからこそ…」
「メリッサと結婚はしません」
「エドワード！？」
私は呆れた様にケントの顔を見詰めた…全くこの男は…全て話してやらないと納得出来ないというのか！？
「では…メリッサと結婚するとして、私に何のメリットが有ると言うのです？」
「メリットだと？」
「そう…確かにメリッサは美しい女性には育ちましたが、性格は破綻している。彼女の我儘と叫び声に、毎日付き合えと言うのですか？あの浪費癖や浮気癖も相変わらずだ。大体自分に傅く男じゃないと、アレの相手は務まらないでしょう？それとも私に、家に帰ってメリッサに傅けとでも？冗談じゃありませんよ！？」
「…」
「それに、貴方は私の義父としての立場を利用しようという肚でしょうが…そうはいきません。使い込んだ会社の金は、きっちりと返して頂きます」
「お前…知って…」
「当たり前でしょう？就任間もない若造だからと、侮って頂いては困ります。何なら、今すぐにでも長年に渡る横領罪で訴えてもいいんですよ？そうすれば、貴方に払う退職金を出さずに済むし、貴方の家と別荘、家財を差し押さえる事も出来る」
「…それは…」

「無駄な計画を止めて、メリッサが暴走しない様に見張る事です…これ以上私を怒らせない事だ……わかりますね、叔父上？」
ケントは、青い顔をして項垂れた。
「折角用意して頂いた婚約発表の計画は、ありがたく使わせて頂きますよ」
「何だって！？誰とだ！！誰と婚約するんだ！？」
青くなったり赤くなったり、忙しい男だ…。
私は、壁際で緊張して立っている華奈子に手を差し伸べた。
「華奈子…こちらに…」
引き攣った顔でフルフルと頭を振る華奈子に、私は立ち上がり視線を絡めたまま近付いて抱き締めた。
「…誰だ？」
「叔父上も、良くご存知の筈だ…何しろ、貴方が日本から連れて来いと、私に指示したのですからね」
「…まさか…ドラゴンの末裔かっ！？」
「そう、彼女が廣徳華奈子…私の愛する女性です」
「待て、エドワード！！有り得無いだろう！？ドラゴンの末裔だぞ！？私達一族の仇の…エメラルドを盗み、祖父母を死に追いやった…」
「会長から聞いていないのですか？全ては、誤解だったのです。エメラルドは…あのブローチは会長に返された…華奈子を含め彼女の一族は、あのブローチをずっと守って来たのです」
「しかし…いや、会長が…父上が許す訳が無いだろう！？」
「会長は了承済みです。何の問題も無い…まぁ、反対した所で、当主の決定に異は唱えられませんがね…」
震える華奈子を胸に抱いたまま、私はケントを睨み付けた。
「明日、皆が集まった席で、親族には発表します。宜しいですね？」
ケントは苦々しい顔をして一礼すると、部屋を出て行った。
「…華奈子」
華奈子は私の腕の中で小刻みに震え、崩れ落ちそうになった。

そっと抱き上げてソファーに座らせても、私の胸から顔を上げない。
「華奈子…もう覚悟を決めてくれ」
「…」
「事態は動き出した…もう誰にも止められない…いや、私が止めさせない！」
「……エド」
「これからも、辛い思いを沢山する事になるだろうが、私が守る…お前の事を、一生掛けて守って行くから…だから、お前も私の為に耐えてくれ！」
「……それが…貴方の為になるの？」
「そう…私の為に…」
「でも、さっき言っていたわ…一族の絆を磐石にしないといけないって…メリッサ様との結婚が嫌なら、リディア様と…」
「リディは、私と結婚したく無いと…彼女の方から断って来た。叔母に納得させる為に、私から断った形を取ったがな」
「でも…メリッサ様が…きっと納得されないわ」
「そうだろうな…だから、叔父に牽制する様に言ったのだ。我身可愛さに、必死になるだろう…一族と言っても、彼の場合建前に過ぎない。彼の容姿を見ただろう？」
「え？」
「アイスブルーの瞳にプラチナブロンド…彼は、祖父の息子では無い…祖父の愛人だった彼の母親が、どこの馬の骨ともわからない男の種で宿した子供を、祖父は引き取った…愛人を叩き出すのと引き替えにね」
「…」
「祖父は正妻を持たなかった…私の祖母は父を産んで直ぐに他界したが、後の2人共に籍を入れなかった。メリッサの祖母は知らないが、リディの祖母には面識が有る…リディに瓜二つの陽気な人で、生涯祖父の側に居てくれた。祖父を、軽蔑するか？」
「いいえ！」

華奈子はやっと私の顔を見上げ、潤んだ瞳で頭を振った。
「私にも…理想の家庭という物は有るんだ」
「どの様な？」
「幼い頃に見た、両親の様な…愛し合い、慈しみ合う、穏やかで心安らぐ…お前となら築く事が出来ると思う…いや…華奈子とでなければ築け無い…」
「…私は…臆病者です」
「まだ…怖いのか？」
「…堪らなく怖いの」
「愛している、華奈子…」
深く彼女に口付けを落として抱き締めると、華奈子は胸に擦り寄りクフンと鼻を鳴らした。
ブティックで洋服やドレス、その他靴やバッグ等一通り揃えて屋敷に帰った途端、メリッサとリディアの口論が玄関ホール中に響いていた。
「何事だ、騒々しい！？」
私が声を粗げると、リディアが慌てて叫んだ。
「駄目よ！メリッサ！！」
怒りの為に目と眉を吊り上げたメリッサが、私達の前にツカツカと歩み寄り、私に怒りの一瞥を投げると、いきなり華奈子に平手打ちを加えた。
体勢を崩し倒れた華奈子に、メリッサはそのまま息を上げながら足蹴にする。
「止めないかっ！！」
メリッサを引き剥がして華奈子を庇うと、リディアがすかさずメリッサを後ろから羽交い締めにした。
「大丈夫か、華奈子！？」
「泥棒猫っ！！大人しそうな顔をして…私の事を騙してたのねっ！？」
「メリッサ、止めなって…カナコが悪い訳じゃ無い…」

「貴女だってそうよ、リディ！？皆で私の事を馬鹿にして、笑ってたんでしょ！？」
「そんな事無いわ！」
「大体、そんなイエローモンキーのどこがいいの！？そんなチンクシャで不細工な女！！エド、貴方迄可笑しくなったっていうの！？」
「止めないか、メリッサ！！それ以上、華奈子を愚弄する事は許さない！！」
メリッサはリディアの腕を振りほどくと、私の元にフラフラと歩み寄り、華奈子を庇う私の前に座り込んだ。
「エド…エドワード…バークレイ家の花嫁なのよ？世界中が注目する夫婦なのよ？美しい貴方の隣に立つのは、この私以外に有り得ない…カナコじゃ、釣り合いが取れる訳が無いわ！」
「黙れ、メリッサ！！」
「第一、カナコが可哀想だと思わないの？常に貴方と見比べられるのよ？確かに秘書としては有能だけど、所詮それだけの人間よ。バークレイの女主人の器じゃ無いわ！」
腕の中で、華奈子がビクリと痙攣し震え出す…その躰を優しく撫で、腕の中に囲い込むのを見て、メリッサが再び熱り立った。
「退きなさい、カナコっ！！その腕の中に居るのは、貴女なんかじゃ無く、この私よっ！？さっさと荷物をまとめて、出て行きなさいっ！！」
そう叫ぶと、私達の後ろに置いてあった紙袋や衣装ケースを滅茶苦茶に荒し出した。
「いい加減にしろっ！！」
私は立ち上がり、メリッサの腕を掴むと、その頬に平手打ちを食らわせた。
「つっ！？」
「メリッサ…屋敷を追い出されたく無ければ、今直ぐに部屋に戻れっ！！」
赤くなった頬を庇い涙を溜めたメリッサは、放り出されたドレスを

見下ろすと唇を噛み締め、バタバタと廊下を走り去った。
「あぁ〜あ、滅茶苦茶じゃない…」
ラシードやフットマン達が散らかった荷物を拾い集める。
私は彼等に華奈子の部屋に荷物を運ぶ様に命じると、彼女を庇う様にリビングに向かった。
リディアが人数分の飲み物をメイドに注文し、溜め息を吐いてソファーに沈み込む。
「何があったんだ？」
「ケント伯父様が、メリッサに電話して来たのよ」
「成る程…それで…」
「確かにメリッサの行動は酷いけど…でもね、エド…」
「何だ？」
「彼女の言い分も、一理有るわよ？」
「何だと？」
「だってそうでしょ？貴方の結婚が注目されてるのは事実だし、そのお相手のカナコを世間が放って置く筈無いし…色んな意味で曝される覚悟が必要よね？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7223x/

翠玉慕情

2011年11月8日02時05分発行